

一元式の喚  
體の句と二  
元式の述體  
の句

句の不完を鑑別すべきものと斷じ、次に「句の性質上の種類別け」に於ては、主格・述格を具へないで感情的發表をなす一元式の喚體の句と、命題の形をとる理性的發表の二元式の述體の句との二大別となし、前者を感動喚體と希望喚體の二つに、後者を説明體・疑問體・命令體の三つに分け、次に喚體句と述體句との交渉を説き、例へば、「世の中はつねにもがもな」の如き述體句の形式から變形した希望の喚體句は從來何人も閑却して説かざるところといひ、また「ありがたの情や」・「あはれの物語や」の如く體言を骨子としてこれに状態をあらはす用言または副詞を連體格として加へ、述體の句を喚體の句に轉ぜしめ、賓格・述格の語が形容詞または情態副詞であるときは、例へば「君の弓勢の恐しさよ」に於ける如く主格以下の位置を變更せず、連體格に變じたり、賓格・述格を體言に變ぜしめたりしてこれを轉成することを説き、次に「語の排列に於ける原理」として、言語の本性が時間的精神的のものである爲に延長性を必とし、隨つてこれが言語排列を生ずる所以であるといひ、語の種類分けの上に存する、即ち實質用言を中心として考へるとき、觀念内容を對象とする場合にはそれに對して從屬し、または裝定する語は排列上、上行性を有し、陳述に從屬する部分は排列上下行性を有する差異がある。斯くて

- (1) ↑主格 補格 用言 (實質用言なる場合)
- (2) ↑主格 補格 賓格 用言 (實質用言でない場合)
- (3) ↑主格 陳述の修飾 情態の修飾 補格 賓格 用言

語の排列に  
於ける原理

用言は陳述  
の中心

賓格は補格  
より用言に  
密接

の如くなる。用言が陳述の中心であるから、補格は用言に從屬する度が主格よりも親密なるが故に近く置く。用言が實質用言でない時は賓格を置く。その位置は用言の直上に置かねばならぬ。蓋し賓格は補格よりも一層用言に密接の関係があるからである。修飾格は用言に從屬し、必要物といふより裝飾品であつて補格などより親密の度が軽いから、補格よりも上に置く。修飾格には情態に關するもの、陳述に關するもの等がある。情態の修飾語は用言の觀念に關し裝定するもの、陳述の修飾語は陳述の時にその對象となるものであるから、二者並用の場合には(3)の如く陳述の修飾語が上に置かれるといふ風に語の序列に關し一々理由をことわつてある。次に「文の種類及び文法學の極限」としては複文にあることをいひ、最後に語句の省略を説いて筆を收めてある。

日本文法學  
概論

山田博士は昭和十一年に至り、更に日本文法學概論を著された。この書は千二百頁に上る浩瀚なもので、三十年前に出された名著日本文法論を改定されたものと謂つて宜しく、氏の精力の老境に入つて益々壯んなことを想望せしめる。本書の文法論は根幹に於ては文法論と同じであるのは云ふまでもないが、他書の排撃や自説の主張は必ずしも必要がなくなつたので、すべての敘述が議論よりも説明を旨とされである。而して舊著と異なる主なる點につきては、氏みづから卷頭に述べてある。即ち舊著に未だ論及されなかつたこと、説いて尙委しくなかつた點、多少改めねばならぬ點などにつき、「その一二をいはば」と筆を起して、「形容詞に就きて、複語尾につきて、助詞『は』につきて、位格殊に主格述格につきて、

舊著を改め  
た箇所

日本文法要  
論との關係

及び汎く句論に於いて頗る改め加へた所がある」との言に徴してその相異を知るべきである。而してその改訂された要領は岩波講座の日本文法要論に發表されたものが多い。

現代文語の  
標準

第一章「文法學とは何か」に於て、言語が社會的歴史のものであることを述べ、語法は平安朝によるといふ説を斥け、現代の文語と目すべきものは「大體書籍雜誌等に於ける論説の如きもの、又所謂口語體以外の雜録類又詔勅法令に用ゐらるゝ文章の如きものをさすと知るべし。」と云つてある。從來奈良朝・平安朝・鎌倉時代の語法を究められた氏のことなれば、從來とは多少見解を異にされた意味が含まれ、既に前年に出された「漢文の訓讀によりて傳へられた語法」の精神もこれにこもつてゐると考へられる。全篇五十八章から成り、首の二章は序論といふべく、第三章「一の語とは何ぞや」から第二十九章「語の轉用」までは語論で、第三十章「語の位格概説」から第三十八章「修飾格」までは各品詞の用法上の横斷的研究で、運用論の中樞をなすもの、中に舊著には接續格を立てゝあつたが、この書にはこれを修飾格の變形又は特殊の場合として位格の一つに認めてない。氏は世のいはゆる接續詞は認めないで、これを副詞の中に併合してゐられる立場上から見ても當然である。第三十九章より第四十一章に至る三章體言・用言・副詞の用法は各品詞の用法上縱斷的研究であつて、第四十二章以下は句論である。前の論には口語には觸れてなかつたが、この書第一章には「純然たる言文の一致の行はるべきが如くに考ふるは一種の迷妄といふべし。」といひながら、文語と口語とは「なし得べくは之を近づかしむるを可とす。」と述べ

接續格を除  
去

言文一致は  
行はれない  
が、文語と  
口語の接近

禁止の「な」  
に係辭とす  
る可否

「は」の係辭

てゐられるが、今一步を進めてない。名詞の章には拙者・小生・迂生・手前の如きは從來代名詞と稱せられたるが、謙稱の名詞とすればよいとされてゐる。これらは品詞の移動を顧みない考のやうである。形容詞論中、「ごとし」は舊著には形式用言としてあつたが、これには形容詞の特別なものと取り扱つてある。複語尾の中、動詞の未來といひ、過去といふことは不合理とされることは前著と同様であるが、「けむ」は過去の事實を想像すると説明してゐるのは慥に矛盾といはねばならぬ。回想といひ、豫想といふも時制に與からぬことはないと云へぬであらうか。係助詞の中に「禁止のな」……その「な」を加へられたのは博士の一つの發見になつてゐるが、助詞は一切觀念語の上にはつかないとの規定に背く例である。元來は終助詞であるのが、ある意義を強調する爲に移動したと説くのは不倫であらうか。「は」の係辭が格助詞でないことは詳密に説かれてあるが、一つの辭が十分に分化せずして兩方に用ゐられるとするのは不當であらうかとの疑念も起らぬではない。これを非論理的頭腦の持主の謬見と評し去るのは少し手柔かく説かれたならばの感なきにしもあらずである。句論「複雑なる文及び文法學の極限」には複文にあることを説かれ、種々の基形を示されてある。合文の中、「とまれかくまれ、疾くやりてむ」の類を擧げてある。「とまれかくまれ」の如き、副詞句と見るか、條件を示す文とみるか人により見解も相違があらう。最後の未開展の句と略體の文の中、前者は一語で一文をなすものをいひ、これに對象を指すものとな屬性を示すものとの別があるといひ、心理學者が幼蟲狀の句と呼んでゐるが、もとより完全な句ではな

未開展の句

いが、放棄すべきでないとし、説明を加へてある。尙日本文法要論に述べたところがあるので、その詳説することをしなかつた。

漢文の訓讀によりて傳へられたる語法

山田博士は昭和十年に至り嘗て東北帝大で講義された原稿を整理して、「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」の一卷を出された。その巻首に「現代語法の本質」と題し、現時の普通文の語法は中古文法そのまゝではなくて、むしろ漢籍の訓讀によりて今日に傳はれる一種の語法の系統に屬するものといひ、福地櫻痴居士が明治今日の文章を論じた(明治二十六年)説を補正し、古來朝廷の公式の文は宣命以外のものは悉く漢文を用ゐ、維新當時まで嚴守され來つたので、維新後漢學者流の假名交り文と國文學者の用ゐる通俗文とが融合して一體となつたものといひ、次に漢文の訓讀の史的概観につきて、新羅の薛聰が

現代語法の本質

作つたといふ史道のこと觸れ、漢文訓讀はそれよりも尙古い時代に起つたものとし、ヲトコ點を説き、室町時代に至り岐陽和尚の四書新註の和訓といふことが起り、桂菴和尚の家法倭點が出で、それより徳川時代の道春點には和漢兩讀法を用ゐてゐたが、闇齋點に至り兩讀法すたれ、太宰春臺の和讀要領の如

家法倭點和漢兩讀法和讀要領

きから三平點の如き奇矯のものも生じ、後藤點始まりて一時天下を動かし、幕末には一齋點の如きもの天下を風靡し、日尾荊山の訓點復古これを矯めて道春點に復せよと絶叫したが、大なる反響なく、明治の御代に至り、權田直助の漢文和訓例の著が出で、穩健な訓みに復したことを概説し、次に漢文の訓讀に傳はれる語法の概観につきて、二様の別あり、一つは古代の語又は語法をそのままに傳へて今日

訓點復古

漢文和訓例漢文の訓讀に傳はれる語法の概説

に至れるもの、例へば「ごとし」の如き、一つは本邦固有のものでなく、漢文訓讀の爲に案出されたもので、例へば「いたりて深き」の「いたりて」、「天下及び百官」の「及び」、「朱雀院竝に村上の云々」の「ならびに」の如きが主要なるもので、その他固有のものながら漢文のよみ方の制約を蒙りて國語本來の意義用法のいくらか變質したものである。「未だ」の副詞に否定の陳述を要するやうになつたとか、「既に」が過去のものを呼起すやうになつた如きものもある。「蓋し」とか「豈」の如き譯出にあたり適當の邦語がなかつたので、文字のまゝに直譯して置いたのが新語となつたものもある。單語の上ばかりでなく、彼の助動詞の如きは、初に副詞の如くによみ、終に複語尾の如くにまた必ずまねばならぬもので、語法の上に影響を來すといひ、作文大體に擧げてある。

須宜 盍 當 令 將 教 遣 猶 使 未 縱

返讀字

の如き返讀字はそれであるといひ、以下に

ごとし いはく ねがはくば いはゆる なん／＼とす かへんなん なかりせば なかつせば しかり しかれども しかうして しむ……て

結 論

の數四十有餘を擧げ、一つ／＼につき漢籍に於ける古訓の多くの例を載せ、結論に前説を要約して、普通文の文法の研究には漢文訓讀の影響を深く掘り下げてゆかねばならぬ、この研究はそればかりでなく、口語法の上にも忽諸に附せられない、尙漢語漢文の我が國に入りてより二千年の星霜を経てゐるから、

國語の受けた影響は甚大なるものがあるといひ、最後に漢文訓讀法につきて歴史的背景とその根柢に横る理法とを概言し、些々たるが如く見える漢籍訓讀の上にも隠微なる社會人心の發動がトせられ、漢文の姿に即し而も國語を離れずして讀まうとすることが國語國文と漢語漢文との間に交渉を生ぜしめたもので、文化史の一面からばかりでなく、語法史の上から見ても密接の關係がある。随つて漢字廢斥の如きは今日の狀勢では言ふべくして行はれぬもの、如上の事實を顧みないでこれを排斥するが如きは角を矯めて牛を殺す類と漢字廢斥論者に忠言をして筆を收めてある。國語の簡易化を唱へる人から見れば、議論のあるところである。尙卷末に露人オヴィディエフ氏の質問に對し、答へた一書を附録として載せてある。

山田博士は昭和十五年四月「國語の中に於ける漢語の研究」を刊行された。これは曩に出された「漢語の訓讀によりて傳へられたる語法」の姉妹篇といふべく、序によると昭和六年東北大學に於ける講義に筆を加へたもので、この方面に於ける劃期的の著作といつて然るべきであらう。章を九つに分ち、第一章序論に國語中に於ける漢語彙の量的に多大あることを言海に於ける語數の統計などを引き、外來語としての漢語が多く歸化語の階段にあることを説き、研究の範圍と目的とを示し、第二章「漢語の傳來」には漢學佛敎の渡來より國語文獻に入つてゐる漢語彙を擧げ、上代より現代に至るまでの史的考察をとげ、第三章には「本來の漢語と認むべきものゝ範圍」には漢音語・吳音語・唐音語・古音語を例示して

國語の中に於ける漢語の研究

國語中に於ける漢語彙

漢語の特色

漢語の形態の觀察及び音の觀察

吳漢音の對應表

源流の觀察

漢語彙と文化史的の關係

佛典に見える音譯語は除いてある。第四章「漢語の特色」には單綴語で、音韻の組織が複雑なことをカール・グレンの統計を引いたりして音韻の組織を説き、語形の變化や擬人法の行はれぬこと、孤立語である爲に語の排列が文法上重要であること等を説き、第五章「漢語の形態の觀察」にはその成立につき六書説を詳述し、次に漢字の音の觀察に入り、その基本智識として韻鏡を講明し、我れに用ゐる漢字の音を吳音・漢音・古音・唐音・慣用音に分けて説き、中にも吳漢音について歴史的由來を詳かにし、その對應の表を作り、一々實例を擧げてその關係を明かにするに努め、唐音・倭音などにつきても精緻の考察がある。博士は漢學佛典にも詣りが深く、心空の法華經音義や小川本華嚴經音義私記や、承曆最勝王經音註などといった類をも自由に引据して考説してゐられる。但し倭音については異説がないでもない。第六章「源流の觀察」には東大寺獻物帳や和本本草や倭名鈔等により、動植礦物・醫藥顏料・寶貨布帛・人體病名より音樂建築・佛寺佛具・道路舟車・服飾調度・飲食・運動・遊戲等に分ち、流入した漢語を拾蒐して、學術並びに法制宗教上より眺めて、外來文化とその語彙との關係を文化史的思想史的に考察したもので、流入の手續よりの觀察は直接間接の交通輸入によるもの、漢學より傳はりたるもの、佛敎の言より傳はりたるもの、洋學の翻譯より生じたものゝ四項に分ち、外來の典籍を博渉して一々その出典を求められた努力は甚大なもので、これに我が文獻に見えてゐるものを加へられたならば、錦上添花を飾るものであらう。

漢語の影響により起つた國語の種々相

第七章には「漢語の國語の内に入れる状態」を説き、第八章には「漢語の影響により起りたる國語の種々の状態」につきて、音韻に及ぼせるもの、造語法に及ぼせるもの、語法に及ぼせるものに分ちて説き、第九章結論には名詞・數詞及び状態の副詞には漢語が氾濫してゐるが、その他には侵入を許さぬことを述べて筆を收めてある。前四章は後の準備的の考察で、第五第六章に全力をつくしてあるやうに思はれる。

### 三十八 大正末期より昭和へかけての文典（その四）

細江逸記の國語の相を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原相に及ぶ

「る」「らる」の語原に關し諸家の説をもとく

細江逸記氏は昭和三年岡倉教授の還曆記念論文集に「我が國語の相を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」の一論文を載せ、梵語には自動詞と所相詞とは一原から分れ、希臘語には能相所相の外に中相が存し、拉丁語には中相は亡びたが、或種の自動詞はそのなごりを留め、所相は反照性能相より來つたことより類推し、國語の古い時代には「ゆ」「らゆ」の如き中相が存してゐた。その「ゆ」「らゆ」が後に「る」「らる」となつたもので、「見ゆ」「聞ゆ」の如きは上古の中相の遺物に外ならず、「忘らるゝ身をば思はず」の「忘らる」は「忘れらる」の省略とする一般の説を斥け、中相の「忘らゆ」より來たものと解釋し、「る」「らる」の語原に關し、ホフマン、アストン、チェンバレン、金澤博士、大島博士等の得、有の重複添加説をもとき、「昔しのぼる」の如きを山田博士が受身と勢力とを混合したものであらうとの説をも難じ、勢力及び自然相は受身より夙く發生せるものと云ひ、所相は中相より發生したもので、我が國語では能相の一種に屬し、純粹の受動をあらはしたものでないといひ、また上古に於ける中相は一方所相となると同時にまた一方使役相をもあらはしたといひ、延約説をも斥け、各

動詞の原形 動詞の原形は四段活であつて、その時代には相の區別は形の上には見られなかつたが、それより二段活が生じて、こゝに記紀に於けるが如く能相中相の併立時代を生じたといひ、この中相はその本質上反照性を有し、また或るものは移動性を有し、この發達の方向を律したものは

- 反照・使役・他動の方則
- (1) 反照 受動 自他の方則  
 (2) 反照 使役 他動の方則  
 (3) 受動 使役の方則

の三つであるといひ、自動四段言より派生した新形は他動四段言の場合より複雑にして、反照使役他動の方則が極めて有力な活動をなし、その結果として中相の下二段言より更に所相の發展を見、反照性に終始する中相はこの場合には活動力弱く、或は獨立の自動詞の如く思はれ、或は別語に變じ、その成立形式は他動四段言の場合に於ける所相と同じきに拘らず多くは四段に轉じ、またその用途により幾多の變化を生じたと言つた。

その後永田吉太郎氏は昭和六年八月の國語と國文學に動詞の相に關する一論文を載せ、能相がまづ成り、その用途はひろく、國語大多數は四段活用を以て原始形とし、自動的に用ゐられた能相の中、單なる自動詞として残つてゐるものは四段活用の形をたもち、反照の意義の強められたものは新たな形を作つた。これが即ち中相にして、活用よりいへば、二段活特に下二段活に屬する大部分である。二段

永田吉太郎  
 動詞の相に  
 關する論

活の自動詞も他動詞も共に中相より發生したとし、他動から反照性中相を生じ、自動詞より使役性中相を生じ、自動詞より反照性中相 *u, nu, ue, o* の語尾を生じ、所相の發展を見ると一方には中相として起つた「冷ゆ」・「聳ゆ」・「肥ゆ」の如きはそのまゝ自動詞として取り残され、奈行變格は能相と中相との相混じたものかといひ、上一段は文獻以前には種々の形のあつたのを四段に統一された際に尙同化されないで取り残された形と想定してある。

國語の所相は中相より分け、中相はまたやがて能相の一種なれば、自動詞にて所相の作られることも亦當然で、中相より眞の受動の外に勢力能力敬語などを表すものを生じた。また拉丁語の *Dependent Verbs* に比して「納まる」・「明かる」の如きは半所相と名づけてある。氏の企圖は中相といふ意識を語形論に加へ、活用と並びて動詞の相による語形變化を認めようとする點にある。細江氏の所考に基き一步を進めてあるが、尙實證的の考察を深めねばならぬと思ふ。

時制の研究 細江氏は昭和七年泰文堂より時制の研究を出した。その前年輕井澤に於ける夏期大學講演に筆を入れたもので、英語の動詞のテンスの意義につきての研究であるが、國語の上にも對照して説いてある。章を動詞とその時制 *Present Tence, Present Perfect, Past Tence, Future Tence* の五つに分ち、博く歐洲學者の説を引いて *Tence* は普通一般に時の區別をあらはすと見るが、非常に無理が伴つてゐて當らない、と斷じ、畢竟するに思想發表様式の區別に過ぎないと、*Present Tence* は本質的に決して

直感直敘の様式・確認の語形

集注敘述の語形

目賭回想・傳承回想

現在の時をあらはすものにあらすして直感直敘の様式、Present Perfect は確認確述の語形である。Perfect は直斷性のもの、Imperfect は徬徊性のもの、Expanded Forms は通常進行現在、繼續現在と呼ばれてゐるが、英語に於ても後世は格別として、本義は Imperfect の徬徊性を一層高調させたもので、随つてこれを集注敘述の語形とす。Aspect には連續性と反覆性があるとす。以上 Perfect と Imperfect と Expanded の三つを總括して回想敘述とす。我が國語の助動詞「けり」と「き」とは回想敘述に用ゐるもので、これを目賭回想・傳承回想と命名し、一方を記録、他を對談とするは委しくないと論じ、次に Future Tence に關してはこれを豫想敘述と名づくべしといひ、想像推測の敘述であつて時の上から云ふべきでないとしてある。英語の上に説くのが主になつてゐるが、所々國文法に對比してある。尙歴史的現在と稱するものにつきても、ホーマーの作には全く存してゐない。ヘロドタスより盛んに用ゐ出したものであるが、これは修辭上の論であつて文法上のことではない。英語に於てはこの類に永久の眞理をあらはすもの、習慣的動作、反覆する出來事、未來に關することながら確實性を帯びる時等の敘述も皆現在形にてあらはすが、時の上から検討するに當らないことも述べてある。

歐米の學者の説を擧げて批判を加へてある中に Shall と Will との研究に關し米國の Charles O. Fries が千九百五十七年から千九百五十五年の間に出した五十篇の脚本につき總合的研究を行つたことなども紹介してあつて、その所説は它山の石となすに足るのである。

(The Periphrastic Future with Shall and Will in Modern English を參考)

現代日本語の表現と語法

指詞コッア

形式名詞

銜接動詞・接合動詞・聯成動詞・能所・移動・受給關係

心理學・音聲學の權威たる佐久間博士は昭和十一年に現代日本語の表現と語法の一書を厚生閣から出した。民族精神の所産たる文化財として日本語をその生々した現代の姿についてとらへ、その本質的なものをつかみ出す意圖を以て、昭和九年以來教育國語教育誌上に登載したものを纏め、再検討を加へてこの書を成したといふ。その前篇には代名詞、後篇には動詞を中心としたもので、指す語を大槻博士の分類によらないで、「コッア」の新しい術語を用ゐて共時的な指す語の語幹統一を説明してある。嘗て代名助詞と呼んでゐた「おくの方のは」に於ける「の」の如きを形式名詞と名づけ、その種別を細かに説き、動詞に於ては音便を説き、音聲轉化を論じ、自他の對立を圖式を以て現し、複合的動詞の接續の緊密の度によりて銜接動詞・接合動詞・聯成動詞の別を立て、準助動詞のかすくを擧げて移動の來往關係を受給關係に聯關せしめ、能所關係・移動關係・受給關係を説くことが詳かである。氏は本來の文法學者でない爲に思ひ切つて新しい觀點に立つて現代語の方則をつまらうとした。随つて新味に富むと共に部分的に首肯しがたいものも雜つてゐる。さうして國語教育や國語政策につきても熱意を以て意見を吐露してある。

現代語法の研究

同博士の現代語法の研究は昭和十五年に厚生閣より出た。曩に著された現代日本語の表現と語法の續篇で、形容詞以下動詞に至る後半を收めてある。ある體系を備へた鳥瞰的な語法論ではなくて、東京の

大正末期より昭和へかけての文典(四)

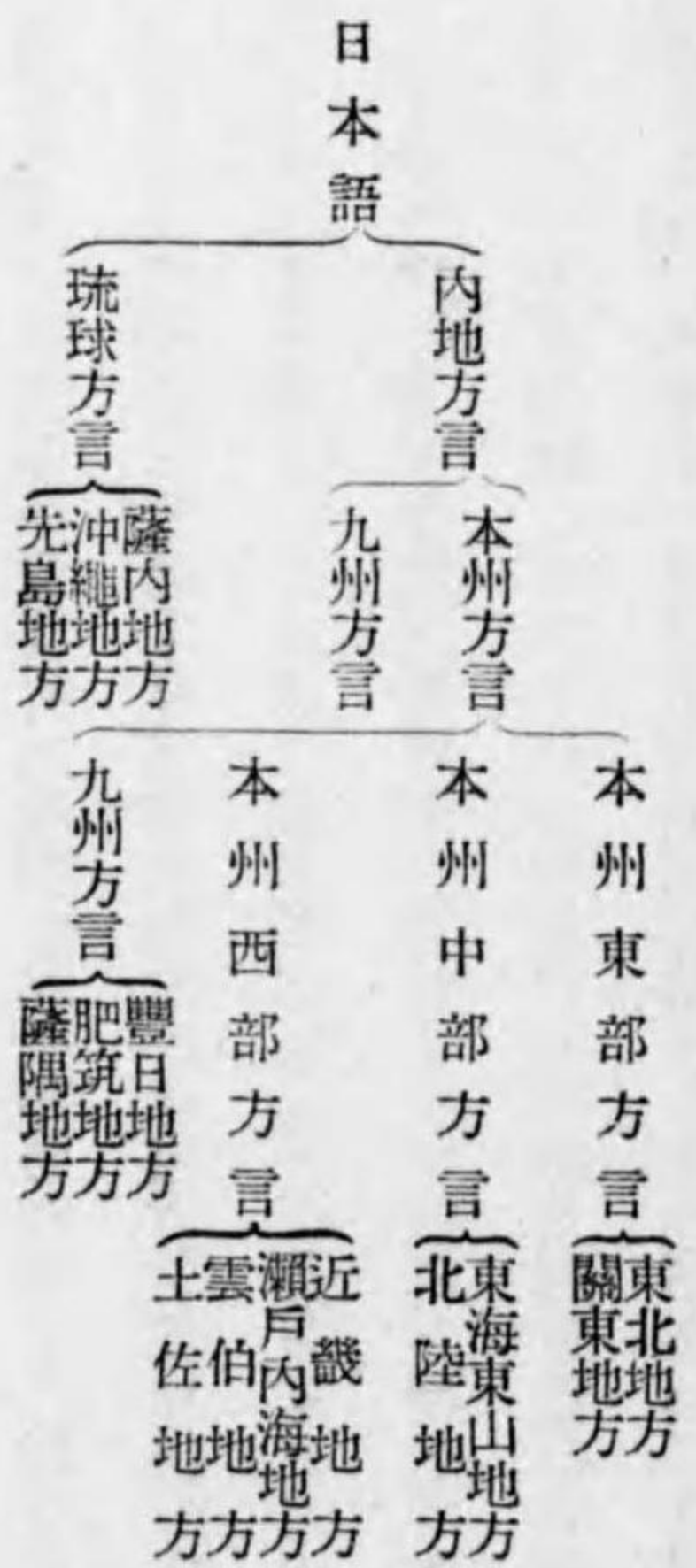
舊市域を中心して現に話される言葉につきて鑛脈を深く掘り探るやうな態度で研究されたもの、十年前から關心をもつてこれをしらべられたといふ。(而して江戸末期の文獻に遺つてゐて現代の表現と同じ用例のものを引證されてあるも結構である。)一つの詞をとり扱ふにもいろ／＼の點から考へ、標記に注意し、アクセントまで加へ、東京語の語感をあらはして出してある。古い文法の型にとらはれない。その最もかはつたものには吸着語といふ一項を立てた類である。これは松下氏が名づけた形式名詞や田丸氏の廣さ詞、橋本博士の立てた準用辭等から工夫したもの。その所論は昭和十三年の國語國文に寄せられた所論に據つたもので、名詞から性狀についての語、副詞的及び接續詞的なもの、時に關するものに亘つて吸着語を説いてある。著眼は新しく面白いが、議論の多いことは云ふまでもない。「は」と「が」の區別に關し、「雪は白い」といふのは一般的で、「雪が白い」は特殊的な表現と區別した如く卓見も少くないが、「白いのを下さす」の如き例中の「の」を形式名詞としたり、「ねえ、あなた」の「ねえ」の類を助詞としたり、陳述の詞に伴ふ前後を結びつける役割をなすもの、例へば「たとひあの人さういつたにしろ」に於ける「しろ」までを接續詞の機能として説くが如き一讀しては首を傾けられるものも雜つてゐるが、兎に角音聲學・心理學の權威である氏の著として新味に満ちたものと思ふ。かゝる新しい觀點に立つて從來と異つた新體系の確立されるに至らば、斯界を益することが尠くないであらう。

「は」と「が」の區別

吸着語

### 三十九 昭和期に於ける方言の研究

國語調査會の事務が大正五年六月文部省普通學務局で取扱はれるやうになつてから、方言の調査は東條操・湯澤幸吉郎兩氏が専らこれを擔當し、調査主任の保科孝一氏の下にその業を進め、音韻分布圖二百枚、口語法三百五十枚、音韻口語調査報告も脱稿してゐたが、出版に至らない中に大正十二年の大震災によつて一切烏有に歸したのは惜しみても餘ること、特に東條氏の南方方言資料は印刷纔に成つて一本も留めないで、同時に灰燼に歸したのは自分どもの體驗から云つても頗る同情に堪へない。氏は昭和二年方言地圖及び國語の方言區劃を發表し、その區劃を次の如く區別した。



昭和期に於ける方言の研究



東部・西部の  
外中部方言  
域を立つ

國語の方言區劃の一冊は同上地圖の説明書であつて、篇を方言の研究、方言區劃に關する諸説、國語と琉球語、古代語と九州方言、本州方言と東西方言境界線、本州の諸方言、大日本方言地圖、方言研究法の八項に分けて説いてある。従來東部方言と西部方言と二大別にして來たのをその中間地帯の本州中部方言を新設し、各方言區を更に小別してその差異を説いてある。長年月に亘り調査された結果をこのパンフレットに要約して示されてある。例へば九州方言の本州方言に對立するのはジ・ヂ、ズ・ヅの區別あること、本州のオ母音がウ母韻に轉ずるものが多いこと、動詞・助動詞に二段活用が昔のまゝに残つてゐること、形容詞に特別なカの活用の残つてゐること、係結のなほ残存してゐること、換言すれば、九州方言には室町時代以前の語法の佛が存する點を挙げ、同じ九州方言でも薩南地方は入聲の語尾や短呼の傾向が著しいとか、形容詞には「か」の如き形があるとか、二重母韻の變化が異つてゐる點で他と異るといふ如く、それ／＼各地の方言の特徴を示してある。翌年六月には方言採集手帖を出し、方言研究の奨励に努めた。

薩隅方言の  
特徴

東條氏が方言を言語學的に研究されるに對し、民俗學の上からこれを研究されたのは柳田國男氏で、氏は大正五年四月發行の郷土研究第四卷第一號に方言欄を設け、これを論じ、東條氏はこれにも刊行方言書目を發表し、先に焼かれた南島方言資料も昭和五年には増補訂正の上發刊されるに至つた。

方言採集手  
帖

柳田氏の方言に於ける本格的活動は昭和に入つてからであつて、同二年四月の人類學雜誌(四十二卷五號)に蝸牛考を發表し、爾來民族その他の雜誌に矢繼ぎ早に有益な澤山の論文を發表して、漸次勃興し來つた方言研究の機運を促進指導した。

柳田國男

昭和五年七月言語誌叢刊の第一冊として蝸牛考が刊行された。この書は名は蝸牛考であるが、實質は方言學概論とも云ふべきもので、その内容は岩波の文學講座に於ける東條氏の方言研究の概觀に紹介されてゐるから茲には略する。中に説いてある方言周圍論は名高いものである。實に昭和時代に於ける方言學の生みの親は柳田・東條兩氏であることは云ふまでもない。氏の方言に關する論文の當時に於ける主なるものを挙げると、次のやうである。

蝸牛考  
昭和五年七月言語誌叢刊の第一冊として蝸牛考が刊行された。この書は名は蝸牛考であるが、實質は方言學概論とも云ふべきもので、その内容は岩波の文學講座に於ける東條氏の方言研究の概觀に紹介されてゐるから茲には略する。中に説いてある方言周圍論は名高いものである。實に昭和時代に於ける方言學の生みの親は柳田・東條兩氏であることは云ふまでもない。氏の方言に關する論文の當時に於ける主なるものを挙げると、次のやうである。

柳田氏の論  
文

地名考説 民族第二卷三號 昭和二年

方言と昔 アサヒグラフ 二十九回  
に頁る 昭和三年四月より十月に至る

蝸牛考 人類學雜誌 同 四月より七月に至る

農民史研究 斯 民 同 六月より八月まで

民間些事 近代風景 同 七月より九月まで

少さきものゝ聲 信濃教育 同 九月より十一月まで

方言研究會  
が所々に起  
る方言發刊

かくて東京帝大の國語研究室内の方言研究會を始め東京文理大の方言研究會、廣島文理大の廣島方言學會、京都帝大の近畿國語方言學會、國學院大學の方言研究會が次第に生れ、昭和六年九月より春陽堂

昭和期に於ける方言の研究

言語誌叢刊にて方言といふ毎冊八十頁の月刊雑誌の刊行を見るに至り、更に刀江書院よりは言語誌叢刊の如き純學術書が叢書體にて發刊され、また各地に於てその地方の方言集の刊行されるものが夥しく、枚舉に追いつない程である。特に個人出版として騰寫版に附したものは頗る多く、盛岡の橋正一氏の一言社にては方言學概論、言と土俗が昭和五年八月よりすでに二十五冊を出してゐる。氏は昭和十一年に育英書院より方言學概論、方言讀本を、昭和十二年には厚生閣より方言讀本を刊行し、近くは騰寫版を用ゐて方言辭書を出さうと試みたが病歿して完成するに至らなかつた。

雜誌方言の内容

春陽堂から出した雜誌方言には、服部四郎氏の國語諸方言のアクセント概観、東條氏の方言研究の方言特輯號

法、刊行方言書目解題、柳田國男氏の音訛事象の考察等有益な論文を以て充たされ、特輯號としては、瀬戸内海方言特輯號、琉球方言特輯號、アクセント特輯號を出し、多くの讀者をつないでゐたが、昭和十三年上田萬年博士逝去せられ、その追悼記念號<sup>丁度</sup>を以て終刊としたのは惜しいことであつた。

國學院大學方言研究會風位考資料

國學院大學方言研究會にては、八丈島中之郷村方言集以下各地の方言集合せて二十一集を出し、別冊として柳田氏の風位考資料を出した。

言語誌叢刊

言語誌叢刊は第一期より第三期に至る毎期各四冊づつ合せて十二冊刊行された。

柳田 國男 蝸 牛 考  
東 條 操 南島方言資料

三 矢 重 松 莊内語及語釋

山口 麻 太郎 壹岐島方言集 (以上第一期)

小 倉 進 平 仙臺方言音韻考

金田 一京助 國語音韻論

大田 榮 太郎 滋賀縣方言集

荒 垣 秀 雄 北飛方言集 (以上第二期)

湯澤 幸 吉 郎 徳川時代言語の研究

杉村 楚 人 冠 和歌山方言集

内 田 武 志 鹿角方言集

眞 山 青 果 仙臺方言考 (以上第三期)

南島方言資料  
琉球の五方言

以上の中東條操氏の南島方言資料は昭和十二年八月第二版が世に出た。謂はゆる南島は沖繩を指してある。皇紀八世紀の頃、倭言葉から分れた琉球方言を首里・大島・國頭・宮古・八重山の五つに分ち、天文・歳時・地理・金石・動物・植物・人倫・肢體・衣食住・器財・人事・雜の十二項に分ちて語彙をあげてある。語数は約七百、南方方言として特色あるものは悉くこれを收め、次に文例として六十章の短文を載せ、その表記にも深甚の注意が加へられてある。資料としては沖繩縣で撰んだ沖繩對話や沖繩

資料の概

昭和期に於ける方言の研究

語典や混效驗集やチェンバレンの論文などを参訂された上に、この地方出身の伊波普猷・宮良當壯兩氏の首理の部八重山の部の補註を加へて正確を期し、尙維新以前に於ける南島方言の貴重な資料を蒐集されてある。康熙年間に成つた徐葆光の中山傳信錄、明の萬曆の頃茅伯符の書いた華夷譯語、明の周鍾等の編んだ音韻字海三部の琉球語對照を擧げ、又別に西曆千八百十八年ロンドンに於て發行されたキャプテン・バジル・ホールの航海記の附録ヘルバルト・ジョン・クリーフォルト氏の英琉語彙の拔萃をも加へてある。著者の用意の周到なことが窺はれる。南島方言に關する琉球人、支那人、西洋人の研究がこれにコンデンスされ、更に研究を進めた金字塔たることは世の定評のあるところであらう。初刊が烏有に歸したのを更に手を加へて再刊されたことを多しとする。

南島方言の  
金字塔

山口麻太郎  
壹岐島方言  
集

近畿地方と  
の音韻との  
比較

壹岐島方言集は山口麻太郎氏がその郷國の方言を明かにしようとし、十數年の努力の結果に成るものといふ。始めに音の表記法・音韻轉訛の一斑を擧げ、一語々々にアクセントをも附してあり、その語彙も體言・用言等の獨立詞ばかりでなく、助辭の類をも採り、單語には品詞別から活用あるものはその種類を記し、最後に東條氏の方言採集手帖による文例の方言譯をも載せてある。この書によりこの地方の母音は本州のイ音が *yo* と發音され、その音便が *e* となつてゐて、室町時代末期の京畿・中國等の音を保存してゐることが分る。また連聲の方にては助詞「は」の前にある撥音は「は」と合して「な」となる。例へば、

この蜜柑は酸つばいから捨てようか

コヌ蜜柑ナスイカケニスチュー

と呼ぶ。この一例によりても「の」を「ヌ」と呼んだ古音が保存されてゐることが知られ、また敬語の「ます」が「マツスル」等一つ／＼比較するに、語音變轉に面白き現象が存することが分る。

續壹岐島方  
言集  
自然環境と  
語彙

「ソレ」が「ソ  
リ」  
「コレ」が「コ  
リ」  
「ウーカ」

氏は昭和十二年に續壹岐島方言集を出した。本書は語彙・音韻・語法の三篇より成り、語彙篇には捕鯨・農業及び牛に關する語の比較的多いの心づく程自然環境を想はしめるものがある。總語數は二三八二語で前篇と略相同じく、この國の詞は肥筑方言に屬するも、邊境の地その民族民彙は氏の別著壹岐島民俗志に照し見れば一層興味と理解とを助けるものがあらう。指詞の「ソレ」・「コレ」が「ソリ」・「コリ」と發音され、「爲るか」が「スツカ」・「泣くか」が「ナツカ」・「多いか」が「ウーカ」となつてゐるのを見ると、その音韻變化の一端が窺はれる。

言語誌叢刊の一篇莊内語及語釋は三矢重松氏の著に幕末に於ける氏家剛大夫の莊内方言考及びその舅の堀季雄の濱荻とを合綴として東條氏の出したもの。訛の多い莊内方言を語法・音韻・語彙と三方面に分擔し、過去・現在に於ける三つの研究の一つに集めてあつて、この地方の方言を縦に見られるもの、三矢氏の研究は既に述べて置いたから、茲にはその内容を略する。

次に第二期の叢刊に就いて略説して見る。その中小倉進平博士の仙臺方言音韻考は嘗て國學院雜誌に

昭和期に於ける方言の研究

仙臺方言音  
韻考

莊内語及語  
釋  
莊内方言考  
と濱荻

仙臺方言音韻組織考 濱 荻

掲載された「仙臺方言音韻組織考」を基とし、これに増訂を加へられたものと、江戸の仙臺邸に仕へてゐた侍女匡子が仙臺に下つて住むこと十餘年の間に拾録した濱荻とを合せたもので、博士の音韻考の方は總論の首に仙臺方言に關する文獻十餘種を解説し、仙臺方言の輪廓を知らしめる爲に大里源右衛門の編にかゝる「仙臺方言」の序文と方言歌・童謡・子守歌・手毬歌を擧げ、國際音標文字を以てその發音を示し、後に註釋を加へ、第二編には母韻と子韻とその結合せるものとを詳説し、國語の標準音と仙臺地方の發音とを對比してその特徴を明かにしてある。研究の部としては第二編が眼目となつてゐる。この濱荻は仙臺方言千百三十語を收め、別人の筆に成る解釋と考證とを添へてあり、補遺も四百語に上つてゐる。

大田榮太郎 滋賀方言集

滋賀方言集は大田榮太郎の編にかゝり、語數千五百語に上る。この書は明治三十年十月東京帝國大學文科大學の依頼によつて滋賀縣の各郡で編んだ「方言調査書」を主とし、新舊年代の異なる既刊未刊の調査を加へて編纂したもので、表記の方は正しくゆかないが、方言釋語の下に使用地方及び書目名を擧げてある。氏は方言集覽稿を出し、福島・栃木・三重・福井・奈良・和歌山各縣の方言集をも出した。

金田一京助 國語音韻論

言語學者でアイヌ語やアイヌ文學の權威である金田一博士が方言研究の槩として言語學叢刊第二期の一篇として世に贈られた國語音韻論は趣味にみちた敘述を以て我が音韻の組織・音韻の變化その方則を講明された一本であつて、第一章緒論には人間の言語は内容と形式とに於て分節的なのものといひ、

人間の言語は分節的

乾葡萄になつた言葉と生きた言葉と 音韻組織 音韻變化

三十六則 當爲の法則 必然の方則 可能の方則

國語科學講座 中の方言部

猫の言葉を四十五語、猿の言葉を六十四語を開き分けた學者もあるが、それは意味が違ふといひ、この言語には體としての言語と用としての言語とがあり、前者を言語、後者を言語活動と名づけ、この二つを混同してはならぬといひ、感聲は語句分化以前の原始的表現形式と斷じ、言語は傳承に由る存在であるから方言の發生は自然的なものといひ、日本語の方言區域に及び、柳田氏の周圍説と他の學者の二大對立説とも觸れ、方言研究は乾葡萄になつた文書上の言葉とちがひ、生きた言葉を取扱ふものであるから、やがて明日の國語學となるものと方言の爲に氣聲を揚げてある。第二章には音韻組織を論じ、國語に於ける音節は洋語のシラブルと異なることを論じ、開音節の多きこと、「ン」も促音「ツ」も一音節と認め、第三章には音韻變化を詳説し、これに脱落・同化・相通・轉倒の四種があり、それに更に細かい區別が存すといひ、三十六則を立てゝある。第四章には音韻方則を擧げ、第四章には音韻方則を論じ、音韻の方則は論理學等のいふ當爲の法則や、理化等の自然現象を論ずるに方り常に唱ふる必然の方則とは別で、可能の方則が行はれてゐるといつて、音韻の性質を論じてゐる。この書は方言研究にたよりになるばかりでなく、國語音韻史の概觀をも窺ふことが出来る。この書は後に増補された。

明治書院で計畫した國語科學講座のことは別に項を設けて説くが、その第七輯には方言に關するもの八種を載せてある。その執筆者と題目とは次のやうである。

方言學概説 東 條 操

昭和期に於ける方言の研究

現代

BOX

新語論	柳田國男
言語地理學	江實
本州東部の方言	橋正一、東條操
本州西部の方言	東條操
九州の方言	吉町義雄
琉球の方言	伊波普猷
方言のアクセント	服部四郎

新語論

中に柳田氏は方言といふ語の範圍の擴大するを嫌ひ、言語の時代差と地方差は或る程度までは原因は共通であると云ひ、次に從來各所に於ける方言蒐集のその道を得てゐないことを論じ、訛語の種別を説き、音訛と語法訛の二つを判別せねばならぬとし、同語意識の崩壊、古語の保留、複合保存、限定保存と意義分化、新物新語、舊物新語、音興味と語形興味、異名と戯語と隱語、動詞増加、形容詞の缺乏、癖と能力の如き諸項を擧げて、各般の言語現象を確實に面白く説かれてゐるのが新語篇である。後増補して國語史として刀江書院より出した。

民俗語彙

氏は多くの民俗語彙の結集をなした。山村語彙といひ、分類農村語彙といひ、分類漁村語彙といひ、その他婚姻習俗語彙、産育習俗語彙、送葬習俗語彙、禁忌習俗語彙、服裝習俗語彙、歳時習俗語彙、居

方言と方言學

住習俗語彙等十指を屈するばかり多くの書を出された。その蒐集にいかに努力されたか推知される。氏の方言研究に於ける功績は今更に言あたらしく云ふまでもない。

東條氏は昭和十三年六月方言と方言學とを刊行した。氏は方言學の樹立に熱心すること十年一日の如く、斯くてこの著を見たのである。一體昭和時代に於ける方言に關する編著は雨後の筍の如くに多く出たが、これを研究する目的が様々であつて、明治二三十年代に於ける如く、尙標準語制定を目的としてゐるものがある。國語史の傍證を得る爲に調査してゐるものもある。特殊な部類の方言を蒐集してゐる民俗學者もある。方言といふ語自身からはす内容が區々である。これを學的に扱へば、地方言語事實といふべく、これには(一)標準語に共通するもの、(二)中央語の訛るもの、(三)中央語に見當らないもの(假に土語といふ)の三つを含んでゐる。音聲學の立場に於ては(一)を、言語地理學の方では(二)を主とし、これに(二)を加へ、方言學は(二)を主とし、(三)を従とする。而してこれを研究するに各地の記述研究を先とし、比較研究を後とすべく、その音聲の方面では佐久間鼎、神保格、服部四郎氏等の研究があり、フランスに發達した言語地理學の研究は比較の一方方法であつて、柳田氏の蝸牛考の如きはその應用で十二分の功を收めたものであるが、方言學の立場は別にしてその樹立に努めた。方言學は實に氏を以て起つたとするに異論はあるまいと思ふ。

方言研究の態度

方言と方言學の内容

昭和期に於ける方言の研究

BOX

を主としたものでその内容は主として國語科學講座の方言學概論をとり、第二篇は方言研究史の概要を敘したもので、岩波の文學講座の方言研究の概観を補筆し、第三篇は各地方言の素描で各その特色を記述し、第四篇は方言文學で、中に萬葉集の東歌・防人歌の研究過程をも示し、第五篇には國語方言學の樹立を説き、附録には刊行方言書目を挙げ、次には國語調査委員會取調事項を載せてある。この方面の良著で指教をうけるものが少くない。氏の二大目的の一つとしてゐられる方言辭書の編纂もやがて達成される日の近からんことを望んで止まない。

#### 四十 國語の音聲學研究

エドワーズ

日本語の音聲的研究

我が日本語の音聲を實地に研究した外人は英人エルネスト・リチャード・エドワーズを最初に挙げねばならぬ。氏の我が邦に來りて新村出、八杉利貞兩氏の助を得、各地を旅行してこれが研究に從來したのは夙く明治三十三年から四年にかけてのことであつた。氏の日本語の音聲的研究 *Etude phonétique de la langue japonaise* が巴里のソルボンヌ大學に提出して學位を得たのは西曆一九〇二年のことで佐久間鼎博士の如きもこの書が機縁となつて音聲學の研究を遂げられたと聞いてゐる。

高松義雄氏の譯述

この原文は昭和十年高松義雄氏によつて譯出され、「日本語の音聲學的研究」として厚生閣より出版された。今日から見れば幼稚なところもあるが、我が國の音聲を實驗的に調査した最初のものと言へる。日本語の語音を分析して英佛獨のそれと比較し、彼我の口蓋圖なども對照してある。它山の石として見るべきもの。高松氏の譯書には語音の表記、參考書、術語の解などを附録としてある。

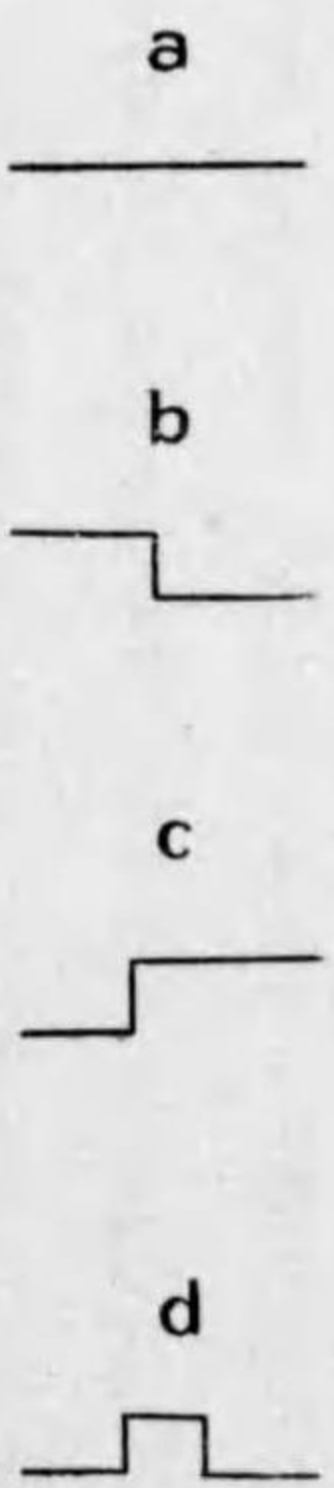
文部省の國語アクセントの調査

大正に入つて文部省は國語調査主任保科孝一、國語調査囑托安藤正次、東條操、神保格、佐久間鼎五氏に命じて國語のアクセントに關する一般的の事實を調査せしめ、小學校及び中等學校に於ける教授上

アクセントとは何か

の参考にする目的を以て「アクセントとは何か」のパンフレットを編修せしめ、大正五年普通學務局より出版して全國に頒布した。

この書、前編はアクセント一般に関する説明を載せ、後編は尋常小學讀本卷一二及び尋常小學國語讀本卷一二にアクセントの符號をつけ、練習用に充てたものである。前編は文字と發音、發音の識別とアクセント、音の高低とアクセント、音節といふこと、國語のアクセントとは何か、言葉の何處が高くなるか、複合語・連語とアクセント、話の抑揚、アクセントの地方的相違、東京語のアクセントの特徴の十項に分け、實例を挙げ、平易に説いてある。一音節・二音節・三音節及び四音節以上のものに



の如く、初から終まで同様の高さのもの、高まりが初の方にあるもの、高まりが終の方にあるもの、高まりが中部にあるものを分ち、關東方言と關西方言との間に著しい相違があり、東京語のアクセントの特徴として、特に關西語のアクセントの傾向と異なる點は平板的な型式のアクセントが比較的多く聞かれる等のことを述べてある。

佐久間鼎國語のアクセント

佐久間鼎氏は心理學叢書的一篇として大正六年十一月「國語のアクセント」を出し、アクセント一般

アクセント

アクセントの形式

上型と下型

上中型・下中型

國語の發音とアクセント  
平板式と起伏式  
アクセントと品詞との關係

國語アクセント講話

を科學的に考察した最初のもので、その前編には標準音と訛音、連続音及び音節、アクセントの意義、アクセントの形式、文の抑揚と語のアクセントと章を分つて論じ、後編は國定讀本につきて實例を挙げ實地教育にも資せようと企てた第一書である。氏は機械を用ひ、實驗的方法により國語のアクセントの形式は主として高低關係によるものとし、これを上中下の三階段に分ち、一音節語には上型と下型との二種があり、二音節語には更に下上型が加はつて三種となり、更に三音節以上の單語にも種々の型のあることを委しく説き、漢語の二音節で上中型であるものが、國語化しては下中型または下上型に推移することも明かにし、文の言葉の調子は低い所に始まつて次第に高まり、曲節を経た後再び低い方へ落ちてゆく抑揚法等をも心理學的に説明した。

大正八年氏は更に國語の發音とアクセントを出し、前半に發音、後半にアクセントを論じ、アクセントには平板式と起伏式(高さについていふ)の二つあることを述べ、次にアクセントと品詞との關係を考へて名詞中、三音節以下の普通名詞が固有名詞となるときは上中型の擡頭式となり、數詞は特に明瞭に言ひあらはす爲には起伏式を用ひ、副詞及び疑問並びに不定稱の代名詞は擡頭式をとり、用言には平板式と起伏式があつて、その中、起伏式は上中―下上―中の型を出でないと斷じ、發音の上にも新説を立て最後に發音統一の方策をも述べてある。

大正十二年氏の公にした國語アクセント講話は文部省が彙に出した「アクセントとは何か」の説明を

秋田・青森  
地方のアクセント

したものだといつてあり、アクセントの一般のことからその性質を説き、末には東北地方特に秋田・青森地方のアクセントをも説いてある。彼の地方のズーゾー辯は、變的母音の使用に根ざすのであるから、これを矯正するには、イ・ウの正常な母韻の復活から始めねばならぬことより、進んでアクセントの相違に説き及んでゐる。

國語音聲學  
講話  
國語音聲學  
概説

昭和四年に氏はまた國語音聲學講話を出し、昭和八年にはこの二書の改訂増補本といふべき國語音聲學概説を出した。これらの書は何人にも分り易く通俗的に説かれてあるが、併し一書が出るごとに新味を加へ、斯學の發展に貢献するところが多かつた。

日本音聲學

氏は別に日本音聲學の大著を昭和四年に京文社より出した。その前篇語音篇はすべての國語音の解説を殆ど述べつくしたものと云ふべく、實に大正以來の大著で、一つの音を説くにも内外先行の文獻を遍く引用して自家の説を立てゝある。その委しきは音聲學史などに譲つて蛇足を添へることをしないが、その集大成した點からいへば、彼の實驗音聲學の權威ルスローに比すべきものと云はれてゐる。

佐久間氏と  
ルスロー  
神保格  
國語音聲學

佐久間氏と前後して音聲學の上に力を盡されてゐる神保格氏は大正十四年に國語音聲學を明治圖書會社より出した。この書は章を分けることが十二、音聲學の對象から音聲の本質、音聲研究法、音聲器官及びその働き、單音のいろ／＼、單音の連結、意義をあらはす音聲の役目、音節、文字と音聲、アクセント、音聲の具體化、國語音聲の實際問題に及び、第一に具體音聲と抽象音聲との區別を知るべきことを

アクセント  
の法則

提唱し、一般音聲學の事實、音聲研究法の理論、現代日本語（主として東京語）の音聲説明の上に貢獻せんことを目ざし、末に文部省から發表した「アクセントとは何か」の一篇を轉載し、文部省本にある終りの實例を削り、別に尋常小學國語讀本第四卷までの材料を採つて國語音聲の實例に充てゝある。

アクセントにつきての氏の所説は詳細を極めたものであつて、名詞・動詞・形容詞の單獨な場合またこれに辭の附いた場合等一々例を擧げ、東京語に於ける一般の法則として

第一 單語の第一音節が低ければ、必ず第二音節が高くなる

第二 單語の第一音節が高ければ、必ず第二音節が低くなる

と定め、低い方を字の左旁に、高い方を右旁に線を引いてあらはすとすれば、

一は○○……又は○○○であり、

二は○○……である。

連語とアクセント  
型保存と式保存

(一)には○○○○……や○○○○……のやうな型はなく、(二)に○○○○のやうな型はないといひ、連語とアクセントについては、連結されても元のアクセントの型が保存されるもの（佐久間氏のいはゆる「型保存」と稱した類）とそのまゝには保存されないが、もとが起伏式であつたなら、組合せた上が起伏式となるが如きもの（佐久間氏のいはゆる「式保存」の二様があるが、單語の固定的な高低關係でなくて、連結によつて半ば固定的になるものを「準アクセント」と稱すべきであらうと云つてある。例へば「ウ



「シガ」は三音節の單語で、アクセントは平板式であり、「イマス」は三音節の單語で、アクセントは起伏式（低高低型）であるが、これを連結して發音するときは、「イマス」の「イ」が高くなつて「マ」と同じになり、ウシガの「シガ」の部も高くなつて下上上の如くなり、全體が「ウシガイマス」と六音節から成る一單語の起伏式アクセントのやうになる、これを準アクセントとするやうである。斯くの如き準アクセントにも相異なる型のあることを委しく説き、音聲の具體化を説き、國語音聲の實際問題を掲げて筆を收めてある。

國語發音ア  
クセント辭  
典

東京辯

音韻・アク  
セントとは  
何か

神保氏は昭和七年に至り常深千里氏との共著に成る國語アクセント辭典を出した。字書にアクセントを始めて加へたのは前に述べたやうに山田美妙子を嚆矢とする。尋いで國定讀本發音辭典を出したのは高橋龍雄氏で共に明治時代のことであつた。大正に入つて榮田猛猪・近藤久吉兩氏の合著ローマ字索引國漢辭典にもこれを附してある。今村明恒氏の東京辯の卷末にも多少これを擧げてあるが、アクセント辭典はこれを始めとする。この書に收めてある語數は二萬六千語に上つてゐる。東京人が日常家庭また社交上使用する生きた語や舊時代の風俗文物に關し現代人の耳にする語等に一々記法を定め、アクセントを示したもので、音聲學の上から見ても貴いものである。特に卷頭に加へてある總論・音韻・アクセントとは何か、動詞及び形容詞のアクセント、各品詞の接續とアクセント、連語のアクセントと言葉調子、記憶し易いアクセントの八章に上る解説は音聲學に志の深くない人にも分り易く示してあるのは著

者の用意の周到を示すものと謂ふべく、神保氏は音聲學の先進であり、常深氏はこの企をなし、日夜これに従事し、完成を見ないで他界した人、神保氏はこれを悲み、志村繁隆氏の助力を乞ひて世に公にするに至つたものといふ。

### 四十一 音聲學協會の誕生とその後

音聲學協會

音聲學の研究が微々ながらも徐々に起つて來た結果、遂に大正十五年十月に至り、音聲學協會は生れた。會長には上田萬年博士、副會長には藤岡勝二、新村出兩博士がこれに任じ、(藤岡氏の歿するや岡倉由三郎氏がその地位を襲うた)音聲學並びに日本語及び日本語に隣接する諸言語の音聲を研究することを目的とし、やがて會報を出し、論文集を發行するに至つた。

この會の斯學上に多大の業績を擧げるに至つたことを詳述するに先ち、別に二三の音韻研究を發表した人々の上につき少しく述べなければならぬものがある。佐久間・神保兩氏は既に略述した。この他に小倉進平・伊波普猷・北里蘭諸氏の著作がその前後に發刊された。

小倉進平  
國語及朝鮮  
語のため

小倉進平博士は大正九年「國語及朝鮮語のため」を出し、中に國語字音と朝鮮字音との比較研究を試みられ、國語の力行へ行に發音するものが彼地ではh音に發音されることを説き、同十二年に發行された「國語及朝鮮語發音概説」には兩國語の音韻の特質を論じ、その異同を音聲學的に詳述し、方言的發音にも觸れ、史的考察をも加へ、實地の練習にも資し、特に國語の方言的發音中仙臺方言と對島方言に關

音史上の貢  
獻

し、仙臺に於ける鼻母音やpの無聲音、對島方言にl音の存在することなどを立證し、音史上に貢獻するところが少くなかつた。

安藤正次

安藤正次氏が大正十三年に出した「古代國語の研究」にも古代國語の音韻組織の一章があるが、これは別に述べたので、茲には再説しない。

北里蘭  
日本古代語  
音組織考  
琉球母韻の  
統計  
聲の教育・  
國語教育の  
爲の音聲學

北里蘭氏は日本古代語音組織考を出した。伊波普猷氏は大正十四年その郷國琉球語の母韻統計を發表し、その母韻はaiuの三種であつて、e.oの二母韻は缺けてゐて、エ列はイ列に、オ列はウ列に代表されてゐることを明かにした。その他小林光茂氏の聲の教育の著があり、石黒魯平氏は國語教育の爲の音聲學を昭和三年に出した。

音聲學協會に於ては會報を累ね、本年に入りて既に六十三號を出し、有益な研究報告を載せてゐる。

尙別に論文集音聲の研究を出すこと既に六回に上つてゐる。その中主要な題目を拾つて見ると、第一輯には

森正俊氏の「母音に関する考察二三」

佐伯功介氏の「日本語に現はれたる父音について」

宮田幸一氏の「新しいアクセント觀とアクセント表記法」

石黒魯平氏の「謡曲(觀世梅若流)の發音に就いて」

音聲學協會の誕生とその後

音聲の研究  
第一輯

佐伯功介氏の「語ひの發音(寶生流)に就て」

の如き論說より外山高一氏の「レントゲン寫眞に依る國語母音圖形考究の一材料」、兼弘正雄氏の『北風と太陽』のカイモグラフ音聲記録線の説明」、東條民二氏の「放送無線に於ける音の歪曲に就いて」の如き實驗、また方言に關しては N. Nevsky の琉球の昔話大鶉の話の發音轉寫を擧げ、表記法としては外山高一氏の「莽勾兩國語の長音表記法」等を載せてある。

第二輯

第二輯には、

佐久間鼎氏の「母韻の構造とその理論」

宮田幸一氏の「日本語のアクセントに關する私の見解」

の如き論說、

外山高一氏の「國語の熟音の人工口蓋實驗圖形について」

丸山通一氏の「ラ行父音の本體」・「母音間の父音の價値」・「國語に於ける母音の無聲化」

の如き實驗、音韻史としては日下部重太郎氏の「所謂五十音圖が作られた當初の假名文字の音價如何」方言に關しては、

東條操氏の「方言の音韻に關する諸問題」・「武井氏原圖信濃方言地圖について」

三宅武郎氏の「東京下町方言の動詞活用について」

より井上奥本氏の「日本語調學小史」及び「日本語調學年表」、及び古式のアクセント符號を振りたる日本書紀と百人一首及びその解説の如き研究史、

佐伯功介氏の「正字法と音聲記號と蓄音器との關係」

神保格氏の「音聲符號につきて疑ひ」

などを擧げてある。

第三輯

第三輯には

大西雅雄氏の「國語の母韻圖表に就いての一考察」

・三宅武郎氏の「アクセント二段觀と三段觀につて」

・柳田國男氏の「語音變化に關する研究」

・森正俊氏の「母音變化の種々相」

の如き論說より實驗に關しては、佐伯功介氏のラ行の子音について丸山氏の説を評せるもの、丸山氏のラ行閉鎖音說批評に對する答辯、佐久間鼎氏の實驗音聲學の進歩に關する説があり、音韻史に關しては

日下部重太郎氏の「字音尾 *ng, n, m* の沿革」

方言に關しては

Francette Th. mas の「博多方言轉寫」、同上説明(森正俊氏)

東條操氏の「秋田方言、特に語法の資料について」

よりアクセントに關して服部四郎氏の「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」、日下部重太郎氏の「東西アクセントの境界について」、井上奥本氏の「舞鶴地方のアクセント」、佐久間鼎氏の「アクセント研究史の一資料」、山本靖民氏の「肥前諫早町方言誌」

第四輯 よりその他大岩正伸氏の「國語の表記法」等があり、第四輯には

有坂秀世氏の「音聲の認識について」

平田鬼丸氏の「國語の撥音について」

石黒魯平氏の「ン音辯」、湯澤幸吉郎氏の「さわゆる音便について」

の如き論説より

佐久間鼎氏の「ラ行子韻の描録曲線について」、井上奥本氏の「アクセント記録装置の二種について」の如き實驗、

有坂秀世氏の「國語にあらはれたる母音交替について」

の如き音韻史、方言に關しては

山口秀夫氏の「鹿兒島縣出水方言素描」

佐久間鼎氏の「京都語に於けるアクセント」

服部四郎氏の「アクセント境界線及びアクセント調査について」

佐藤清明氏の「岡山縣に於けるイタドリ方言分布論」の如き、表記法に關しては

小倉進平氏の「朝鮮語母韻の記號表記法について」

森正俊氏の「Palmer 氏の Principles of Romanization を讀む」等があり、

第五輯

第五輯（昭和七年刊）には史的研究としては故大矢透氏の「古言衣延辨證補」が載せられ、三宅武郎氏の「濁音考」、永田吉太郎氏の「表音文字としての假名」があり、考察には大西雅雄氏の「音聲の科學的分類について」、及び佐伯功介氏の「音韻學的概念と音聲學的概念」があり、方言に關しては、

金田一京助氏の「北奥方言の發音とそのアクセント」

菅野藏治氏の「東北方言中の訛音二三」

吉町義雄氏の「九州地方郡名現代發音」

神保格氏の「アクセントと表情」

山口秀夫氏の「出水地方方言素描補遺」

の如きがあり、雜纂には佐久間鼎氏の實驗音聲學業績などから音聲等がある。

第六輯

第六輯は昭和十一年に刊行された。これは十週年の記念號であつて、その前年に出すべきを後れたものといふ。理論と考察の部には佐久間氏の「音韻のすれ」以下服部四郎氏のロシアの單語の音調とかヤ

クート族の語など近隣國語に關した新研究もあり、その他

井桁貞敏氏の「音韻變化の概観」

有坂秀世氏の「音韻論」

大岩正仲氏の「音韻單位論」

小林英夫氏の「音韻論に於ける目的說批判」

三浦勝吉氏の「音聲の本體及びわたりを論じ、Daniel Jones 氏の Phoneme 論に及ぶ」

泉井久之助氏の「ラティン語に於けるIとUの相通について」

といふ如き廣く外國語の音韻論にも及んでゐる。

實驗と統計

小幡重一

東北方言の物理音聲學的研究

實驗と統計の部には上田博士の卷頭の辭にもある如く神保格氏の「所謂實驗音聲學に對する誤解」に

は方法論に示唆を與へ、昭和七年有栖川宮記念獎學金に依る研究を引續き發表してゐた小幡重一氏が東

北方言の物理音聲學的研究を遂げ、大西雅雄氏は統計調査によつて「語音頻度より觀たる十ヶ國語の發

音基底」を示し、佐伯功介氏は田丸・小幡兩博士のアクセントに關する實驗を擧げ、方言と歴史の部に

は宮良當壯氏によつて喉頭破音考が紹介され、太田武夫・平山輝男氏によりて丹後に於けるアクセント

や九州アクセントとその境界が吟味され、土井忠生氏によりてロドリゲスが研究され、十七世紀初頭に

於ける日本語の發音が明かにされ、小倉進平氏は朝鮮語タ・チャ行音中の變相を説き、服部四郎氏は滿

洲語音韻史の資料を提供し、附録にはポリヴァノフの著日本方言學資料が吉町義雄氏の解題を附し、覆刻されてゐる。こゝ十數年の間に於ける斯學の進歩は實に驚嘆に値するものがあり、國際音聲學大會を我が邦の司會にて開催するやうになしたといふ上田博士の期待も近き將來に酬いられるであらう。

カイモグラフに據る實驗  
オッシュログラフに據る實驗

大西雅雄  
音聲學史

從來音聲の實驗は容易に行はれなかつたものであるが、兼弘正雄氏は大阪商科大学に音聲實驗室を有し「カイモグラフ」による實驗を重ね、昭和七年實驗英語音聲學を發表し、千葉勉氏も東京外國語學校に實驗室を有し研究するところがあり、音響物理學の權威である小幡重一氏もオッシュログラフに據る實驗も標準音の分析に成功し、現存の方言音を調査して相當の成績を擧げてゐる。

猶後にいふ國語科學講座の中に於ける大西雅雄氏の音聲學史のうち、第三章には日本音聲學發達史を三期に分ち、第一期を準備時代、第二期を覺醒時代、第三期を活躍時代と命じ、皇紀八百年頃より明治十年までを一期に、それより明治の終までを二期とし、大正以後を三期とし、韻鏡檢討、言靈觀、音義說の創說流布の第一期のことは略説し、音史考察、音聲學翻案、國音調査の着手など第二期に於けるものは稍、委しく、國音檢討、科學的實驗などの盛んになつた第三期の狀況は委しく説いてある。

アクセントに關する研究は輓近盛んに行はれ來つたことは上にも縷述したが、尙記すべきことが少くない。服部四郎氏は國語諸方言のアクセント概説を音聲の研究や雜誌方言等にも載せ、方言の區劃にアクセントが重要な地歩を有することを述べ、東方々言のアクセント境界線を三重縣の長島・桑名の間か

服部四郎  
國語諸方言のアクセント概説

ら岐阜の大垣に至るあたりに定め、その西方を近畿方言と定めた。アクセント表記法につきても諸家の説があるが、今一々紹介することを差控へる。服部氏は講座に於けるアクセント概説にエンフアサイズ即ち強調研究がアクセントの理解を深める爲に必要な所以を説き、Prominence を卓立の強調、Intensity を誇張の強調と名づけ、アクセントは卓立の強調まではその型を保存してゐるけれども、誇張の強調によつて毀される事が少くないとし、非常に感情的な會話や朗讀演舌の口調に於てアクセントの型とは無關係な音訓のあらはれることも屢であることをいひ、またアクセントの觀察には理論上文節を出發點とすべきであるが、國語に於ては「ン」や促音の「ツ」も一字に長母韻を含む音節は二單位と見做すが便利だといひ、表記法にいろ／＼と説を立て、文章語のアクセントにも注意すべきことを唱へた。

吉町義雄氏が昭和十二年の音聲學協會々報に載せた内地方言アクセント境界線調査業績精算には近畿アクセントと東方アクセントとの境界線を劃した服部線、近畿中國兩アクセントの境界を明かにしたり四國アクセントが近畿系であることなどを夙く想定した大原(孝道)線、瀬戸内海島嶼のアクセントを精査した藤原(與一)線、九州に於けるアクセントの境界を一定した平山(輝男)線、丹後に於けるアクセント境界線を定めた太田(武夫)線を説き、殘餘の課題として北陸地方・東北地方・近畿地方・中國地方・九州地方・四國地方の研究について述べるところがあり、末にアクセント地圖を掲げ、調査決定線や想定線その領域圖を載せた。また井上與本氏は日本語調學小史を出した。

吉町義雄  
内地方言ア  
クセント境  
界線調査業  
績精算

平山輝男  
全日本ア  
クセント諸  
相

九州に於けるアクセント境界線の發見者である平山輝男氏は昭和十五年六月全日本アクセント諸相の一卷を育英書院から出した。この書は篇を四篇に分ち、第一篇には東京アクセントの系統を、第二篇には近畿アクセントの系統を、第三篇には南島アクセントを、第四篇には一型アクセントの系統に分ち、第一篇を東京・中部地方・中國地方・奥羽地方・北海道地方・樺太地方・四國西南地方・九州東北部地方に分ち、第二篇は近畿・四國東北部・北陸道地方・九州西南部地方に分ち、三篇以下にも章を分ち、その形式特徴を説き、日本全國に於けるアクセントをまとめたものであつて、斯界に於ける業績は十分に認むべきである。

一型ア  
クセ  
ント

中に一型アクセントといふのは名詞も動詞も形容詞も皆揃つて區別なく、箸と橋も花と鼻も垣と牡蠣も「着る」も「切る」も「暑い」も「厚い」もすべて一型アクセントと呼んでゐる。二つ以上の區別はなくても一つ／＼にはアクセントが無いでもないので無アクセントとは呼ばないのである。この型は服部四郎氏が仙臺方言について紹介されたのに始まり、金田一京助博士やその子春彦氏等の研究に基いたもので、その範圍は南奥、北關では宮城・山形兩縣の南部、福島・茨城・栃木の殆ど全部、北陸では福井市を中心とする地方、九州では長崎縣の北部、五島平戸、佐賀縣は北半分、福岡縣は筑後を中心とする地方等々といつたやうに一々これを詳かにしてある。その他二種以上の型の區別をもつてゐるアクセントから段々一型化に近づいてゐる曖昧アクセント地方なども説いてある。

曖昧ア  
クセ  
ント

音聲學協會の誕生とその後

附録には東京アクセント語例を拾ひ、巻首には大日本アクセント分布圖を載せ、終には全國アクセント比較一覽表を擧げてある。

菊澤季生  
國語音韻論

菊澤季生氏の國語音韻論は昭和十一年賢文館から出た。國語の音韻を科學的に講明しようとの意圖に成つたと云はれてゐる。國語學上に於ける音韻論の位置を序論に述べ、國語學を分析的綜合的の二大部門に分ち、分析的方面を更に音韻論と意義論に、綜合的方面を更に様相論と構成論に分けてある。本論は音素、成音論、音韻の變化、音韻の變遷に分け、原始時代の部では*a i u*三母韻説によつてゐ、子音の中カ行は*h*音、サ行は*o*音、ラ行は*y*音で、濁音は存在しなかつたと論じてあるのは根據の薄弱で吾人の首肯し能はざるところであるが、一貫した音韻觀を基礎とし、複雑な音韻變化の現象を體系立て、論述されたところは多しとすべきである。

有坂秀世  
音韻論

昭和十五年の末に至り有坂秀世氏の良著音韻論が三省堂から出た。篇を音韻觀念、音韻體系、音韻變化の進行過程、音韻變化の諸原圖、音韻の二重性格の五篇に分ち、近年世に紹介されたブラーグ派の言語學者の説を光背としながら、これに囚はれないで独自の見を以て一家の説を立て、ある。將來世の學者の注目するものとならう。

## 四十二 昭和期に於ける國語學史

伊藤慎吾  
近世國語學  
その内容

伊藤慎吾氏の近世國語學史は昭和三年に大阪の立川書店より出た。篇を總論・各論に分ち、總論には緒論に次いで、江戸時代以前の國語學と江戸時代の國語學を敘し、江戸時代の國語學はまづその特質を説き、次に復古の思想、古學の先鞭、國學の曙光、國學の發達、蘭學の發達に分ち、時運の趨勢を知らしめんとし、各論に於ては文字に關する研究、音韻に關する研究、單語に關する研究を述べて結論を加へてある。而して自序に云つてあるやうに各論の章には著者並びに著書に就いて批判を下してある。部分的には獨創もあり、記述の體系は整つてゐるやうであるが、當時時枝誠記氏が批評された如く、「復古の思想」、「古典の研究」、「國學の曙光」等の項目を設けて時代の傾向を明かにしようと思はれたが、國語研究の母體である國學と國語學とを切り離して論じられた感があり、國語學の史的展開に對する正當の認識がどうかと思はれる憾がないでもない。例へば日本語學の重要な流れをなす本居父子の玉の緒・八衢が國學と如何なる關係にあるかといふ如き問題は正當に解されてない。またその説きぶりが從來の文學史家の批評に於ける如く極めて大様である。且參考圖書が乏しかつた爲か、普通の版本にもよら

時枝誠記氏  
の批評

す、百科辭典に據つたり、國書解題の解説をさながら引用された點などが讀者に好感を與へない。併し初學には参考となつたことも少くなかつたであらう。

吉澤博士の國語學史

吉澤義則博士は平凡社の受験講座刊行會の國文學講座の一篇として、昭和五年四月國語學史を出された。序説に國語學と國語學史との關係を説き、これが研究の態度方法を明示し、その時代分を元祿以前とそれより明治の半ばに至るまでとその後との三期に分ち、次に假名遣・音韻・文字・テニヲハ・活用の數章に分ち、その起原發達を明かにされた。而してその間にも問題に對する意見を隨所に交へてある。例へば假名遣につきても契沖以前の一步抄を紹介し、この書は行阿假名遣を定家假名遣として信仰的にこれを受入れることをしないで、それにも誤があるといふ點から俳諧の爲の著作と見てあり、服部吟照の假名遣問答抄は韻鏡の説もとり入れてあり、益軒の倭字解の反駁の爲に書いたものと見えるといひ、和字大觀抄の如きもさう高く評價されてない。和歌俳諧者流は從來の假名・國學者は歴史的の假名を用ゐ來つた。假名遣の歴史から考へてみても、歴史的假名遣で徹底することは出來がたい。古典の研究には必要な歴史的假名遣であるが、現在及び將來の國語を表記するに絶對の標準とすべきかどうかといふに疑はしといはねばならぬと論じてある。

時枝誠記氏の國語學史を歪められた角度から見た

時枝誠記氏は岩波の日本文學講座に昭和七年八月國語學史を執筆した。そのはしがきに「私の企圖する第一の事は日本に於いて獨自に發達した國語研究が從來或る歪められた角度から觀察せられ、剩へ、

た批評を斥く

その要求せらるべき當然の地位さへも與へられず、非科學的なもの、無價値なものとして冷遇せられた事實に對して、それが物を素直に觀察する態度の缺如によるものであることを知るに及んで、在來の國語研究にそれが持つ正當の地位を與へようとする事であつた。」と述べておられる。學問の傾向の變つた西洋流の尺度で、數百年前の我が國獨自の研究をいゝくらゐに批評するのを差控へねばならぬとするところに純眞な敬虔な態度が窺はれる。

第一部序説に國語研究一般と國語學史との關係、國語學史編述の態度とその方法、註釋語學より見た明治以前國語研究の一特異性を説き、第二部研究史は五期に分けて説いてあるが、昭和十五年の末に單行されたから、後それについて述べることにする。

重松信弘氏の國語學史

重松信弘氏は昭和九年十一月明治書院の國語科學講座に國語學史を書いた。全篇文章、その序論に國語學史は國語の過去に於ける研究の業績を明かにすべきものとし、その主要な問題を數へ、時代を四期に分ちて説いてある。後これを基として單行されたものがあるから、これも後に委しく述べる。

増訂 日本文法史

自分もこの年舊著日本文法史を増訂し、成美堂より出した。實は文法學史とすべきであつたが、舊著にちなみてそれを改めなかつた。

山田博士の國語學史要

山田博士の國語學史要は現代學術の普及版岩波全書的一篇として昭和十年に世に出た。これは日本大學及び東北大學にて講義された稿本から要をぬいたものといふ。著作の態度並びにその抱負が序に見



著者の學史に對する主張と態度  
國語學と日本語學とを峻別す

えてゐる「國語學史の名を冒して學者の傳記や著書や若くは學說の臚列に終るといふやうな事はしたくないと平素思つてゐる。」また「國語學は國民の國語に對する自覺反省の展開の結果が學として組織せられたもの」としてある。隨つて國語學史は國民的自覺の起つた時から始むべく、國語學と日本語學とを峻別し、外國人の日本語研究は國民の國語研究と交渉を生じない限りは國語學史に織りこむべきではないとしてある。ある人は博士を以て現代の本居宣長と評したのは理由のないことでない。

宣命書に於ける國民の自覺

本論は奈良朝時代の文獻に見ゆる當代の意識から始まり、宣命書を最初に擧げ、記載の方式を説いてある。大體について觀念をあらはす語は大字を以て書き、用言の活用・複語尾・助詞の如きを小字で書く。つまり主要語と補助語との區別を知り、又觀念をあらはす部分と言語操縱の方式の部分との區別を認め、又用言の活用と語幹との區別の存することを略識り得たといふべきである。この書き方につき委しく説き、また助辭ながら小字にかゝらない種類も一々具體的に擧げてある。

漢文の訓讀法

次に漢文の訓讀法につき、この妥協法を考へたのも古いこととし、國語の相異により配列法の差異は漢文の原形をそのままにし、飛びこえて訓む法を考へ、活用語尾のないものは捨假名を附するなど工夫をし、我れにありて彼れになきものは漢字の形音を假りて別に音にうつす法などを用ゐたとし、點圖を説いた。

次に國語と漢字・漢語との對照にあたり、音註・訓義を文中に加へたり、或は一章の終に章中の語を

新華嚴經音義  
その内容

摘出して註を加へ、こゝに新華嚴經音義私記などの類を生じ、それが終に字書を生ずるに至つたとし、倭名鈔の出現を説き、辭書につきて述べ、次に歌學の興起と國語字書の出現に説き及ぼし、假名の發生から普通説の出現と五音の圖の成立を説き、約音略語發語につきて述べるところありて、次に定家の假名遣より手爾波大概抄及び切字の説から語の類別並びに用言の活用の認識、姉小路式及びその系統のてにをは研究までに十章をあて、以下契沖及びその後の假名遣研究より馬場辰猪及び口語法の研究に八章を充て、卷を了へてある。明治時代をそこで止めたのは現代は説くべき時でないとし、西洋の言語學の無理な桎梏から脱し、國語の眞髓をつかんで、我が國語を救済する昭和の馬場辰猪の出現を望んで止む能はざるよりそこで大切れとしたのである。

外人の研究の扱ひ方

豊富な學識でよく要領をつかんで、而も學者に研究上の示唆を與へたことは少くない。但し全卷の半ば以上を契沖以前にあてた爲に後半に至り敘述すべき事項の省略したものが相當にあると思ふ。枝葉をすてゝ大綱をあげることを主眼とされたとはいへ、外人の研究を毛嫌ひせず（斯くいふは著者の本旨に背くかも知れぬが）它山の石として我が國語學の進展をいやが上に進める意味でそこにも觸れて欲しかったものは余一人であらうか。小冊子とはいへ、現代學術普及の一書として、縦に斯學の變遷推移を敘すると共に斯界の形勢を説き、世相との關係を示したり、重要參考論書を擧げられたならば、吾等啓蒙の上に資するところが一層であつたであらう。

五十音圖の歴史

氏は近來矢継ぎ早に有益の書を公にされる。昭和十三年九月に出された五十音圖の歴史も國語學史の一部の詳説と見られないことはない。序によると、某大學の國語の教授が發表された論文中に、五十音圖は契沖の作のやうに云つてあるのを見て、國語愛にもえる氏のことゝて、國語の爲に泣いても泣いても泣き足らぬ悲しみを感ぜ、五十音圖のことぐらゐは國民的常識としてすべてが知つてゐなければならぬとし執筆されたものといふ。

その内容

五十音の起原に關する諸説、普通説の基礎として音圖の存在、音圖存在時期の溯源的研究、初期の正しい音圖、音圖成立の推定、中期錯亂の音圖、音圖に錯亂の生じた事情及びその影響、正しき音圖の復古、音圖の名目及び認識の變遷の九章に序結が加へられてある。

明覺の五韻次第

五十音圖に就きては古來多くの人が多少それに觸れてゐないものは極めて稀な程であるが、明治大正の御代にありては大矢透氏の音圖及手習詞歌考が多く、貴い資料を擧げて論じてあるので、全面的には贅意を表しなくても大體は平安朝の初期に悉曇家によりて作られたもので、それがその後排列の順を誤るに至つたと信じてゐた。大矢氏の五十音の祖圖としたのは芝葛康朝臣の寛文五年に寫した明覺の五韻次第の初に擧げてある音圖で、天台座主良源傳本とあるから、彼の音圖ばかりは「全く良源以前より天台に傳はれるものなるべきは更に疑ふところなし。」と斷じてゐるが、大矢氏は葛康の自筆本を見ないで谷森善臣氏の寫した葛康本に據つてゐたのである。山田氏は葛康朝臣の後裔である芝葛盛氏からその自筆

本を得て精査した結果、天台座主良源傳本の八字が該本には無いことが分り、これは大矢氏の錯誤か谷森本の誤かに違ひないことを明かにされた。

五十音圖は國語の音聲表ではない

この圖を良源所傳とすべきでないとしてゐた人には橋本進吉博士もある。日本文學大辭典の五十音の項目の處に、橋本氏は「五十音圖は國語の音聲表のやうに見えるけれども、元來國語の爲に作られたものでなく、外國語學殊に漢字音の反切のために作られたものらしく思はれる。」と述べてある。

音圖の悉曇起源説を斥く

山田博士は音圖の起源に關する古來の諸説を分つて應神天皇の御代に造られたといふ説、吉備眞備の造つたといふ説、悉曇から生じたといふ三説とし、その源委を委しく述べ、それらは皆實證せられないと斷じ、次に平安朝の末期に勃興した歌學が古語の解釋に方り五音相通及び同韻相通の説を用ゐてゐるが、これは悉曇にあかるかつた明覺の悉曇要訣や反音作法などに負ふところがあるやうに見えるが、尙これは溯源的研究をしなければならぬとし、日本紀私記には音の相通のことが見えてゐる。この私記を矢田部宿禰公望のたとすれば、延喜の頃既に相通説が用ゐられてゐる。悉曇家のものより以前に音圖があつたと推定され、中期以降錯亂してゐる音圖を一々検討し、いづれにも漢字音の反切を説いたものが多い事實を認め、音圖のはじめは漢字の音の反切を説明する爲のものであつた。而して「反音の法はもと儒家に端緒を發し、それら儒家の間に反音を簡明に示す爲に假名を以てした音圖が生じたが、それが本邦の言語の音の組織を明かにするに足るものに發展したものであらうか。」と説いてゐられる。

矢田部公望私記の相通説

音圖は漢字の音の反切の爲の制作

小島好治氏の  
國語學史

小島好治氏の國語學史は昭和十四年に山田孝雄博士の校閲を経て刀江書院より發行された。その時代的区分は五期に分ち、契沖以前、本居宣長、東條義門、大槻文彦の出るまでの四期には、假名遣・てには・音韻・語格等の部目を立て、首にその期に現れた主なる學書目を挙げ、次にその序跋目次を載せ、あるものは古人の評などを加へてある。第五期は山田博士の國語學史要に則つて、明治の初年に筆を止め、國語學史の對象として論ずるに適切な時期と思はぬからといつて、近年斯學の隆盛をきはめてゐる現代に觸れてないのは吾人の賛しないところである。稍、委しき啓蒙的のものとして公にされたものかと思ふ。

重松信弘  
國語學史概  
説

重松信弘氏の國語學史概説は昭和十四年に發行された。この書は前に出された明治書院の國語科學講座の國語學史を増訂したもので、第一章序説には國語學史の意義・その研究法・組織・時代區劃を説き、第二章以下毎章一期づつとし、第五章現代で終つてゐる。その區劃は契沖以前、その後、鈴木胤、本居春庭以後、明治以後と四期に分ち、第一期は長期間に互るので、更にこれを初中後の三小期に分つてある。さうして各期乃至各小期の首に概説を挙げ、次に要項を述べ、終に結びを附してある。かくてその體系もよく整ひ、前後脈絡があつて發展の様相がよくつかまれ、豊富な内容を簡明に記し、深く原據を示す必要のあるものは末に註記してある。

上代人の國  
語意識

第一期の初期即ち奈良朝から平安朝の中頃までの節にはまづ上代人の國語意識として、概説、古典に於ける古語、俗語方言、訛語轉語、觀念語運用辭、言葉、結びに分ち、次に日本紀私記に於ける國語研

究として概説・訓註・釋義・語學的方法・結びとし、次に字書の制作につきて細くこれを敘してある。

中期の研究  
悉曇學より  
の國語研究

中期の研究には悉曇學よりの國語研究、歌學に於ける國語研究、仙覺抄と釋日本紀、和漢字書の出現、假名遣の發生の五項目に分ち、悉曇學よりの國語研究は從來の國語學史にはあまり説かないところであるが、本書にはこれを當時の悉曇學と明覺、悉曇要訣、其後の悉曇應用の大勢と目を立て、詳説してある。尙附録に收めた「悉曇要訣に於ける國語研究」と併せ見る時、著者がこの點に力を注がれた意味が分る。竹田鐵仙氏が金澤庄三郎博士の還曆記念東洋語學に載せた「悉曇相通説と活用研究に及ぼせる其の影響」と共に照合すべきものである。

歌學に於ける  
國語研究

歌學に於ける國語研究の中、普通・音の添加・語義研究の外、古語・世俗語・風俗の詞等の様相の意識進展を説くのは宜しいが、仙覺抄と釋日本紀の條に時枝誠記氏の古典註釋に現れた語學的方法といふ論文に全く觸れてないのを遺憾とする人もある。

契沖以後の所謂第二期については、近世國學の成立と本期の研究概観、契沖の研究と假名遣、語義語源及び方言の研究、荷田春滿と賀茂眞淵、てにをは研究と富士谷成章、本居宣長の研究の六項に分けてあるが、紙數の關係からかあまりに緊縮的な記述をとつた傾向が著しい。よく要をつかんであるとはいへ、今一段の詳説があつた方が望ましく思はれる。明治以後の部は複雑多趣なる研究業績をよくまとめられてある。著者は國語學史の思想史的意義といふ點に重點を置き、また文化史の一部門として取扱は

假名文字遣の原始形

うとする意圖があつたやうに見える。

附録には言語第三輯に載せた「悉曇要訣に於ける國語研究」、國語研究に載せた「假名文字遣の原始形に就いて」、コトバの五巻に載せた「契沖の古語研究の理念」の三篇を掲げてある。いづれも有益な論文である。尙年表も期ごとに分けて録してある。

時枝誠記氏の國語學史

國語の意義に關し山田博士の説を斥く

言語意識の發達及び言語研究の目的  
國語學史の面目を一新

時枝誠記氏の國語學史は昭和十五年十二月に岩波書店から出た。氏は昭和の始め頃より國語と國文學や、國語國文や、コトバや、文學や、京城帝大文學會論纂などに國語に關する新しい研究を發表されてゐる。この書は昭和七年八月岩波講座日本文學に載せられた國語學史に據り多少の筆を加へられたもので、その序説に山田博士の國語學史要に國語の歴史性や社會性を強調される立場から「國語は日本國家の標準語であつて、國家の統治上公認して標準と立てゝゐる言語をいふ。」と定義されてゐるのをとどき、日本語的性格をもつた言語を意味するものを指すといひ、従つてまたたとへ外國人の日本語研究であつても山田博士のやうに、日本國民がそれをとつて研究した時に始めて我が國語學の領域に屬せしめる考には賛成しない。氏は「日本に於ける言語意識の發達及び言語研究の目的とその方法」を東大の卒業論文にされたさうで、この學史も國語學者の傳記・著書等は一切省略し、それらは日本文學大辭典や國語書目解題類や國語學大系の解説に譲り、從來の國語學史の面目を改め、國語學史上の諸問題の將來の國語研究に示唆するところのものを明かにするに努めたと自ら述べてゐる。第一部を序説とし、國語の名

義、國語學の對象、國語學と國語學史との關係、國語學史編述の態度、明治以前の國語研究の特質と言語過程觀、國語學史の時代區劃と各期の概觀の六章に分ち、第二部研究史は次の如く

- 第一期 元祿期以前
- 第二期 元祿期より明和安永期へ
- 第三期 明和安永期より江戸末期へ
- 第四期 江戸末期
- 第五期 明治初年より現代に至る

五期に分ち、現代國語書目を附録してある。過去の國語學史は明治以後に於て専ら國語の學說史と考へられた爲に、その理論と體系の貧弱なることに對して峻烈な批判を受け、價値なきものと斥けられ、多くの學者はそれらの缺陷を現代の言語學に照らしてこれを批正することが現代の國語學にとつて有効な風に考へてゐるのは不當とし、明治以前の國語研究には自らの力によつて國語現象を發見しようとする能度が著しく、従つて明治以前の國語學史は過去の研究者の國語意識の展開史であるべく、これを知ることが必要であるとの立場から論究を進めてあるのである。

現代の國語學の弊

元祿期以前

斯くて元祿期以前を、まづ古代日本民族の國語に對する信仰より説き、祝詞・壽言・枉言・忌詞に觸れ、次に古典の研究解釋を目標とする語學を説き、歌學並びに連歌の作法即ち表現を目標とする語學を

解釋の爲の  
見解の爲の  
表現の爲の  
見地の爲の

假名遣觀

明治期の内  
容

ソシュールの  
言語學說  
の紹介の讚  
美

論じ、解釋の爲には言語に於ける顯現の方則を説き、陳述の場面的變容を述べ、語の構成法や職能的類別に説き及ぼし、表現の爲に語の意味用例を明かにし、假名遣を規正し、てにをはの用法を明かにすることを説き、次に漢字漢語の學習並びに悉曇學を説き、辭書の編纂に及んである。元祿期以降の部に於ても上代文獻の用字法の研究以下傾聴すべきものが少くない。假名遣に於ても古くは和歌記載の爲のものであつたのが、元祿期になると語義の標識としての假名遣觀が発生し、文雄等より後は音韻の標識としての假名遣觀が成立したといふ如く、種々の觀點から述べ、明治期は國語國字改良の諸問題、改良問題の調査機關と國語研究、文典編纂の勃興、口語文典の編纂と方言調査、辭書の編纂、言語學の輸入と國語研究上の諸問題の數項に分ち、簡單に要約して大勢を説き、昭和の初小林英夫氏がフランコ・スイス學派のソシュールの言語學說を紹介され、從來の史的言語學に對し言語の體系的な研究を力説された功績をたゞへて筆を收めてある。

末に自家の研究論文三十五の目録を擧げてある。併しそれらの雜誌所載の論文を集めて一々見ることは容易でないから、この書にそれらをもう少しく説かれたならばと思はしめるものがある。新しい見方を開かれた點は多しとすべきであるが、紙數を惜しまずにもつと詳説して欲しかったものは余一人ではあるまい。

### 四十三 國語史の研究（その一）

物集高見博士の言語變遷正訛辨

日本語の發達變遷の跡を史的に考察するは國語史の目的とするところ、富士谷成章は和歌の上から六運説を立てたことは既に説いた。明治時代に至り物集高見博士は學藝志林 第七十二冊に言語變遷正訛辨を掲げ、六變遷を立てた。即ち漢字の渡來で一變し、佛教の渡來で二變し、延暦以後片假名が出來、音便が起つて三變し、天長の頃空海が伊呂波歌を作り、和文が起り、漢語を和語化して四變し、保元以後田舎武士が都に來て言語が俗化して五變し、鎌倉室町以後口語も亂れ、文語と相違が生じ、斯くて六變したと概括論を述べた。

大槻文彦博士の口語法別記の端書

連體形が終止形を兼ねる係結法のくづれ

大槻文彦博士は口語法別記の端書に我が言語の變遷を説き、奈良朝以前と平安朝との別を認め、奈良朝以前には言葉に伸び縮みはあつたが、音便はなかつた。平安朝の中でも、後三條天皇並びに白河天皇の御代から音便は勿論、假名遣も變つて來て、動詞の活用の變りもますます見え、源平等の武士の勢が盛んになつた頃から京都の言葉に變化が起り、動詞の活用の連體形を終止形にすることも多くなつて來た。鎌倉時代になつて文の掛り結びの法則が崩れ始めた。南北朝に至つては、公家の人々がいつしか言

東西方言の境界線

ひも習はぬ阪東聲をつかふやうになり、應仁の頃から言葉が一段と變つた。織田豊臣時代に至り、「頼うで」が「頼んで」となり、「流いて」が「んで」、元の「流して」になつたことより、江戸の言葉の成立を説き、言葉の島を生じたことや、東西言語の界線が信越・濃飛の間に南北に亘る御嶽系の大山脈でしきられること等を説かれてある。外國人のアストンやチェンバレンやノアクなども或見方をして分類してゐるが、茲には略する。山田博士は奈良朝・平安朝文法史を書かれたことは既に述べた。安藤正次氏は國語の變遷を五期に大別し、

安藤正次氏の分類

- (一) 國語形成の時代 上古及び奈良朝
- (二) 國語發達の時代 平安朝
- (三) 國語混亂の時代 鎌倉南北朝
- (四) 國語分化の時代 江戸
- (五) 國語統一の時代 明治以降

以上の中、(一)を崇神天皇の御代までと大化改新とその以後の三小期に分ち、暗黒時代・混成時代・成熟時代と名づけ、(二)を天曆を境とし、前後の二期に、(四)を享保前後の二期に分けた。併し中古は大槻・山田兩氏の如く院政の始まるまでとし、以下は鎌倉に併せ説く説が有力である。

古代國語の研究

安藤氏は大正十三年に出した古代國語の研究の中に上代の音韻を論じ、次に語の構成に關し、名詞は

名詞の成立

大體に於て總稱的のものがまづ發達し、次にその中に含まれる各種の品目を示す他の言葉を加へるのが普通である。瓮がまづ成つて次に忌瓮・鍋等が出来る。動詞・形容詞は主要成分があり、その意義を分化させる力をもつてゐる造語的接尾辭を加へ、母韻の變化によつてさまざまの語尾を生ずる。而してその種類は次の四つとし、

造語的接尾辭

- (一) k(g)mによる分化 「しづく」と「沈む」
- (二) strによる分化 「消す」と「消つ」
- (三) nによる分化 「尋ぬ」「たどる」
- (四) fbによる分化 「贖ふ」「憐ぶ」

その中核となるものは極めて短小なるものといひ、形容詞の活用は從來特徴的なものと考へられ來たが、古い時代の表現のうち、自然淘汰の結果、あるものは消滅し、他の殘存したものを取合せて、同一活用系に組合せた爲に複雑の觀を呈するに過ぎない。隨つて還元すれば明瞭になるといひ、その語幹に結合する造語的成分は次の三つであるとした。

形容詞の造語的成分

- (一) mの附くもの「痛む」の如き
- (二) kの附くもの「痛く」の如き
- (三) sの附くもの「痛さ」の如き

語に添ふ「ら」及び「ろ」の義及び成立

また語の後に添ふ「ら」及び「ろ」に関する新村博士の東國方言とする説、宣命の天命良麻に關し、二分して「ら」は語調を助ける辭、「ま」はまに／＼と同じと説く山田博士の説、「ら」及び「ろ」に朝鮮語の造格を表す助語roに對するものと説く金澤博士の説などを挙げた後、「ろ」は「である」の義と説いてある。

國語史概説

安田喜代門氏の昭和四年に出した高等國語法にも上代よりの國語法史の概説を擧げてある。

この類の書で最も優れてゐるのは吉澤義則氏の昭和六年に出された國語史概説である。この書は首に明治以降に於ける國語史參考書の主なるものを擧げ、本文を假名の發達、音韻の發達、音韻の退化、歌語と文語、中古語の完成、近代語の發達、東西二大方言の競争の七項に分ち、末に概括を附してあつて、纏まつた國語史の最初のものとして宜しい。

平假名の成立  
片假名

中に平假名は女子の手に成つたものといひ、その時代は竹取物語の成立した清和天皇の御代に近いとし、五十音圖はもと萬葉假名で書かれたのを後片假名に書かれたもので、堤中納言物語の蟲めづる姫君の卷には片假名で歌を書いたとあるを引き、その時代を想はしめてある。

ハ行音轉化の時期

音韻發達の條には上古時代に「ヌ」が「フ」となり、「ク」が「コ」となり、「ユ」が「ヨ」となつたとより、ハ行音はpからfに、fからhに移つた時期に關し、雄略天皇紀の和斯里底乃と萬葉集卷五の波之利去奈々とを合せ考へて、聖武天皇の頃にpからfへ轉じたと推定した。尤もハヒフヘホ一行の中

撥音

漢書揚雄傳に加へてある音の標記

フだけは遅くまで殘存してゐた。fからhに變つたのは後奈良天皇の御宇の頃とし、撥音につきては助動詞の「む」などは奈良朝の末期にmにかはる傾向を生じ、後竹取物語の頃にはnの音が認められる。「なでふさる事かし侍らむ」の「なでふ」は「ナンデフ」に違ひない。唯撥音の表記文字が無かつたに過ぎない。rとnとは變り易く、「殘の雪」を「このんの雪」といひ、播磨を「はりま」と呼ぶが如きその例は夙くからあるのも撥音の標記は音の存在よりも後れてゐて、天曆三年の識語ある漢書揚雄傳に加へてある傍注にmの方は一定してゐるが、nの方は

諛セ 棍コ……表記なし  
般ハ 隣ニ 駢……「む」を代用  
允ウ ……「い」を代用

表記法と音價

の如く表記法が動搖してゐる。随つて土佐日記の船頭の「ていけ」のことを云つてゐるのは「テンケ」と發音したのではないかといひ、その後もnを表すにはレ印を用ゐてゐた。落窪物語に駒の嘶聲を「ひうといなき」と書いてゐるのはヒンと云ふべく、今昔物語に「狐のコウ／＼と鳴く」とあるもコンコンと訓むべきでは無いかと論じてある。元永本の古今集に龍膽の花を「理うた有のはな」と書いてゐるのも表記法が一定してゐない證據であるとした。

音韻の退化

音韻の退化に關しては石塚龍鷹がその師本居宣長の教に基き、假字遣奥山路に五十音の中

エ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロ

音便の發生

の十三音は記紀萬葉には同音の假名が二類に分れ、同類のものは通用するが、異類のものは相通せずとの説を擧げ、五十音圖の成立に關しては大矢透氏の説を載せ、音便の發生も音韻退化の一現象であるとすし、音便中連用形のは平安朝の文學には夙く認められたが、連體形の音便は鎌倉以後に勢力を得、江戸時代には連用形の音便は勢力を得ないで明治以降關西方言に榮えてゐることを説き、音便の種々相を説いてある。次に歌語と文語との別につき、平安朝では音便が散文の上には盛んに用ゐられたが、和歌には用ゐられなかつた。これは當時の散文が言文一致であつた一つの例證となると同時に和歌の用語が話語のまゝでなくて或る距離があつたことを示すもので、院政時代になると、「急いで」に於ける如く語尾の「ギ」が「イ」に變るものや、夕行四段の動詞の語尾の「チ」が促音になるものや、へ行四段の語尾「ヒ」が促音に轉ずる例なども出て來た。而して和名鈔の頃より雅俗の別を區別した。その標準は典據のあるものを雅とし、近代の語を俗とした。

院政時代より音便が盛んになつた

「侍り」と「さぶらふ」との用例

次に「侍り」といふ敬語の用法に關し源氏物語時代には多く用ゐられたが、「候ふ」は少く、源氏全篇を通じて僅かに五六に過ぎず、而も身分ある婦人はこれを使用しなかつたが、狭衣物語になると、「候ふ」の用途が廣く、今昔物語には「侍り」と「候ふ」とは相半し、台記には「侍り」は鳥羽法皇の御消息を寫した所のみ用ゐられ、他は「候ふ」のみを用ゐ、後白河天皇の御消息には「候ふ」ばかりとなつて

ゐる。その後の御宸翰類にも皇族以外の消息には「侍り」は全く用ゐられないことを示され、話語と文語の別を擧げて、中古語は形容詞は五段の活用を全備するやうになつたこと、動詞は下一段活を生じ、四種九類となり、助動詞にも興亡があつたことに觸れてゐられる。

近代語の發達連體形が終止形に代つた跡

近代語の發達に關しては、先づ形容詞・動詞・助動詞の連體形が終止形の地位を占めたこと、二段活用が一段活用に變る傾向を生じた跡を明かにされた。連體形を終止形に用ゐることは對話の場合には夙く竹取以下の物語にも見えてゐるが、これは終を略すると物柔かな氣分が浮び出るので、この心理から終止の言ひ切つた形を用ゐずに續く心持で連體形を用ゐたものと推定し、平安朝末期になると、それが地の文にも現れ、漸次終止形の滅亡を來したとした。鎌倉時代以後は「落つ」・「受く」・「寝」・「來」・「爲す」・「被」などの終止形は殆ど亡びた。「有り居り」の終止形がなくなり、な行變格は終止形が連體形を壓迫し、變格の資格を失つたのは室町時代からといひ、形容詞は連體形の音便が次第に固定し、また終止形を同化して現代口語と同じ活用をなすこととなり、文語の四種九類の活用が現代口語の三種五類となつた。その過渡期として鎌倉・室町時代を眺め、これを助辭の上からも證據立てゝある。

敬語の「ます」の語原

助動詞の中、未來を示す「う」が文語の「む」の位置を全く奪つたのは室町時代に入つてからであるが、鎌倉時代にはまだ十分な發達を遂げてゐない、恐らくは關東方言に發達したものであるまいかといひ、敬語の「ます」は「參らす」から出た「まらす」の變つたものであることは疑はないが、文語



東西二大方  
言の競争

の「ます」の血、「申す」の血も融け合つてゐるやうで、その源を一元に歸せしめられないと論じ、次に東西二大方言の競争に關し、源氏物語や今昔物語や平家物語などには關東語が卑しめられてゐたが、鎌倉の半ば頃になると、日蓮上人は在京の弟子日進を誡めて「言ヲバ田舎言葉ニテアルベシ」と言つた如く關東方言に對する自覺を生じ、それから多くの年を累ね、江戸時代の中葉以降に至り、式亭三馬の浮世風呂に見るやうに上方言葉との地位が轉倒するやうになつたことを述べてある。

國語科學講  
座に於ける  
國語史學

明治書院の國語科學講座には、國語史學として安藤正次氏の國語發達史序説、佐伯梅友氏の上古の國語、安田喜代門氏の中古の國語、土井忠生氏の近古の國語、吉澤義則氏の日本文章史が收められてある。

安藤正次  
國語史序説

安藤・佐伯兩氏のは刀江書院の國語史に改装されて再び版になつた。中に安藤氏の國語史序説は多少の修訂を加へ、明治時代に關する一章を補つてある。國語の成立期を崇神天皇の前後に置き、大化の新より奈良朝の初期に至る間を集中偏在の時代とし、鎌倉・室町の時代を分散均等時代、江戸時代を二元對立時代、明治時代を一元統一時代と改めてある。

佐伯梅友  
國語史上古  
篇

佐伯氏のは萬葉集を資料として、文字・歌語・音韻・外來語・東國方言・敬語・男女の言葉以下十二項に分けて説いてある。鶴を歌には必ず「たづ」と詠み、蝦を「かはづ」と詠んでゐる例によりて歌語と文語の相違があるとか、歌に君と呼びかけるは男に限るなど、澤瀉氏の國語國文に載せた説に基いて説いたところもある。山田博士の奈良朝文法文に負ふところも少くない。

安田喜代門  
氏の平安朝  
篇

資料價値の  
検討

前代遺響

安田氏のは最初に國語史の時代區劃につき自他の説を述べ、中古期は平安食都から院政の始まるまでとし、次に研究資料を漢文式の文獻と國文式の文獻とに大別し、その中後者は公卿・殿上人・女房たちの如き俗界の權力階級の力によりて遺され、前者は僧侶・學者の如き階級の人によりて遺されたものといつて、その資料價値を検討し、大和時代に散文に行はれてゐた助詞「ナモ」はこの時代には夙に「ナン」に變つてゐたに拘らず、六國史に於ては、宣命に「ナモ」が多く用ゐられてゐた實例を列擧し、次に資料と時代とを検討し、前代遺響の章には大殿祭の中の所知食の註として延喜式に古語云志呂志女須とあるを否定し、萬葉時代には「シラシメス」であつた、「シロシメス」は平安朝の新語であるといひ、助詞「カナ」は平安朝に起つたと一般に考へられてゐるが、常陸風土記には俗曰與久多麻禮留美津可奈とあれば、東國地方には夙くから認められてゐたかも知れぬといひ、以下第六章より第九章までは文字と音韻とにつき、大矢氏の提供した佛典の訓點その他の資料をあさつて、「ウルハシ」を「ウルワシ」と書き、容を「カヲ」と書いた例などを引きて假名遣の正しかつたといふ延喜天曆以前にも、必ずしも絶對正鵠と云へないと論じてある。石塚龍麿の發見した十三の假名とその濁音とも一部分にははやく亂れてゐる點があるといひ、「ヨ」と「ハ」と二つの假名は日本後紀時代の宣命によると最初より混亂してゐることを示し、天長年間に至り「ケ」といふ假名にも混亂を生ずるやうになつたといひ、然らば「ヨ」の二類の假名はいつ頃までは區別してゐたかといふに、天平寶字八年の宣命に至り始めて亂れて來たと例を引

石塚龍麿の  
研究の再檢  
討

いて證してゐる。その他につきても龍麿の提唱、橋本博士の紹介に基き、宣命を検討し、その一つ／＼の使用例をしらべて是正すべきは是正しようとの企と見られる。最後の初期の語法と語彙とに關しては助詞「ナモ」が「ナン」に變り、主格助詞「イ」が消滅し、「カモ」が亡びて「カナ」があらはれようとし、助詞「シム」が「ス」に移らうとし、「ベラ」が発生したといふ特色を述べるに止め、委しきことは改造社の短歌講座に載せた「平安朝文法概説」に譲つてある。

平安朝文法  
概説  
土井忠生氏  
の近古篇

ロドリゲス  
の文典の利  
用

「エ」・「オ」  
の漸強母音

鼻母音  
の子音と音節  
の新しい研  
究

土井博士の近古の國語は院政・鎌倉・室町三時代に互る約五百年の語法を明かにしたもので、序説に山田・湯澤・橋本・春日諸氏の研究より日葡辭書、ロドリゲス及びコリヤードの日本文典などの參考資料を紹介し、次に音韻・語法に分けてその研究を述べてある。吉利支丹側の資料、特に從來諸家が名のみを擧げて、内容を十分に検討しなかつたロドリゲスの文典を精讀し、これを利用された點に於て出色のものである。

母音「エ」は室町時代の末には單一母韻の e でなく、漸強母音の *yo* に發音せられ、「オ」も o でなく漸強重母音の *wo* であつて、假名遣の上に「ヲ」が「オ」に發音するやうになつたと一般に唱へられてゐるが、室町時代には「オ」が却つて「ヲ」に統一せられてゐたことを證し、鼻母音が *dg b* の破障音の前に現れる（科を「トンガ」といふ如く）ことを諸家の説を引いて述べ、子音と音節につきても委しく説いてあつて、か行音が語の中尾に於て鼻音の *ri* に發音されるやうになつたのは、*g* の前の母音が

拗音の研究

常に鼻音化した影響であらうといひ、サ行音も東北地方や出雲地方や九州地方でシエ・ジエをセ・ゼの代りに用ゐてゐるのは室町時代に廣く行はれた發音が近地に名残を留めてゐるものと見、タ行の清音は *t* で統一されてゐたが、チ・ツが *chi tu* と變化したのは近古のことで、その濁音が混同するに至つたのは應仁前後とし、ハ行音が近古の初には *f* 音であつたことは東禪院心蓮の口傳を記した悉曇口傳に存し、近世初頭には *f* 音から *h* へ移らんとする中間音が或る地方に行はれてゐたといひ、拗音の「クッ」は近古にも標準として行はれたが、文明中桃源瑞仙が作つた三體詩抄には京都の下層社會には「カ」と發音したことを示してゐる。「クキ」・「クエ」は近古には消滅して「キ」・「ケ」となつたことを説き、指定助動詞の「ぢや」は室町時代に發生したが、これは *dia* でも *cia* でもなく、一種の中間音であつたといひ、長音の中才段のものは開合の二種があつて「ひろがり」・「すぼり」と呼んで、*o* と *o* とであらしてある。*u* 段の長音も才段と同じく近古までは存し、入聲音は漢籍佛典を讀誦する際に正しく守られたが、*pk* の音の場合には開音となり、入聲の性質を失ひ、*t* の音の場合には入聲をもち、促音は鎌倉時代には全く表記しなかつたり、表記するにしても用字が一定しなかつた。吉澤博士の調査によると、「ン」・「ツ」の外に「ケ」・「フ」の假名を用ゐたことを引き、これは親鸞に限つたことではない。さうして室町時代から「ツ」に統一された。撥音は *mn ng* の *ng* が早く「ウ」となり、室町時代には長音となり、連音は撥音の *n* を受けるとき、母音の「ア」・「イ」・「ウ」は「ナ」・「ニ」・「ヌ」となる（例へば御主

撥音の研究

入聲音の研究  
促音の研究

を「オンナルジ」、御入り候を「オンニリ候」、寒雲を「カンヌン」と呼ぶが如く」と説いてある。

語法

次に語法については各品詞別にその種々相を説いてある。名詞の複数を示すに、その名詞を二つ重ね

來つたが、室町時代に至ると、固定すること、接尾辭「ども」は人以外に無生物にも添へること、敬讓

を細かに説ける外、輕蔑の意を示すに「しや」の接頭辭は今昔物語の頃より用ゐ來つたこと、室町時代

代名詞の變

には最も敬意を示す接尾辭に様の字を以てせること、代名詞には自稱に室町時代より私・それがし・身

ども・我身・みづから・此の方は・こち等を生じ、對稱になんだち・その方は・貴所・御邊・ねし・おねし

・おのしを用ゐ、事物代名詞には「このやう」・「そのやう」・「あのやう」の意味に、室町時代に至りて

は「これやう」・「それやう」・「これつら」・「それつら」・「これしき」・「あれしき」が用ゐられ、人・場

所などを漠然とさす場合に「そんぢやう」が用ゐられ、史記抄には「ソソヂャ」と書いたところもある

ので、倭訓栞の「そんでふその」の説は疑問があるといひ、「どこ」は夙く梁塵秘抄に見え、方向代名詞

「あち」は室町時代には「あちら」とも用ひ、「そなた」の外に「そかた」も延慶本平家物語に、「いづ

かた」より出た「どかた」は和歌童蒙抄に見えてゐることを注意してある。

助詞のうち、體言の格を示す「の」と「が」につき、「の」は敬し、「が」は卑しめる相違があつたこ

格助詞の用法の變化  
とぬけ言葉

とを説き、補格「を」の代りに「より」・「から」を用ゐることが起つたことをいひ、安藝の「とぬけ言

葉」の如く、室町時代には「後ニハ富貴ニナラウ云テ」の如き例は抄物類に見えてをる。呼格には上に

動詞活用の變化

置く感動詞に「ヤヲ」の如きが生じたことをいひ、形容動詞の「なる」は室町時代からは「な」が勢力を増し、連體格は勿論のこと、終止形にも「なる」の代りに「な」が用ゐられるに至つた。

動詞の活用の變化も甚だしく、二段活用の一段化は夙く關東方言にあらはれたもので、ア行・ワ行の終止連體は鎌倉時代には「ウ」・「ウル」と發音したばかりでなく、ハ行の「ふ」・「ふる」もヤ行の「ユ」

・「ユル」も「ウ」・「ウル」と發音したやうであるが、室町時代になつて一部には長音化するものもあつたが、全體としては「ユル」に統一されるに至つたことを橋本博士の説を引いていろ／＼と説いてある。

敬語法の變化した種々相

用言の法の中、形容詞の敬語法に近古よりは「御戀しく」の如く御の接頭辭を直接に附ける如き傾向が生じて來たことや、動詞や助動詞の敬語法中、「なる」・「ある」を用ゐて尊敬をあらはす方法が近古以

來盛んになつた。「あり」・「なり」そのものには本來尊敬の意を含んでゐないけれども、これが動作を意味する漢語の名詞か用言の連用形かを承けることによつて「御寝モ打解ケナラザリシカバ」の如く敬意

を表す。これも室町時代になると、その間に他語を挿入することが殆どないやうになつた。「ご許されあれかし」の如きは天草本に見えてゐる。而して次第に「なる」よりも「あり」を用ゐることが多くなり、

「ある」の代りに「候」も用ゐられ、後には「候」の代りに「サフヘ」、次には「サ」、それから「ソウ」をも用ゐるものも生じた。「おはす」の上略「わす」は鎌倉時代に始まつてゐるが、室町時代には下二段に活用させ、來るといふ意に限定して用ゐられるに至つた。その他「御りやる」・「おぢやる」等の語史

から室町時代に使つた「しも」・「さしも」・「しむ」・「さしむ」等の敬の助動詞の用法等までも一々委しく説いた。

表現の簡易  
中古語の特  
色が次第に  
失はれた

条件法のうち、「ずは」が「ざ」となつたことや、近代肥前詞の「見うば」・「讀まうば」の如く「うば」を用ゐたことや、「たれば」の變形した「たりや」より「間」・「さかいに」などにも觸れてある。助詞にも説き及んである。中古から近古に入つて微妙な言葉、悠長な表現が次第に減じて雄勁な簡潔な表現が流行し、すべてが簡單化する傾向を生じ、中古語を特色づける多數の助詞・助動詞が變動を受けた跡を詳かに説いてある。

佐藤鶴吉氏  
の近世篇

資料の研究  
史的考察

國語學史か  
ら眺めた俳  
書

近世語の語  
彙

佐藤鶴吉氏の近世篇は近世の國語の研究史的考察が主になつてゐる。首に近世語とその研究資料の見方、そのつゞき研究史的考察、國語學者及びその他の俗語説の三(章)に分けてある。第一の首に一般に對話を口語に、地の文を文語に扱ふが、その方針が中々に徹底してゐないことを田舎源氏やおあん物語によつて證し、近世語をいかに呼んでゐたかを検討し、次に近世語研究の不振を説き、言韻及び語法に關しては研究史の資料とすべきものが管見に入らないので、語彙に關する研究と文獻とを擧げると述べ、國語學史から見た俳書につき、俳諧初學抄・はなび草・毛吹草・言葉寄・片言・御傘・世話盡を説き、更に語法書の一・二と語彙研究として一步及び通言便家抄を見、難字訓蒙圖彙・贅頭節用集・女重寶記・世話重寶記・和爾雅・和漢古諺・書言字考・本朝世諺俗談を解題し、それらの中に包有してゐる種

々の語彙をとりあげ、若しくは書中に述べてある言語觀にふれ、これらの中より近世語を把羅剔抉しようとしつてゐられる。

口語資料

次に國語學者の部では、白石の東雅、徂徠の南留別志、田宮仲宣の橋菴漫筆、柳里恭の雲萍雜誌、獨寢、谷川士清の和訓栞、貞丈の貞丈雜記、安齋隨筆、本居宣長の遠鏡、富士谷御杖の詞葉新雅、俳諧天爾波抄、清水濱臣の濁語考、橋守部の俗語考、喜多村信節の嬉遊笑覽、大田南畝の一話一言、柳亭種彦の足薪翁記、柳亭記、柳亭筆記、小寺玉晁の難題爲可話、雀庵のさへづり草等について口語資料を指示し、江戸詞・甲斐なまり・八丈島方言・諺・消息語・忌詞・戀詞・流行語・通言・雜妓の詞・隱語等につきそれごとく説くところがある。

湯澤幸吉郎  
徳川時代言  
語の研究

補助動詞・  
補助形容詞

江戸時代の言葉の文法的系統に従ひて一々例を引いて説いたのは、刀江書院の言語誌叢刊の一篇として出した湯澤幸吉郎氏の<sup>徳川</sup>時代言語の研究である。この書は室町時代の言語研究につき、更にその研究を江戸の前半期に及ぼされたもので、その研究の資料とされたものは、主として歌舞伎狂言本と淨瑠璃本とで、その他にも廣く及んでゐる。普通に廣く行はれてゐる體系によつて幾多の例證を忠實に擧げてある。中に補助動詞や補助形容詞の目を立て、前者には「遊ばせ詞」の外に「でやる」・「であんす」・「でやんす」・「でやす」の如き、「おんじやる」・「こます」・「こわる」・「こある」・「こんす」・「こあんす」・「ごわんす」・「たもる」の如き類をも擧げ、後者には「おりない」の如きをも擧げてある。國語調査會

の口語法別記と共にこの時代の研究に根本資料を摘出された労を多しとすべきである。唯室町時代の言語が江戸時代に移つてゆく全體的の姿を一章説いたらばと思ふ。尙その資料につきても笑話類の本を逸した如き嫌ひがないでもない。江戸時代の後半につきては氏の手により今後蒐集大成される日のあることを望む。

吉澤義則氏の文章史

吉澤義則氏は文章の種類によつて用語の性質が異なることもあるから、國語の研究を徹底せしめようとするならば、まづその屬する文學の種類を究め、而して後その用語の慣例を知らねばならぬとの立場から、國語史學の一編として文章史も執筆された。講座の一篇で大きなものではないが、見るべきものがある。まづ西田直養の篠舍漫筆の説や榊原芳野の文藝類纂の文章分類を挙げ、奈良朝に行はれてゐた國文には東鑑體と宣命體と假名専用體の三つが行はれてゐたことから始め、簡單に歷朝の文章史を説き、明治の言文一致體に及んであつて、美妙の「です」調、二葉亭の「だ」調、紅葉の「である」調にも觸れてある。さうして古來人々の所説をひろく引いて次に自家の見を述べてある。

「です」調・「だ」調・「である」調

### 四十四 國語史の研究(その二)

小林好日氏の日本文法史

小林好日氏は昭和八年明治書院の國語科學講座に日本文法史を執筆した。國語の語法的範疇の起原を知り、その今日までの變遷沿革を跡つけることを文法史の目的とし、七品詞に分ちて、その變遷を説いた。代名詞は尊敬・謙讓等、待遇の言ひあらはし方を要求した結果、變遷を重ねたものといひ、數詞の構成はオーストロネシア語などにも手指と關係あることを述べ、その倍加構成法も兩手の指を同數づつ並べることから來てゐるとの説を甘なひ、「ひた」は直、「ふた」はその倍數、「はたち」もこれより出で、「みつ」は充實の義、「よ」は「さや」「さよ」と同義、「す」の「す」は接頭辭、「の」は手と同語源、「な」は白鳥博士の「並無」の説よりも「似無」の義ではなからうかといひ、「や」は「よ」の倍數であるが、佛經に八もしくは、その倍數を用ゐる語の多かつたことから來たものであらうと説き、「こ」は白鳥氏の屈む説をよしとされてゐる。

數詞の語原

動詞の原形  
語基構成用  
母韻の變化

動詞の原形に關してはまづ鹿持・アストン・チェンバレン及び金澤博士の説を挙げ、活用組織は  
(一) 語基構成用母音の變化 (二) 接尾語「る」「れ」の添加

國語史の研究(二)

「る」「れ」の語尾は別の民族の語法と見る

の二つの異つた原則の上に立つてゐるといひ、世の一派の學者が「る」「れ」の語尾をもつてゐる活用を説明する爲に、「ある」とか「うる」とか既存の語が母韻變化の活用に膠着して生じて來たものと説きなしたり、また或る一派の人はこの二種の方法を兼ね具へてゐるものを原形と考へてゐるが、共にこれは誤であるとし、大膽に四段活用を以て動詞の語形變化を形造る言語習慣を持つてゐる主要の日本民族に、他の接尾語の添加を以て活用としてゐた民族の言語が混化したものと斷言してゐられる。併し無論實證的な説明はないから、危険性のあることは免れない。

この混和は母韻變化の形式に混亂を生じ、種々の變化を生じたが、やがて類推によりその亂雜のうち統一を生じ、上二下二といふ種類にまとまつて行つたものであらう。この類推に洩れたものが左變化となり、二段活用が四段活用に轉じ、更に一段活用となつたと説いてある。「見る」を萬葉集には「もる」「似る」を古事記及び類聚名義抄には「のる」と訓んだ例のあるのは四段活用に活いてゐた證と説いてある。さうして各時代の移つていつた跡をたどらうとしてある。

形容詞成立の想定

形容詞に二種の活用があるのは久活は夙く成り、志久活は新しく出來たもので、久活が「く」「し」「き」の語尾を具へてゐた時代に志久活は語幹に語尾の「し」が附いてゐる唯一個の形だけで終止にも連體にも用ゐた或る時期を経過し、後整備してゐた久活に同化され、統一されたものとし、「し」までを語幹と見る説を斥けてゐる。また形容詞が兩行に活用をもつてゐるうち加行語尾に於ては動詞と同方

向の發達を考へるが、左行語尾並びに接尾語の「さ」「み」等につく形に於ては形容詞独自の發達と考へると説いてある。奈良朝の形容詞には「か」「け」と活用するものが残つてゐるのは一時代前に活動したものゝ殘骸に過ぎないと見てゐられる。「逢ふを無み」「日を多み」の「無み」「多み」を四段の動詞に見る金澤博士等の説は斥けてある。かういふ風に原形や推移した形を想定し、それに合ふ例を引くことを怠つてなす。

「す」「さ」「しむ」の語史

助動詞のうち使役の「す」「さす」「しむ」につき、奈良朝には「しむ」を用ゐ、平安朝には「す」「さす」が一般に用ゐられ、「しむ」は漸次減少の一路をたどつたことは、竹取物語には「す」「さす」は三四十も用例があるが、「しむ」は唯二個あるに過ぎない。源氏物語には「す」「さす」は數へきれない程であるが、「しむ」は一二個あるだけで、それも皆「給ふ」を伴ふものばかりであるといふ如く實證的に説いてある。これが方言は一段に化するものが普通であるが、またさ・し・す・せと四段に活くものがある。京坂から中國・四國方言には兩者を合して「さ」「し」「す」「すれ」と活用させてある。愛媛では「さ」「し」「す」「しやあ」と四段に活かしてゐる。古く宇津保物語に「木の葉を宿にふかさぬ秋風の」とあるは四段に活いた例である。奈良朝に尊敬をあらはす助動詞と同じものであると説いてある。

待遇の助動詞

待遇の助動詞につきて昭和三年十二月の國語と國文學に足利時代の言語の待遇法について論じたものを補つてある。「マラスル」「マラス」「オマラス」「オマツス」「オマス」「マツス」「マス」等の

時階の助動詞と動作態

「り」と「た」との語史

變遷も説き、否定の「ナンド」の古い形に「ナムシ」の存してゐたことも説いてある。

時の助動詞は過現未の主觀的時間段階をあらはす時階の助動詞（き・けり）と動作の時間的態様を現す動作態の助動詞（つ・ぬ・り・たり）とに分け、「ぬ」「つ」は共に完了態に用ゐるが、「ぬ」は單なる完了、「つ」は完了と共に動作のひきおこす結果の觀念を伴ふものといひ、「り」と「たり」とは繼續・存在・完了の三態をあらはすが、中に「り」の方が古いとし、記紀の用例を考へ、繼續態は五、存在態は二九、完了態は僅かに一といふ統計を擧げてある。「たり」は記紀にはなく、萬葉集卷十四には「り」が十五例あるに「たり」は纔に一例に過ぎず、源氏物語には末摘花の卷に「り」の五十三に對し「たり」は九十四を數へるといふ如く實證されてゐる。

助詞は職分の上から文の成分の關係を規定する關係助詞と文の意味を修飾する修飾助詞と感動助詞との三つに分類して、古多かつた感動助詞が後に至るに従ひやうやくその數は減するやうになつたと簡單に説いてある。氏は岩波講座國語教育にも日本文法史を執筆した。

また昭和十一年九月刀江書院より日本文法史を單行した。大體は國語科學講座をもととし、これに副詞と形容動詞の一章と助詞の終つた後に文に關する三章を加へてある。引例等に關し龜井孝氏の批評が言語研究に載つてゐる。

金田一 京助  
國語系統論

金田一博士の國語史系統篇は昭和十二年に出た。序論には言語と民族より筆を起し、世界言語の形態

單行の日本  
文法史

世界言語分  
布圖等

南洋語系説  
・太平洋語  
系説・オース  
トロアシア  
語系説

ウラル・ア  
ルタイ語系  
説に活を入  
れた

的並びに系統的分類を擧げ、シュミットの世界上の言語系統圖に基き、氏の意見を加へた世界言語分布圖、雙數及び三數分布圖、單語品等差別分布圖、數詞構成分布圖を挿み、形態的分類の條にはシュタインタールの抱合語・語根孤立語・語幹孤立語・併立語・膠着語・曲折語の六分説から自家の説を擧げ、系統的分類は十二類八十餘種に分け、第二章には前期の系統論として支那語系統論より南洋語系、アイヌ語系、アリアン語系、波斯語系、希臘語系、ウラル・アルタイ語系、朝鮮語同系、琉球語同系説を紹介し、第三章には現代の系統論の部としてラベルトン博士の南洋語系説、ワイマント博士の太平洋語系説、ラムセット博士のアルタイ語系説より堀岡文吉氏の汎太平洋語系説、松本信廣氏のオーストロアシア語系説を擧げて批評し、次に新村出博士のウラル・アルタイ語系説を引き、南洋語と共通の單語の研究は尙同系論にまで進展することは困難であらう。朝鮮語との關係は單語の上に止まらず、明かにも相似點が次第に見出され、格助辭 *i* と *い* の一致、複數の助辭の *est* と「たち」の一致、代名詞 *me* と我が古語の第二人稱の意禮、否定の「な」と朝鮮の *nie* 等の相似は決定的ではなくとも偶合でないとの説を甘なひ、最近小倉博士の母韻協和の現象も時代が古ければ古い程、明瞭にあらはれてゐる説を引き、一時停頓してゐたウラル・アルタイ語系説に活を入れたものといひ、第四章の結論には諸學説の綜括として、グルンツェルの擧げたアルタイ語族比較文法附比較辭書は土耳其・蒙古・ツングース・滿洲語に於ては相互の間に近似するものが多いが、朝鮮語及び日本語になると大きな隔りがあつて、すぐに一緒

アルタイ語族と國語との親疎關係

には出来ないことを對照して示し、次に母韻調和説を擧げ、有坂秀世氏の古代日本語に於ける音節結合の法則を紹介し、最後にアルタイ語族と國語の親疎關係を圖にて標識して面白く一卷を結んである。蓋し諸家の系統論を拉し來つて縦横に批評してある好著である。

日本語の系統、特に數詞に就いて

因に云ふ、白鳥庫吉博士は岩波講座東洋思潮に「日本語の系統、特に數詞に就いて」を掲げ、數詞の構成法、數詞の意義、神典に現れた數詞、數詞と同語源の言語につきて一家の説を示された。

山田博士の文字篇、日本文字學概説、テールルの分類説を斥く

山田博士の文字篇は國語史の一篇として昭和十二年に出た。氏はさきに改造社の日本文學講座に日本文字學概説を書かれたが、この書はそれを一層詳密に説かれたもので、章を十八に分けてある。まづ文字の意義、文字の種類より筆を起し、次に「文字の種類上の分類として」の章にはテールルの分類法を擧げて批評し、表意的書き方と音符的書き方の中、繪畫的文字は原始的のもの、アルファベットの記載は最も進歩したものとして一般に考へてゐるが、それは西洋人の誤解であつて、梵字の如きは前記二つといづれにも入れられないのを見てもテールルの説は當つてゐないと斷言し、「文字の目的と本質」の章には音字が最も進歩した文化的の文字で、原始的の文字が野蠻未開なものだといふならば、數字は漢字でも羅馬字でもアラビヤ數字でもすべて最も野蠻的なものと云はねばならぬと逆に世説を非難し、我が國の文字に即した文字學が今日に至るもいまだ成立しないのを遺憾とし、羅馬字だけの文字學の跋扈してゐるのを憤つて、筆を執つて漢字と假名とが日本の言語文章に對する本質上の關係を具有することを明かにしようとなつたもので、そのしごととしてはまづ

文字の目的と本質

我が國の文字に即した文字學

(一) 神代文字有無の論

(二) 漢字の略史とわが國に輸入せられて以後のことども

(三) 假名の發生と變遷

(四) 漢字と假名との混用

の順序で説を進めてある。まづその(一)に就いては有といふ説、無といふ説をひろく見て要約して述べた。 (二)に就いては、漢字は形音義の三つを具してゐるが、その本質は一定の意義をあらはす點に存する、それが不易といふ特色をもつてゐるので、時の古今、國の東西をとはず、行くところとして行はれざるは無いと禮讚し、次にその起源を敘し、發達を述べ、書體の沿革を相當委しく説いてある。從來文字史には書風のことは殆ど顧みなかつた。また書道史には字體のことを疎略して説かないが、共に宜しくないと評し、我が文字史の上に最も深い關係のあるのは王羲之であり、つゞいては唐の中期までの書家の書風・書體であり、これらが我が片假名・平假名の母體をなすものであるから、これらの書の研究が我が文字史の上から精査せられねばならぬと論じてある。

漢字の略史、書體の沿革

漢字及び書道

次に本邦に傳はつた漢字及び書道の一斑の章には、我が國の書風が王羲之を祖述したものであることを東大寺の獻物帳により光明皇后の樂毅論、また萬葉集、御物喪亂帖、前田侯爵家の孔侍中帖等によりて證明し、令義解を見ても書を美術的に取扱ふことが我が國家の方針であつたことが分るといひ、次に



漢字を使用した當初の状況に關しては、最初は純漢文のものから萬葉假名、和漢混淆文及び宣命體の文にも、一々必要に應じてそれらが用ゐられた所以を説き、次に假名の意義及びその發生につきて、我が假名といふものは、漢字から出でて音字となり、我が民族の慣用によつて國語を寫し、國文を書きあらはすものを指し、翰苑の殘卷や鶴林玉露や全浙兵制附錄、日本風土記に載つてゐるものは我が國字を寫した音字であつても、これらは我が民族の慣用したものでないから、假名の中に入るべきものではないといひ、また邦人の用ゐたものでも一字一音でないもの、例へば宿禰や當麻の如く二音に用ゐたものは勿論假名としないとの方針により萬葉假名を検討し、その發生は漢字をば國語に従はしめようとする民族の要求から起つたもので、漢字の束縛から國語を解放し、同時に國語をして文化史上に貢獻せしめた第一歩であると斷じ、この發生期の假名資料を擧げ、大矢氏の假名源流考以外のもの、金石文、正倉院御藏の大寶の戸籍を一々調査して、まづ古事記奏上以前の文獻に見えた假名資料から音または訓を用ゐた假名の一括表を作り、次に古事記、萬葉集、續日本紀、風土記、養老以下の戸籍帳等に用ゐてある假名を各別々に音と訓との假名表を作り、その字音の取扱ひの方針を説き、次に萬葉假名より假名への第二期に及び、萬葉假名は字數の淘汰と字形の選擇とにより簡易化されたことを具象的に明かにしようとし、萬葉假名の字數が奈良朝以前には一千八十一であつたものが漸次淘汰されて、奈良朝より平安朝には四百四十五に淘汰されていつたと計數を示し、それより種々の文獻につきて萬葉假名の字形の簡易化

發生期の假名資料

假名の一括表

國語の將來に關して

された跡をたどり、假名の確立に及び、最後に漢字と假名との用途につきて、假名專用説、羅馬字説を唱へられて五六十年、今に實用に至らず、漢字と假名の混淆文のすたらないのは、本質的に國語の特性に最もよく適してゐるが爲かと思はれると云つてゐられる。尤も漢字節減とか省字・略字等の國語政策問題には觸れてない。漢字史の方は尙詳述すべきこともあるが、假名の發生に關しては緻密の考察があり、國民の自覺の上から眺めて筆を下されるところ貴きものが少くない。

國語の中に於ける漢語の研究

山田博士は昭和十五年四月また「國語の中に於ける漢語の研究」を出された。往年出された「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」の姉妹篇と見るべきもの。序説以下漢語の傳來、本來の漢語と認むべきもの、範圍、漢語の特色、漢語の形態の觀察、源流の觀察、漢語の國語の内に入れる状態、漢語の影響によりて起りたる國語の種々の状態、結論の九章から成つてゐて、漢字の傳來の章には史的概観と研究方針とを示し、漢學佛教の渡來より國語文獻に入つてゐる漢語彙も擧げてある。本來の漢語の範圍に關しては吳音・漢音・唐音及び古音語を擧げ、漢語の特色の章には國語との異同を概説し、漢語の形態の觀察の章は著者の最も力を盡したものと見るべく、韻鏡の説明も要を得、漢吳音の歴史的由來も最も詳密にして引例の文字につきても一つ／＼精密な考證を加へ、我が國に於ける特殊な國音までも説いてある。これらの倭音は小川本華嚴經音義私記や新撰字鏡や承曆最勝王經音註・類聚名義抄等より集められたものであるが、所謂吳漢音といふものも實は一種の倭音であるとも考へられる。源流の觀察の章は

漢學佛教の渡來より國語の文獻に入つた漢語の觀察の形態

漢吳音の歴史的由來

倭音

源流の觀察

倭名鈔を中心とし、漢語流入の事項を種々の方面から觀て、これを文化史的に國語史的にからませて考察し、その流入の手續も委しく論じられてあり、漢語の影響によりて起りたる國語の種々の状態に關しては音韻に及ぼせるもの、造語法に及ぼせるもの、語法に及ぼせるものと區別して綿密に説いてある。字音につきては議論もあらうが、とにかく我が國の漢字史として價値の高いものである。

今泉忠義  
國語發達史  
大要

今泉忠義氏の國語發達史大要は昭和十四年三月白帝社から出た。著者は世上一般の國學者が平安朝至上主義に傾き過ぎてゐるのを憐れなるとし、國語の成長した姿を見る必要を感じ、師範學校・中學校に國語發達の大要が新たに課せられたのを機とし上は奈良朝より平安朝・院政・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の五篇に分ち、音韻品詞につきてその變遷を説き、國語の眞の生命を知らしめようと企てたもので、山田・湯澤諸氏の研究を利用すると共に自家の研究を加へて平明に周到に説述してある。各時代に敬語法を加へてあるのも國語の上には當然のことながら著者の注意を喜ぶべく、奈良朝には簡單ながら東語の語法の一項を加へたのも宜しく、各篇に新しい思ひつきも加はつてゐる。但し品詞の語法が主となつてゐて語彙の上にはあまり多くの紙幅を與へてないので、文法史と見る向もある。江戸時代の前半には湯澤氏の研究があるが、後期のはまだ纏まつたものが出ないが、氏は諸書を涉獵してそれを補つた部も少くない。古い自稱の代名詞「まろ」は奈良朝文法史に逸してあるが、氏は平安朝のものとし且これを婦人・小兒の語に限るとした誤など二三の指摘すべきものがないが、好著の一つである。

敬語法  
東語の語法

四十五 ラヂオ放送とことばの講座

ことばの講座  
ラヂオ放送

國語に對する國民の自意識を強くしようとの目的で、音聲學會が放送協會にわたりをつけ、ことばの講座を設け、ラヂオで全國に放送されたのは昭和五年が始めである。第一回到放送された人士とその題目は次のやうである。

- 一、開會の辭 上田 萬年
- 二、發音機關のしくみ(一・二) 岡倉由三郎
- 三、東京語のアクセントと言葉調子(一・二) 神保 格
- 四、琉球語の母韻組織と口蓋化の法則 伊波 普猷
- 五、文字の話(一・二) 後藤朝太郎
- 六、外來語について(一・二) 市河三喜
- 七、室町時代の通俗語と能の狂言 和田萬吉
- 八、意味の變遷(一・二) 藤岡勝二

ラヂオ放送とことばの講座

現代

- 九、方言(一・二) 東條操
- 十、平假名の話 吉澤義則
- 十一、語源と語史 新村出
- 十二、…………… 金田一京助

以上の講演はことばの講座第一輯として東京研究社から同六年七月発行した。

九州では日本放送協會九州支部の計畫で昭和五年の十月より同六年三月まで十名の講師によつて九州方言講座が放送され、同年五月放送講演集が出版された。その題目と講師とは次のやうである。

- |         |       |
|---------|-------|
| 九州方言の輪廓 | 吉町義雄  |
| 熊本縣の方言  | 田中正行  |
| 福岡縣の方言  | 安田喜代門 |
| 佐賀縣の方言  | 澁谷武夫  |
| 長崎縣の方言  | 吉田弘文  |
| 大分縣の方言  | 堀江與一  |
| 宮崎縣の方言  | 小川新一  |
| 鹿児島縣の方言 | 原田芳起  |

九州方言講座の後に 春日政治

吉町義雄 中に就き吉町氏のは、九州方言の古今の沿革を述べたもので、その大觀をよくつくしてあり、熊本縣は從來この方面の研究があまり盛んでなかつたに、この講座によりて明かとなつたものが少くない。佐賀縣のは舊藩の關係から二つに分れてゐた佐賀辯と唐津辯との差別を明かにし、宮崎縣のは臼杵方言と宮崎方言とに分ち、佐賀辯の「かんだ」・「ばんだ」・「なた」・「のまい」から、唐津辯の「け」・「ば」・「たい」より大分縣の敬の敬語の少いことや、豊後淨瑠璃や、中津方言の「何げえち」・「こげつち」・「ちこ」や西部國東地方の「お前ぐう」や鹿児島方言の急迫な音調や敬語法の「ごわす」・「おぢやる」・「たもんせ」・「ぎやす」等いろいろ細かに述べられてゐる。

東京放送局 第二回ことばの講座 岡倉由三郎 東京放送局では昭和七年第二回目的のことばの講座を開き、岡倉由三郎氏以下十二氏に囑して放送をした。翌年十二月中央放送局編「ことばの講座」として刊行された。その題目と氏名は次のやうである。

- 岡倉氏はことばの話、國字の問題二講
- 神保格氏は標準語といふもの、標準語と東京辯、ことばの正しい読み方話し方の三講
- 市河三喜氏の現代語について、外國語の読み方について、外來語についての三講
- 玉井幸助氏の漢字の読み方
- 橋本進吉氏の假名遣について

ラジオ放送とことばの講座

- 新村出氏の標準語の問題
- 東條操氏の方言について
- 伊波普猷氏の琉球の方言
- 吉町義雄氏の九州方言
- 泉井久之助氏の近畿の方言について
- 岡田稔氏の名古屋の方言
- 金田一京助氏の東北方言について
- 以上の十七講を収めてある。

放送協會では昭和十年二月より三月にかけて第三回目的ことばの講座を開き、柳田國男氏以下十三氏が放送をした。この講演を集めて同五月「ことばの講座」第二輯として刊行した。前の放送は主として日本現代の言語の實際にわたる諸問題の解法に資する方針であつたが、このたびは時代の變りや趣味に關する傾向が多い。即ち

- 家具に關する日本語 柳田國男
- 食物に關する言葉の變遷 木枝増一
- 服飾に關する言葉の變遷 宮本勢助

放送協會第三回目的ことばの講座

- 洒落と地口の今昔 近藤忠義
- 平安朝のことば 吉澤義則
- 武家のことば 野間光辰
- 町人のことば 木谷蓬吟
- 流行語 土岐善麿
- 日本語の中の外國語 神保格
- 手紙のことばの變遷 宮田和一郎
- 苗字の話 太田亮
- 學校すらんぐ 石黒魯平
- 婦人のことば 吉田澄夫
- 感動詞の歴史 柳田國男

中に感動詞の歴史は各地の方言につきその發生を細かに説いてある。婦人のことば・町人のことば・武家のことば等階級によつて相異なる言語研究は面白く、その他大衆向に短い時間に放送されることであるので、委しくはないが、限られたものにつき研究の片鱗は窺はれる。これらにより大衆の國語に對する自意識は次第に發展せらるべきである。

短歌講座に  
於ける國語

現代

1410

改造社の短歌講座第九卷修辭文法篇（昭和七年七月）には福井久藏の枕詞と序詞、山田孝雄博士の奈良朝文法概説、安田喜代門氏の平安朝文法概説、松山愼一氏の萬葉集の用字法、橋本徳壽氏の萬葉集の助辭、松尾捨治郎氏の歌學文法の諸篇を載せてある。大正の末から昭和三年にかけて新潮社の日本文學講座には國語學に關するものは殆ど載せなかつたのに比し著しい對照であると思ふ。

## 四十六 國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

明治書院の  
國語科學講座

輓近科學の進歩につれ、國語を心理學や美學や音聲學や社會學や地理學などと交渉をもたせ、新しき研究の分野が續々と開かれるに至つたことは實に昭代の慶事である。随つて近年に至り明治書院は國語科學講座の刊行を企て、昭和八年五月第一回配本を始め十年三月十二回分を完了した。その部門や執筆者を擧げると次のやうである。

音聲學・言  
語學一般に  
關して

- 音聲學・言語學一般に關するものは
- 音聲學概論 佐久間 鼎
- 言語學概説 神 保 格
- 言語學史 小林 淳 男
- 言語史講話 石黒 魯 平
- 音聲物理學 小 幡 重 一
- 言語社會學 田 邊 壽 利

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

1411

現代

- 國語音聲學 神保格
- 應用音聲學 大西雅雄
- 比較言語學 福島直四郎
- 音聲學史 大西雅雄
- 音聲生理學 岡田和一郎
- 言語心理學 神保格
- 言語美學 金原省吾

國語學・國語學史・國語學書目に關するもの

○國語學・國語學史・國語學書目に關するものは

- 國語位相論 菊澤季生
- 國語書目解題 龜田次郎
- 國語學總說 安藤正次
- 國語學史 重松信弘
- 漢文訓讀と國文法 山田孝雄
- 國語の系統及び國語と他國語との關係に屬するものは
- 漢語と國語 岡井慎吾

國語の系統及び國語と他國語との關係

國語の時代的研究

○國語の時代的研究に關するものは

- 梵語と漢語 長井眞琴
- アイヌ語と國語 金田一京助
- 朝鮮語と日本語 小倉進平
- 國語系統論 新村出
- 西洋語と國語 重久篤太郎
- 上古の國語 佐伯梅友
- 中古の國語 安田喜代門
- 近古の國語 土井忠生
- 國語發達史序說 安藤正次
- 日本文章史 吉澤義則
- 文語・口語法及びその史的研究に屬するものは
- 日本文法史 小林好日
- 文語法精說 木枝増一
- 口語法精說 湯澤幸吉郎

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

現代

文法の原理 小林英夫  
音聲口語法 三宅武郎  
國語法要説 橋本進吉

方言に関するもの

○方言に関するものは

方言學概説 東條操  
アクセントと方言 服部四郎  
本州東部の方言 橋正一・東條操  
新語論 柳田國男  
本州西部の方言 東條操  
言語地理學 江實

文字に関するもの

○文字に関するものは

文字學概説 後藤朝太郎  
漢字の研究 岡井慎吾  
萬葉假名 遠藤嘉基  
片假名の研究 春日政治

國文・國歌の表現に関するもの

○國文・國歌等の表現に関するものは

平假名の研究 吉澤義則  
ローマ字の研究 日下部重太郎  
國語韻律論 相良守次  
國語文章論 波多野完治  
兒童語の表現 松本金壽  
表現學序説 城戸幡太郎  
國語形體論序説 松本金壽  
國語と國民性 三井透  
國語と社會性 澤田恭輔

解釋に関するもの

○解釋に関するものは

近世解釋學 佐藤鶴吉  
中世解釋學 能勢朝次・小野直  
古代解釋學 山岸德平・川瀬一馬  
解釋學序説 石山脩平

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

現代

國語教育に  
關するもの

○國語教育並びに實地の取扱ひに關するもの

- 國語教育史 渡邊 茂
- 國語教材の變遷 佐々木一二
- 國語の學力測量 田中寛一・丸山良二
- 讀方教育論 西尾 實
- 綴方教育論 丸山林平
- 國語教育學 石山脩平
- 國語科學教育史 飛田 隆

○教育政策に關するものは

- 國語政策論 保科孝一
- 標準語の問題 石黒魯平
- 假名遣問題 三宅武郎
- 國字問題 日下部 重太郎
- 國語陶冶とラヂオ 岡倉由三郎
- 國語純化と基本語 土居光知

で七十二題目に分れてゐる。以上の中には新考の見えるもの、努力を累ねたもの様々であるが、國語に關する諸門に互り新舊相雜りて總動員した觀がある。國語學の諸方面に於て大きな示唆と教訓とを與へたことが少くない。

岩波講座日  
本文學

岩波書店はこれに先ちて昭和六年から同八年にかけて岩波講座日本文學を出したが、その二十回に互る講座の中には次の如き國語學に關するもの十一篇をまじへた。

- 萬葉集の研究 用語法を主として 森本治吉 (1)
- 日本文法要論 山田孝雄 (4)
- 支那文字學 武内義雄 (5)
- 方言研究の概觀 東條 操 (13)
- 國語音聲學 安藤正次 (14)
- 國語學史 時枝誠記 (15)
- 國風暗黒時代に於ける女子をめぐる國語上の諸問題 吉澤義則 (17)
- 國語學概論上下 橋本進吉 (17, 19)
- 明治國語學書目解説 土井忠生 (18)
- 假名發達史序説 春日政治 (20)

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育



橋本進吉氏の國語學概論

中に橋本博士の國語學概論は全篇を九章に分ち、國語學の概念、日本語の概念、國語學の諸問題、國語學の資料及び研究法、日本の方言、日本の標準語、口語の變遷、日本の文字、日本の文語の九章に分ち、丁寧親切に解説して所々に参考書目をも舉げてある。藤村作博士の編纂にかゝる日本文學大辭典の中に氏のかゝれたるものと参照して見るべきもので、日本の音韻及び國語の系統論には觸れなかつたのは、安藤氏の國語音聲學との重複を避けられる意味もあつたと思はれる。

安藤正次氏の國語音聲學

安藤氏の國語音聲學は一般音聲學と國語音聲學、國語の母音の考察、國語の子音の考察の三章に要約して説き、連音論に及ばなかつたことを斷つてゐられ、その基本的ものはこれを明かにされてゐる。

時枝誠記氏の國語學史

時枝氏の國語學史は觀點の新しいものがある。別に單行本につきて述べた。山田博士の日本文法要論はその前著日本文法論の改定の要旨を窺ふべきものであるが、これは文法の條に説いた。

武内義雄氏の支那文字學

武内氏の支那文字學は支那の文字の形、文字の音、文字の意義の三章に分ち、文字の形の章は字形の變遷、文字の構造の二節に分ち、我が明治三十二年河南安陽縣で發見された殷時代の龜甲文の研究から漢代の學者に夙く注意された鐘鼎等の金石文字の研究に及び、秦篆の制定・唐楷の整理に至るまでの變遷を明かにし、六書説文につきては吳大澂の字說、孫詒讓の名原、羅振玉の殷墟書契考釋の如き支那近代學者の說に私案を加へてこれを明かにし、文字の音には音韻關係の文獻を舉げて、それに基づきて次に

變遷を説き、魏晉以前、六朝末から唐初まで、その中葉時代、宋時代、元明以後の六期に分ちて論じ、次に古韻の研究に入り、王念孫と江晉三の古韻二十一部表や孔廣森の陰陽説を折衷した大島正健氏の説などを引いてその説をまとめてある。名の如く支那文字學であるが、我が文獻學には漢字を離れられない關係上國語學の中に攝して差支へない。

春日政治氏の假名發達史序説

春日政治博士の假名發達史序説は推古朝に於ける眞假名の發生より説き起し、次にそれ以後眞假名の發達の跡をたづね、奈良期に於ける眞假名の隆盛から平安朝初期に於ける略體假名の成立を叙し、草假名に關しては尾上博士の「歌と草假名」、「平安朝時代の草假名の研究」にゆづり、乎已止點と假名點との先後については吉澤博士の説の如く、假名點に次いで乎已止點の起つたものとし、國語音の變化については奈良朝文獻に權を加伊、申を麻字勢、神風を加牟加是と呼ぶが如き所謂音便らしいものゝあることを注記し、假名と文體にふれてある。

尾上八郎氏の平安朝時代の草假名の研究

因に云ふ、尾上氏の草假名の研究は大正十四年の著にかゝり、古筆切等の資料の研究を遂げ、當時の假名の系統を八類に分ち、書道史上より説き、古典主義・新古典主義・浪漫主義・武強主義等の各傾向や國文學との關係を論じたこの方面に於ける劃期的の研究であると謂はれてゐる。

森本治吉氏の萬葉集の研究

森本氏の萬葉の用字法研究は初に仙覺・由阿・契沖・春登・鹿持雅澄・高橋殘夢より武田祐吉・吉澤義則・橋本進吉等の現代の人々の説を擧げ、そのいづれにも満足が出来ないとし、自家の體系を立て大

綱を完讀と不完讀との二部に分ち、第一部を讀用と義用とに區分し、更にそれを音と訓に、その各々を純・不純に細分し、一字一音、一字數音、一字一訓、一字數訓等に分ち、第二部を讀音不足・文字不足に分ち、前者を省讀・不讀、後者を略書・讀添に區分し、それらを更に細分して諸例を示してある。

東條氏の方言研究の概観にはまづ方言學と言語地理學と題し、東西諸國に於ける方言研究の起原より説き、近世紀の初に佛蘭西のジイエロンが出て佛蘭西言語圖卷を公にしてから方言研究の新潮が起つたことを述べ、方言と言語地理學との關係を説き、言語形式より寧ろ多くの單語を材料とする言語地理學には從來の方言區劃を認めないで、單語の改新波や等語線のあることを説き、相互の差異を明かにし、次に國語方言研究の回顧の章には、萬葉の東歌の研究より人國記・毛端私珍抄以下現代の研究までを説き、参考書を註記し、次に現代方言學の展望に及び、最後に方言研究法に關し意見を細かに述べてある。

吉澤氏の論文は、白鳳期には國語學が隆盛であつたが、漢學の極度の奨励が國風暗黒時代を生じ、女子は學問に無縁になり、随つて平假名を發達せしめ、却つて國語を受撫彫琢する機縁となつたことを述べ、平假名の發生を詳かに説いてある。

土井忠生氏の國語學書目解説は外題にある如く、明治・大正時代に於ける國語書を總説、雜纂、國語學史、傳記、解題、歴史的研究、比較的研究、音韻、假名並びに假名遣、訓點並びに乎古止點、辭書の十一目に分ち、その重要なものゝ内容を検討し、その長短を品評してある。その批評は肯綮に中つて

東條操氏の  
方言研究の  
概観

吉澤義則氏  
の論文

土井忠生氏  
の國語學書  
目解説

平岡伴一氏  
の國字國語  
問題文獻目  
録

ゐて、これを按排すれば一つの國語學史をなし得ると思はれる。唯その採録するものは四十七種に過ぎないのは惜しい感じがする。

この年に岩波書店から出た平岡伴一氏の國字國語問題文獻目録は解説は短いが、その採覧には頗る力を盡されたもので、部を

- I 國字國語問題研究の土臺となる参考書
- II 國字國語問題の理論
- III 國字問題の實際
- VI 國字國語問題と他の諸問題

の四部に分ち、第一部を言語學・音聲學・國語學・文字學・假名の研究・教育科學・實驗心理學・眼科學・印刷術に分ち、その中の國語學を更に國語學總論・國語學史・國語史・國語學各論・論文集隨筆集・語原・文法總論・口語文法・文法各論・論文といふ風に細目を立て、書の體裁・裝釘・頁數・著者・出版所・發行年月等より或るものはその内容をも簡単に誌してあつて参考として重寶なものである。

これに次ぎて岩波書店は昭和十一年十月より同十二年九月にかけて岩波講座國語教育を發行し、第一卷を日本學の體系と國民教育及び國語教育思潮とし、第二卷を國語教育の學的機構とし、第三卷を國語教育の方法的機構及びその實際的機構とし、第四卷を國語教材の形態的研究とし、第五卷を國語教育の諸

岩波講座國  
語教育  
日本學の體  
系と國民教  
育及び國語  
教育思潮

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

問題とし、第六卷以下十二卷まで小學國語讀本綜合研究として十二回に亙つてこれを刊行した。これは  
小學校の國語教育の改善を旨としたもので、その内容は次のやうである。

國語教育の  
學的機構

日本學の體系と國民教育に關しては日本學の樹立(藤村作)、國學と教育(山田孝雄)、神道と教育(河  
野省三)、日本儒教と教育(西晋一郎)、日本佛敎と教育(花山信勝)、科學的精神と教育(石原純)等の諸種  
の題目を含み、國語教育の學的機構としては

- 日本文法學 福井久藏 (第一回)
- 言語心理學 波多野完治 (第二回)
- 社會學より見たる言語 田邊壽利 (同)
- 國語解釋學 勝部謙造 (第四回)
- 言語美學 小林英夫 (第七回)
- 國語教授の根本問題 長田新 (同)
- 日本文獻學 久松潜一 (第八回)
- 文藝哲學 垣内松三 (同)
- 言語哲學 小林淳男 (同)
- 方言學 東條操 (第九回)

國語教材の  
形態的研究

國語 史 安藤正次 (第十回)  
 昔の國語教育 柳田國男 (同)  
 日本文學史 島津久基 (第十一回)  
 國語表現學 城戸幡太郎 (同)  
 日本文法史 小林好日 (同)  
 國文學の文藝的研究 高木市之助 (第十二回)  
 國語學と國語教育 橋本進吉 (同)

の諸項を含んでゐる。國語教材の形態的研究としては神話(倉野憲司)、童話(金田鬼一)、歌謠(藤田徳太郎)、日記・紀行・隨筆(玉井幸助)、物語(池田龜鑑)、軍記(高木市之助)、史話(山岸徳平)、謡曲狂言(能勢朝次)、淨瑠璃(高野辰之)、歌舞伎(守隨憲治)、傳説(島津久基)、和歌(尾上八郎)、俳諧(岩田九郎)、現代詩(湯地孝)等を收め、國語教育の方法的機構としては読み方・話し方・書き方の教授體系にも及び、國語教育の諸問題としては、

國語教育の  
方法的機構

- 國民生活と國語教育 藤村作 (第一回)
- 現代社會と國語教育 保科孝一 (第五回)
- 古典及び古典教育 岡崎義惠 (第十二回)

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

國語教育と民間傳承	金田一京助 (第九回)
<small>中世以降に於ける</small> 國語教育の發達	石川謙 (第五回)
國語運動と國語教育	新村出 (第十二回)
國字國語問題	安藤正次 (第六回)
漢字の話附新讀本の字體	大岡保三 (第十回)
ラヂオによる國語教育	崎山正毅 (第八回)
海外に於ける國語教育	佐野保太郎 (第四回)
諸家國語教育論敍説	石山脩平 (第七回)
國語學力測定法	武政太郎 (第四回)
國語教育問題史	海後宗臣 (同)

等の論文を収めてある。

### 四十七 フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

言語學が國語研究の上に影響を及ぼしたことは前にも述べた。フランツ・ボップやヤコブ・グリムが紹介され、比較文法が漸く起つた。またホイットニーやイエスペルゼンが紹介されて言語の自然の發達を論ずるものが多くなつた。

昭和の初に至り若き語學の天才小林英夫氏が出で、フランコ・スイス學派のソシュールの言語學原論を昭和三年に譯出し、ラングとランガージュの區別を説き、從來の史的言語學に對し、言語を社會學的の立場より觀察し、共時的言語學を高唱し、これと共に通時的言語學をも説き、また、地理言語學や逆説言語學をも紹介してから斯界に別箇の新しい雰圍氣を生ずるに至つた。

氏は雜誌民族に「方言學その理論と實際」を載せ、またジリエロンに倣つて言語地理學を説き、ロシア語とフランス語に於ける態の表現法を研究して我が現代語に類似の現象の有無を検した。

その翌年にはソシュールの高弟でジュネーブ大學の教授をしてゐるバイエ (Charles Bally) の生活

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

小林英夫  
ソシュールの言語學原論を譯出す  
共時的言語學と通時的言語學  
言語地理學  
バイエの生活表現の言語學

文體論を組  
立つ  
セシエの理  
論言語學

表現の言語學を譯出した。バイエはフランス語の表現手段を研究して文體論を組立て、英國流の如く修辭學を語學から分立させるのを斥けて、表現上純客觀的な科學に組立てようとした人、同門のセシエ (Albert Sechhayé) はこの文體論を丹念に考へ、バイエの説を補ひ、理論的言語學の綱目と文法や、文の論理的構造等の著を出した人、小林氏はこれらの人々の新しい著作に親しみ、その文體論や理論言語學を譯出した。

フレエの誤  
用の文法

一般文法成  
立の可能性  
について

昭和六年にはフォスレル (Karl Vossler) の言語學に於ける實證論と觀念論を譯出した。同八年にはフレエ (Henri Frei) の誤用の文法を出した。小林氏は世人の多くが文法とは何であるか、文法の單位は何であるか、文法學は言語學に如何なる關係を有するかの問題を閑却してゐるのを慨し、フランス語學者の説を撮つて、昭和七年京城帝大法文學會の編にかゝる言語文字論纂に「一般文法成立の可能性について」の序説を載せ、パウル、シュタインタール、ガベレンツの古いところからフォッセル、シュハール、ユンケル、ドラクロア等の説を引いたり、山田博士・安藤正次・永田吉太郎氏等の説を評し、最後にコペンハーゲン大學の比較文法教授のイエルクムスレーヴ (Louis Hjelmslev) の學説を紹介して岩波書店よりはその批判的解説一般文法の原理を譯出し、明治書院の國語科學講座には文法の原理を執筆した。また雜誌方言にはトルベツコイ (N. S. Troubetzkoy) の形態音韻論やヴンドリヒス (Joseph Vendryes) の音韻法則の省察など新しいところを紹介したり、小倉博士の仙臺方言音韻論考により仙

言語美學  
シュピッツェ  
ルの語詞藝  
術と言語學

臺方言音韻論試作をものし、博士の通時的研究の資料を用ゐて共時的音韻論を建立しようと企てた。

夜明け前を  
評す

昭和九年には岩波講座世界文學第十四回配本には言語美學を執筆した。これはフォスレルを中心に主として獨伊の學説を紹介したもの、尋いでまたシュピッツェル (Leo Spitzer) の語詞藝術と言語學を譯出した。氏の言語美學といふは主として文體論を指すもので、前に云つたやうにフランコ・スイス學派の流れを酌む人々は表現手段の科學的研究を指してゐる。修辭法としての如く技術として扱はなければある。語よりもむしろ語が部分をなすところの印象的語群や觀念の噴起する短い文肢を重んじなければならぬといひ、語群や成句の上に力を用ゐてゐる。昭和十二年岩波講座國語教育に載せた言語美學には波多野完治氏が文章心理學に谷崎潤一郎と志賀直哉の文體を取扱つたやうに、島崎藤村の「夜明け前」を検討し、「から」で止めるもの、副文にて止めるもの、配分法・反覆法・點描法・名詞止め・史的現在等十三ヶ條の特質を挙げ、「親しみの文學」と結んでゐる。その後岩波の雜誌文學にも現代作家の文體を解剖してゐる。

言語學方法  
論考

氏は昭和十年に言語學方法論考を三省堂より出した。この書は既刊・新刊の單行文五冊と時々の論文中より創作十六篇・翻譯十一篇を選んだものと自序にいつてある。篇を八つに分ち、第一篇には言語の本質と言語學の分科を、第二篇には象徴音の研究を、第三篇には文法學の原理的考察、第四篇には意味論、第五篇には音韻論、第六篇には比較言語學と方言學、第七篇には言語美學、第八篇には隨筆風に分

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

つてある。

ディルタイの解釋學

國語解釋學並びに表現學といふことが近來に至つて盛んに唱へられるやうになつた。國語國文の解釋特に和歌の解釋の如きは遠く平安朝の頃より起つてゐるが、解釋の方法論を喋々と多くの人が説くに至つたのは昭和に入つてからのことで、獨逸のディルタイの解釋學を譯出されたことも與つて力あることと思ふ。

解釋學の成立

昭和五年に土田杏村の編纂した國文學研究に栗林茂氏はデ氏の解釋學の成立を譯出し、池島重信氏は昭和七年九月岩波書店の哲學叢書的一篇としてその全譯を出した。この方面に夙くより力を盡したのは東京高等師範學校の垣内松三教授で、國語教育科學講座に國語解釋學概説や國語表現學概説を執筆し、實踐解釋學考や國語の力などを單行してゐられ、センテンス・メソッドなども説かれてゐる。

垣内松三實踐解釋學考・國語の力

時枝誠記

京城帝大の時枝誠記氏はこれらとは別に、古典研究の本來の姿から離れて單に語學的にばかりながめてゆく世上一般の國語研究を憚らないとし、昭和六年九月刊行の京城大學法文學會の編纂にかゝる日本文化叢考に古典註釋に現れた語學的方法と題する長論文を載せ、特に仙覺律師の萬葉集抄につきて中古に於ける語學的註釋法の種々相を明かにされた。總論、萬葉集仙覺抄の研究、文字より言語への還元、語の意味の理解の數項に分ち、百三十一頁に上つてゐて、古典註釋に對する総合的な批判的研究の一階段を作らうと試みられた。

古典註釋に現れた語學的方法

古典註釋史上に於ける仙覺抄の價値

古典註釋史上に於ける仙覺抄の價値を論じ、その註釋の方向につき、まづ文意の直觀に統率せられた心の存在を強調し、本文批評も訓點の施行も意味の詮索も、悉く一の直觀的理解より分裂してゆくといひ、註釋の結果に對する妥當性の批判はその言語意識とそれから導かれた方法を明かにすべく、その意識を

仙覺の言語意識

(イ) 言語の新古に對する意識

(ロ) 先驗的、正規的言語の存在に對する意識

(ハ) 音義意識

(ニ) 語の職能に對する意識

(ホ) 語の構成に對する意識

(ヘ) 語の本義に對する意識

(ト) 言惣意別の意識

(チ) 語と記載法との關係に對する意識

の八項に分ち、(ロ)は更に本韻・末韻・男聲・女聲・相通・略言・約言の目を立て、仙覺の抱いてゐた言語意識を測定し、この意識が如何なる方法を與へてゐたかを檢する爲に、その出發點たる文字より言語への還元に関し彼がとつてゐた方法を

(イ) 語句の連接の關係より文字を言語に還元する方法

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

文字より言語への還元の方法

語義の發見に至る過程

(ロ) 文字と語句の對譯の例を基として文字を言語に還元する方法  
 (ハ) 用字例の研究より文字を言語に還元する方法  
 (ニ) 字音研究より文字を言語に還元する方法  
 の四つに分ち、次に語の意味の理解が成立するには語義の發見に至る過程とかくてその語義の妥當である説明が豫想されるといつて、その過程を

(イ) 歸納的方法による意味の理解

(ロ) 比例法による意味の理解

(ハ) 文字と語句の對譯例を基としての意味の理解

(ニ) その他の言語意識より導かれる意味の理解

に大別して一々例を引いて説き、結論として西洋の文獻學のやうに獨立した語學研究のそれではなくて、飽くまでも註釋を本體とし、古典の理解の爲に導き出された國語に對する考察及びその結果に就いて立論したことを述べてある。その研究が日本的のものを樹立するにあつたと云ふべきである。

明治書院の國語科學講座には、數人の人が解釋學につきて執筆してゐる。即ち石山脩平氏の解釋學序説、山岸德平・川瀬一馬氏の古代解釋學、能勢朝次・小野直氏の中世解釋學、佐藤鶴吉・飛田隆氏の近世解釋學はそれである。

石山脩平氏の解釋學序説

石山氏のは篇を四つに分ち、第一篇には理會の意義、解釋及び解釋學の意義を、第二篇には解釋の對象として文の表現過程、文の構造及び性格を、第三篇には解釋の方法としてその方法上の諸原理及び解釋の實踐過程を、第四篇には解釋の可能根據及び妥當性を言語哲學的に説き、終に内外の參考文獻を載せてある。

山岸の川瀬  
 兩氏の古  
 能勢の野  
 兩氏の中  
 佐藤の飛田  
 兩氏の近世  
 解釋學

古代解釋學に於ては前篇は山岸氏が古代文學の環境と諸相を説き、後篇には川瀬氏が研究參考要目を擧げ、中世解釋學に於ては能勢氏が中世文學相の斷面を説き、小野氏は和歌及び歌論以下有職等に至る十二章に分ちて、中世文學の研究要目を載せ、近世解釋學に於ては佐藤氏は近世註釋研究と解釋學、近世文學史と近世解釋學、解釋の實習的手法と參考文獻の三部に分ちてその專攻せる假名草子・浮世草子・淨瑠璃文學につきて論じ、字書類・往來物・重寶記・圖會の類にまで説き及んである。飛田氏のは對象と方法、技術の根據、技術の規定の三部に分ち、近世文學圖表を主としてある。

教育的解釋學と意義學

石山脩平氏は教育的解釋學を賢文館より出し、輿水實氏は「解釋學と意義學」を不老閣より出した。石山氏のは篇を五つに分ち、第一篇には理會・解釋及び解釋學の意義を、第二篇には解釋の對象を、第三篇には解釋の方法を、第四篇には解釋の可能根據及び妥當性を、第五篇には解釋學略史をいづれも教育的視角から系統を立て、論じ、輿水氏のは序説、解釋と意義、前篇解釋學研究、後篇意義學の研究、附録學說の展望の四部に分ち、啓蒙的に説いてある。

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

城戸幡太郎  
表現學序説  
國語表現學

表現學に關しては城戸幡太郎氏は昭和九年國語科學講座に表現學序説を執筆し、第一章には表現學の問題を、第二章には言語表現學の方法、第三章には言語表現の構造を説いた。同十年十月國語表現學を賢文館より出した。章を表現學の問題、表現の様相、國語の形態、國語の形成、國語の教育の五つに分ち、序に氏は心理學徒として、フッセルの現象學からデイルタイの心理學及び解釋學、マルチイの言語哲學、ラツアルス及びシュタインタールの民族心理學、フォスレルの言語哲學等を究めてから、終に日本人の思想は日本語でなければ充分に表現されるものでないとの感じを深めて來た述懐談をのべ、ラツ博士奨學金によつて研究した「國語の心理學的研究」並びに有栖川宮獎學金によつて研究をつづけた「國語の表現法と日本人の思想形態」の一部分として發表したものと述べてある。

國語の表現  
法と日本人  
の思想形態  
フイソク  
の分類に同じ  
ない

表現學の問題のうち、フイソクが言語と民族性につき、多血質・膽汁質・粘液質・憂鬱質の四分法に基いて表象型・感情型に各國語を分類したけれども、我が國語はそのいづれに屬すべきかは疑問である。ウラル・アルタイ語派であるとすれば、我が同胞は粘液質に屬すべきであるが、かゝる結論は俄かに是認し難い。またマルチイは言語の意味を語意論と文意論とに區別し、語序や語法は文意論の問題として論じたが、國語に於てはこの二つの領域を判然と區別し難いものがあるといひ、デイルタイやマウトナーの如きあらゆる現象の主體として自我を認むる觀念論や理想主義は日本語には認められない。敘述に於ける自己度外視即ち觀察に於ける主觀の排除といふ認識の方法が日本人の世界觀であるといひ、「月

日本人の世  
界觀

無主命題

を見る」を歐洲語に譯するとその主語として人稱代名詞を必要とする、歐洲語に於ける受身の形式は本來の日本語には無意味である。日本語には完全に無主命題と稱すべきものが存する。歐洲語には動詞から名詞になるものが多いが、國語では逆である。日本人の世界觀は名詞的世界觀のうちに動詞的世界を表現する生活實現論といふべきものであらうといひ、國家民族性を示す詞につきて解釋を下してある。

表現の様相

次に表現の様相につきては一般論であるから、これを略するが、言語の「あらため」の一節には音韻の民族性と形態化、言語の歴史性と生活化、表現の法則性と合理化につきて述べてある。

國語の形態

次に國語の形態につきては、まづ體・用・辭の三つを言語心理學の立場から表現の詞、關係の詞、實現の詞と區別し、體言と存在の表象の項には國語による色彩感覺の表現を明かにする爲に男女三百二十六名につきて實驗し、その統計を示し、物と色との關係、色と人との關係、色と所との關係、色と時との關係、色と詞との關係を論じてゐる。

色彩感覺の  
表現

助辭と關係概念の節には助詞の分類は語意學より分つべく、その職能は心の趣向性或は意識の對象化をあらはすもので、その對象化の次元は助詞表現の語序によつて規定されてゐるやうだといひ、山田博士の分類を評して、

助辭の對象  
化の次元

- 第一次の對象化 格助詞、並立助詞、準副體助詞
- 第二次の對象化 係助詞

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

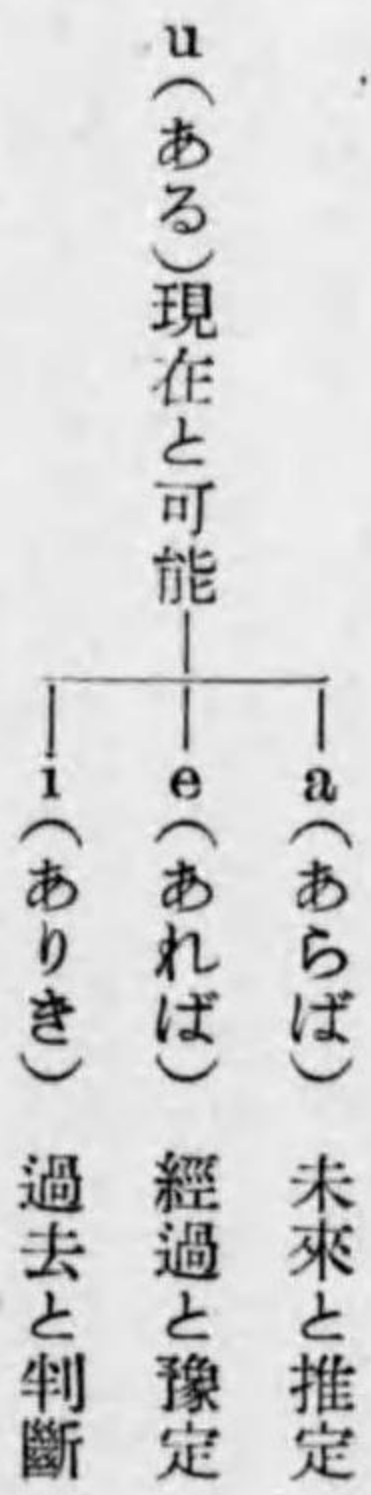


- 第三次の對象化 接續助詞
- 第四次の對象化 終助詞
- 第五次の對象化 間投助詞

に分ち、第一・第二次は表象作用、第三・第四次は判断作用、第五次は意欲作用と説いてある。

用言と機能  
概念と判断  
時相と判断  
の様相

用言と機能概念につき、動詞の活用は存在の時相をあらはすと同時に判断の様相をあらはすといひ、「有る」に於て



の如き表現を認め、「有り」は名詞であると同時に動詞の不定法と云つてある如き、容易に受入れ難きものがある。自他を立てる要のないことを述べ、寧ろ存在の判断と意欲の所行とに分つべしとし、「花が咲く」の如き自動詞と稱するよりも存在の状態を判断した動詞といふべく、「暴風を恐る」といへば、所行をあらはす述語的表現だと説き、形容詞は意義學から見れば、存在を實體と屬性とに判断する詞で存在判断の言葉といつた方が宜しいといひ、ブレントナーの分類に従つて、表象を示すものと判断を示すものと意欲を示すものとその一つ／＼につき多くの兒女につきて實驗の結果を挙げ、統計を示してある。

自他を立てる要はない

副詞に添へる助詞の統計

次に副詞につきては山田博士が體・用・辭の外に置きたるに異見を挟み、國語辭典に載つてゐる漢語を除外した千百二十三語につきそれに添へる助詞を統計し、「に」が三七一、「と」が二二二、「て」が五三といふ如く數計し、助詞を伴はないものを挙げ、判断や意欲に關するものは音韻の性質・疊詞・促音その他助詞によつてあらはされることを詳かにし、形成の過程と結果並びに形成の位相と時相を説いてある。

了解の曖昧性を試みる實驗

國語の形成の章には最初に言語の意味の融通性・多義性によつて國語の變容することを説き、了解の曖昧性を試す爲に形容詞六百九十六種を採り、大學以下の男女學生三百餘人に最もよく形容される名詞を書かして、了解度による頻數分配圖を作り、その統計を示し、次に國語の統整の章には、表記法の統

幼兒の言語發達

一、語法の調整、用語の整理を説き、實驗の計數を示してその主張に裏附をなし、國語の發育につきては生後二年間幼兒の言語發達を驗し、その段階を(一)言葉の形成期、(二)言葉の表現期、(三)言葉の選定期の三大別とし、(一)を發語期・獨語期・分化期・轉化期の四つに、(二)を遊戯期・變容期・表象期・融通期の四つに、(三)を模倣期・質問期・概念期の三つに分ち、國語の變質・形態等につきても論じ、國語の教育の章には國語教育の問題史として言祝教育と辨證教育、福音教育と訓話教育、實語教育と術語教育を發達に従ひて説き、附録には引用書目及び註釋を擧げてゐる。

國語教育問題史

中には首肯しかねる節もないではないが、心理學の立場から表現學を系統的に構成されたことは特記すべきである。

文法の形態は意義と相關をもつ。随つて形態論を考へると共に意義論が成立せねばならぬ。意義をいふには表現といふことが相離るべからざるものである。表現には單語や文節を連結した文章を研究せねばならぬ。近來國語表現學の一部として國語文章論の再検討が起つて來た。波多野完治氏が日本語の表現價值として文章心理學を出したのもその一例である。氏は曩に國語科學講座に國語文章論を執筆し、

言語のエコノミズムを基調として建てたスペンサーの修辭論や聯想中心のベインの修辭學を斥け、新たに思想の上から説かうとし、昭和十四年に増補して文章心理學を出したのである。その緒論にレトリックの再生を論じ、第一篇に文章心理學の原理を、第二篇に文章性格學を説き、文章樣式學を論じ、現代作家の中志賀直哉や谷崎潤一郎の文章を捉へてその表現手段を論じ、文の長さ・句讀點・品詞・比喩・

## 文章心理學

構文等につきて比較を示したりした。近時文體論が國語學上に取扱はれようとする傾向が著しくなつて來た。

京城帝大の小林淳男氏の如き昭和の初にソシュールの言語學を輸入し、國語學界に清新の雰圍氣を醸成してゐたが、最近には現代作家の文體を考究して文學等に發表してゐる。今後外國學者の體系にすぎらないで我が國独自のものが漸次産み出されるであらう。

## 四十八 記念論文集に於ける國語學

碩學の高壽を祝する爲に、若しくは追悼の爲に知友門下の執筆寄稿した論文集の發行は輒近に至り漸く盛んとなつて來た。その始めは關係の深き雜誌に特輯號として出す類が多かつたが、近時は頗る浩瀚な集を見るに至つた。我が國語國文の大家は少しとしない。それらのすべてを檢するは容易な事ではないが、國語學史上に大切な資料となるものも多いやうに思はれるので、少しくそれらにも觸れて置く。

藤井乙男  
萬葉集の研究

京大の藤井乙男博士の還曆に方り昭和三年國語國文の研究第二十二號はそれを記念すべく、「萬葉集の研究」を特輯號として出した。收めてあるもの八篇に過ぎない。中にその門下の佐伯梅友氏の萬葉集の助詞二種には集中に見えるの「が」とや「かの」二助詞の用例を多く集めて歸納的結果を見ようとしたもの。澤潟久孝氏の「戲書について」は春登上人の萬葉用字格の分類法は極めて常識的であつて、用字上の正確な分類といふことが出来ないとし、集中の諸例を集めて、文字の上のたはむれ、擬聲語によるもの、數のたはむれ、所謂義訓の複雑なるもの、四種となし、所見の卷數及び作家を圖表に作つて、時代及び作家の考察に資せんと企てたもの、創見のひらめきを見る。

澤潟氏の戲  
書について

佐伯梅友氏の  
不知の訓  
考

佐伯氏のは萬葉集卷二柿本人麿の作にかゝる「日月毛不知戀渡鴨」と「隱沼乃去方乎不知舍人者迷惑」の二首に於ける「不知」の二字を「シラニ」と訓むか、「シラズ」と訓むべきかにつき、古人の説を挙げ、集中に於ける幾多の例を引きて、「知ラニ」と訓む方は次に來る事柄の理由を表すときに用ゐ、「知ラズ」と訓む方は單に状態を表すのに用ゐる差のあることを明かにしてある。

岡倉由三郎

英語學界並びに言語學界方面に多年活動され、晩年ラヂオでお馴染の深い岡倉由三郎氏の還暦記念論文集は昭和三年市河三喜博士の手によつて編輯出版された。中に音韻に關しては神保格氏の「音聲研究方法論の考察」、橋本進吉博士の「波行子音の變遷について」、金田一京助博士の「アイヌ語清濁考」があり、文字に關しては後藤朝太郎氏の「支那俗間に見る俗字の趨勢」があり、文法に關しては細江逸記氏の「我國語の動詞の相を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」等の論文が載つてゐる。中に細井氏の論文は拙著<sup>増</sup>日本文法史に一章を設けて紹介をなし、本書第三十八章にも略敘した。

橋本進吉氏の  
波行子音の  
變遷につ  
いて

橋本氏の論文は我が古韻史上に新しい研究を發表されたものであつて、波行子音が古くp音であつてそれからf音にうつり、更にh音になつたことは Hoffmann, Edkins, Satow, Chamberlain, 上田萬年博士、大島正健博士、岡倉由三郎氏、金澤庄三郎博士、伊波普猷氏、安藤正次氏など内外學者の等しく説くところであるが、その推移の時代に關しては未だ明確を缺いてゐる。pからf音への推移の年代は上田博士は奈良朝以前とし、安藤氏は奈良朝とし、fからh音にかはつたのは新村出博士は江戸時

金田一氏の  
アイヌ語の  
清濁考

代であるとされた。橋本氏は菅公の孫で石山寺の座主となつた淳祐の手書した悉曇字母の中に引いた圓仁記即ち慈覺大師の在唐記の中には明かにfと發音した證據があり、また天台宗に於ける古代の佛敎讀歌の一つである法華讚嘆の「法華經を我が得し事は云々」の「は」はfaと發音する習ひとなつてゐることをも説き、f音と發音し來たことは平安朝初期までに溯ることが出來ると立證した。新村博士のf音が江戸時代の初に方りh音にかはつたことの證明と共に慥かな足どりで研究を發表されたもの。

金田一氏のは、我が國音がアイヌに入りては清濁の區別のない點につき、バチラーの Aino-english-japanese dictionary にはBDJの部は、それに屬する語をそれ／＼ p t k chの部に出してゐるが、Summers の亞細亞協會々報に出した語彙や Dobrovorsky のアイヌ・ロシア辭典にはBDの部を設けて多くの語をあげてある事實を挙げ、實地に自家がアイヌの酋長につきて聞いたところによりて明快の判斷を下されたもので、我が音韻との比較をなすに方り参考となるもの。

後藤朝太郎  
氏の支那俗  
間に見る俗  
語の趨勢

後藤氏のは、四川の奥地で使用される略字などにつき面白き例を示されたもの、歸の字に歸と書いた、劃の多いとき「ヌ」の字を代用する、例へば、難の字を難、權の字を權を代用するが如きは我が國にも行はれてゐるが、無學の民衆が己が姓にも適正の字を書き得ないで、略字を用ゐる例を示されたもの、趣味的に述べられたものである。

松井簡治

大日本國語辭典の著者松井簡治博士の古稀記念論文集には國語に關するものには春日政治氏の「假名記念論文集に於ける國語學

の發生に關する考察、木枝増一氏の「文法の立體的な研究」、内野台嶺氏の「論語を中心として觀たる訓點の變遷」、日下部重太郎氏の「國語法に於ける syntax の發達について」、保科孝一氏の「友鏡底の影について」等の論文がある。

保科氏のは義門の語學資料としてその門下の青山如幻茂春が新井守村に送つた書狀四通を載せ、義門が友鏡底の影を著さうと志して詞の八衢に書入れて置いたものを小田清雄が抄録したに過ぎないが、その中に卓れた考などのあるのを摘記されてある。

春日氏のは我が國最古の文獻である推古期以下の金石文を檢討して、无、私、与等の文字や尔、祢、弥、万、仏等の簡易な字形も見えるが、これらは支那に倣つたもので、それより奈良朝文書に用ゐてある門の代りに「」部の代りに「マ」の如き省文、鷹の如き合字、行書化した書體等があらはれて來たが、これらは實用一編のものでない。その私的文書の如きは字體の簡易化を欲するやうになり、中にツ・ヘ・ムの如き文字が奈良朝文書に見え、寶龜二年以前と見られる唐招提寺文書にはム、甲、尹の如き略字が載つてゐる。これらの省文は宣命書の小記に用ゐられ、略體假名の發生する一大原因をなしてゐる。眞假名で國訓をうつす場合には手数を少くする爲、字體を行化、また草化する傾向を生じて來たが、漢文に從屬したものや官用のもものは保守的因襲的な傾向が強かつた。併し草化は平安朝に至り一層盛んになつたが、傳道風の秋萩帖や傳佐理書賀歌切などを見るに、文學に隨伴し、また書道趣味の上から、その

保科孝一氏の友鏡底の影について

春日政治氏の假名の發生の假名に關する考案

奈良朝文書の略體

草化は書道の趣味から始めは單純化を急がなかつた

片假名は實用上夙く簡易化した

金澤庄三郎博士の東洋語學の研究

武田祐吉氏の形容詞論

古代形容詞の根本意識

「シ」の語尾はもと添辭

母胎となるべき原字の單純複雑の上には、あまり意を注がれなかつた爲に夙く符號化するに至らなかつた。これに對し訓點に用ゐる爲に生じた片假名は漢文の行間に細書するとか、講義を聞きつゝ記入する等の爲に字畫の簡易化を要とし、夙く發達した次第を種々の文獻によりて説かれたのはその所説肯綮にあつてゐる。

金澤庄三郎博士の還曆記念東洋語學の研究は昭和七年の末に發刊された。吉澤義則博士の「所謂『ヲ』に通ずる助詞『ガ』に就いて」より加藤玄智博士の「宗教學上の言靈私考」に至る二十四家の論文を收めてある。中に形容詞の論につきて武田祐吉博士は、我が最古の國語資料たる記紀に見えてゐる萬葉假字で記されてある形容詞五十七語を採り、一々その變化及び語幹のみの用例を圖表とし、まづ語尾を有せざる形容詞が、連體法・連用法・體言法・副詞法・敘述法の諸法に用ゐられてある諸例を擧げ、古代形容詞の根本意識は物を稱美するにあつたと推定し、觀察力・思索力が進み、思想を完全に表現しようとするに及んで、話用語尾を有しない形に不満足を感じてこゝに話用語尾を生じたものと見做し、從つて形容詞は體言の形が本體で、その原形は連體形であると云ひ、これに話用語尾「シ」が生じて活動が圓滑になつていつた。この「シ」は「たましひ」の「し」、「とこしへ」の「し」の如く添辭であつて、それと指示する程の意であると斷じ、「シ」の語尾で示す終止法・體言法・連體法・副詞法を示し、また一方には他の動詞活用の模倣運動が主としてカ行を中心として起つたことを述べ、話用語尾「ケ」の終

「ケレ」の元は助動詞

止法・連體法・體言法・將然法・已然法・連用法を擧げ、「ケレ」と續く形は從來形容詞の活用語尾と考へられてゐたものであるが、その原始時代には「レ」を助動詞と見る方が適切であるとなし、東歌に存する久爾乃登保可波の「カ」は「クアラ」の約でこの轉と見るべきものに「サ」があり、動詞性のものに「ビ」・「ミ」・「ク」・「ル」があり、感動詞性のものに「ヤ」・「ラ」の存することを説いた。

折口信夫氏の形容詞論

「し」の原義

折口信夫氏の形容詞の論には主として語尾「し」の發生につきて論じ、この發生を追及してゆくことは、同時に日本文章組織の或る一面の成立を暗示することになると提言し、國語に於ける所謂形容詞の生命を扼するものは、その語尾なる「し」であるが、この「し」に紛ひ易いものがある。「とこしへ」の「し」の如き領格「つ」にかよひ、「けたし」の「し」は形容詞語尾の感覺に近く、「やすみし」の上の「し」は敬語の助動詞、下の「し」は熟語を構成する一つの形式的要素と見做し、枕詞の種々の例についてこれを證し、更に進んで過去の「し」の起原は一種の唯し詞のやうにも見え、又一時的には其の割り込みと見てもすむが、唯し詞と見るのはその後代的氣分より成るもの、其と見るのも或は却つて順序轉倒で、この「し」も形容詞語尾の「し」と同源であると説き、形容詞の語尾「し」の獨立或は固定の妥當的な感覺を導いた過程については、第一「し」を含んだ語根時代、第二領格としての用語例に入つた「し」の時代、第三領格の對象語の脱落した時代、第四語尾としての「し」の獨立時代といふ區劃を豫想し、枕詞の語尾と考へて來てゐる「じもの」につきても形容詞の「し」の本來もつた「し物」の義

形容詞の語尾「し」の進化した過程

「じもの」の新解釋

がもとでその古い「じもの」を以てあらはす固定した表現法があつて、咒詞・宣命・祝詞の表現法の古式として繰り返されてゐる間に新しい文學がその様式をとり込み、更におし擴げ、「じもの」が次第に展開して多く用ゐらるゝに至つた。「馬じもの」・「鴨じもの」等、皆降伏奉仕の形容に用ゐられたものである。「じもの」の語源につきて、「其物」<sup>まじもの</sup>「狀物」<sup>じもの</sup>などいふ印象分解説はあるが、それは宜しくない。ものは靈魂の義である。その威力を指す義があると示唆的に説き去つた。

今泉氏の助動詞「き」に關する説

今泉忠義氏の助動詞「き」の連體形の論文に於ても、我が最古の文獻にあらはれてゐる「し」は神武天皇紀の「みつくし久米の子らが垣もとに植ゑし蓋」の「し」の如く、それが連用形と體言との間に挟まつてあつても、必ずしも過去をあらはすとは限らなかつた。一面は助詞であり、一面は助動詞であつた。この「し」は動作の強めを表すといふよりは次第に過去の時を表すやうに職能が確立されていつた。それには平安に入つてから完了態の助動詞の活躍がめざましくなつて來たことも原因の一つをなしてゐる。最後に形容詞の終止形の「し」が「さかし女」などの如く連體法の語尾から轉用せられ、固定したであらうと考へる時、この「し」と過去の「し」と一脈相通するものがあらうと述べてある。氏は夙く昭和五年にかくの如き考を國學院雜誌にも發表してゐる。

竹田鐵仙氏の悉曇相通説

岩崎小彌太氏は「デアル」と「デアリマス」について、竹田鐵仙氏は我が邦に於ける悉曇學の沿革を明かにしようと志してゐる人、悉曇相通説と活用研究に及ぼせるその影響を論じた。

伊波普猷氏の  
語音翻譯

方言に關して東條操氏は明治以後の方言研究を、安田喜代門氏は九州方言及び琉球方言に於ける代名詞の研究を、沖繩方言に關しては、申叔舟の海東諸國記の附録に古琉球の見本として載せた語音翻譯全部の釋義を伊波普猷氏が丹念に筆を執られたもので、琉球語の史的研究もこの書によりて輒くたどることが出来る。

宮良當壯氏の  
虹考

語原に關しては安藤正次氏の宇禮牟會考、生田耕一氏の保止につき委しく考證した安寧天皇御陵名義私考、筑紫豐氏のそほ考、宮良當壯氏の虹の語學的的研究等があり、宮良氏は琉球諸島言語の實地調査研究をなしてゐる人、曾て國學院雜誌に載せた虹考を改題訂正したもので、「ニジ」は古く「ヌジ」といひ、蛇類の總名である「ナギ」(ナジ)から來つてゐることを史的並びに音韻的に考察したものである。

金田一氏の  
北奥地名考

比較研究に關しては金田一博士の北奥地名考があり、小倉進平博士の朝鮮の眞言集につきての考究は貴重なるものであるが、我が國語學には直接の關係はない。金田一氏のは項を

- 一、序論 在來の學說と新しい方法論の提唱
- 二、奥州蝦夷語はアイヌの古い一方言である
- 三、津輕海峽南北の地名の似寄
- 四、北海道地名轉訛の一般
- 五、推定される奥州のアイヌ地名

チェンバレン氏のアイヌ地名原義  
説を斥く

六、結論 再建される本州アイヌ語彙とその分布に分ち、序論に我が東洋比較言語學の創始者チェンバレン氏が全土に亙る日本地名をアイヌ語を以て解釋した試みは随分大膽奇抜で學界を聳動し、爾來これに倣はうとする學者が少くないが、眞を誤つてゐるのを博士は慨いてこれを是正せんと筆を運ばれてゐる。例へば我が名山富士をアイヌ語とし、刀根も能登も同じくそれを説くものが多い。アイヌ語の大家バチラー博士の如きも行き過ぎた解説を下してゐるので、金田一氏はその謬妄を正されてゐる。例へば富士をアイヌ語の Huchi から來つたとするが如き、國語の音韻史を無視したもので、もしアイヌ語で Huchi と發音するものは我が邦ではクヂまたクジと發音すべきであるといひ、富士の語源をアイヌの火となすのも誤で、アイヌ語の火は ape 又 abo であり、Huchi は翁に對する老女また媼、または祖母の義である、バチラー氏が Huchi を宛てたのは無理誣ひであると學徒の蒙昧を挫いてゐる。その他支那字學につきては、小柳司氣太博士の「小學に就いて」、池田四郎次郎氏の「説文五百四十部の次序に就いて」等の論文がある。今一々説くことを控へた。

バチラーの  
説を斥く

京都帝國大學  
文學會創立  
二十五周年  
記念論文集

京都帝國大學國文學會にては昭和九年創立二十五周年に相當し、二百數十名の卒業生を出したので、藤井乙男・吉澤義則・新村出三博士の指導の下に二十五周年記念論文集を出版した。春日政治氏以下四十三氏の國文國語に關する論文を載せてあるが、中に國語學に關するものは春日氏の「聖語藏御本中觀論の古點について」、横山英氏の「萬葉集の用字に關する一考察」、宮田和一郎氏の「源氏物語から見た

平安朝時代の形容詞、土井忠生氏の「天草本金句集考」、新谷恒藏氏の「志布志方言の研究と鹿兒島方言文獻目録」、木枝増一氏の「文法的決定への疑問」、その他福田良輔氏の萬葉集の「之」字の訓について等の論考である。

春日氏のはその舊稿「金光明最勝王經註釋の古點について」(日本文學論叢)「成實論天長點續貂」(昭和八年一月國語國文)、「片假名の研究」(國語科學講座)との比較補正ともいふべきものであつて、點と假名字體を究めて飯室點と西墓點との中間に位するものとし、大矢・吉澤兩博士の研究を追はれたものである。

横山英氏のは吉澤博士の「萬葉集に於ける文字の文學的用法に就て」(國語國文昭和八年一月號)や森本健吉氏の「萬葉集の字訓假名について」(日本文學論叢)等に次いでこれが縦横の研究を遂げんとし、まづ「作者によつて用字に區別ありと認めらるゝもの」(甲)、「卷別にうかゞはれる用字の差異」、「作者個人の用字と卷別の用字との交錯」の三つに大別し、ある假名を擧げてその統計を示し、次の如き結びをつけてある。但し卷一より卷十三までに止めたことを斷つてある。

(一)作者によつて用字に相違を見出し得るものが相當にある。殊に人麿歌集・福麿歌集の類に於て著しく、卷三・六にもこれを見出すことが出来る。

(二)卷別に用字の相違を見出し得る。卷四(卷八も)等は作者個人々々の相違よりも卷としての用字に支配されてゐるらしい。

聖徳藏御本  
中觀論の古  
點について

萬葉集の用  
字に關する  
一考察

作者によつ  
て異なるもの

卷別による  
もの

編者の考に  
よるもの

宮田和一郎  
氏の源氏物語  
から見た  
平安朝時代の  
形容詞

(三)右の二つの事實と兩者の交錯した例から考へて、萬葉集においては全體原本の用字を以て採録したのであるが、或る程度まで編者の自由に用字のかきかへをしてゐるらしい。

宮田和一郎氏は平安朝に於ける物語的作品に於ける形容詞を通觀して、最初はク活に對シク活が次第に殖えて來た比率を示し、

伊勢物語……………	〇・四八
大和物語……………	〇・五五
宇津保物語……………	〇・八〇
落窪物語……………	〇・八五
源氏物語……………	〇・九七

の如き計數を擧げ、源氏物語に存する五百五十の形容詞を構造によりて分ち、他にありて源氏物語にならぬ形容詞、當代の作品に最も多く用ゐられた形容詞の圖表を作つてその趨勢を示してゐる。

遠藤嘉基氏の助詞の考察には混じり易き助詞「だに」・「さへ」・「すら」の三つの中源氏物語には「すら」の助詞を用ゐてないことを説いてある。門前眞一氏は夕顔卷「おのがいとめでたしと見奉るをば」の「をば」の研究を試み、大井廣氏の「あはれ」と「はかなさ」の論文には萬葉集から八代集に通じて「かなし」・「あはれ」・「はかなし」・「さびし」・「心細し」五語につきて統計を示してある如く實證的傾向のもの

土井忠生氏の  
天草金句  
集考  
新谷氏の志  
布志方言

藤岡勝二  
言語學論文  
集

有坂秀世氏  
の宣命の改  
訓

安藤正次氏  
の疊音・疊  
語の一研究

のが少くない。土井氏の天草金句集考はロドリゲスの研究など南蠻物に深い研究を進めてゐる、手に成りたるもの、新谷氏の志布志方言には南九州方言を細かに分ち、その特徴を説き、研究文獻書目を多く擧げてある。その他語原の研究をもした二三の人々の論文もあるが、今は省略に従つて置いた。

藤岡勝二博士の還暦に方り、翌昭和十年に出された功績記念の言語學論文集は二十四篇の論文集を含み、中に國語に關しては橋本進吉氏の「國語の形容動詞について」、小林好日氏の「動作態と國語の文法的範疇」、湯澤幸吉郎氏の「徳川前期の珍しい言ひ方」、東條操氏の「中國地方の方言に關する一二の考察」、安藤正次氏の「疊音と疊語の一研究」、横山辰次氏の「熟語の研究」、有坂秀世氏の「不可能を意味する『知らず』について」等がある。

有坂秀世氏は宣命に「進母不知退母不知」とあるを本居宣長の「ス、ムモ知ラニ、シゾクモ知ラニ」と訓したのを「ス、ミモ」、「シゾクモ」と改むべきことを云つてある。横山氏は熟語特に身體的部分的名称を應用したものにつき廣く例を拾つて説いてある。

安藤正次氏は疊音・疊語に於ける語の反復には完全に語全體を繰返すものと、語の一部分だけを重加するに過ぎないものがある。インドネシア語族では疊音・疊語が縮小義をあらはすものがあるが、我に於ては事物の複數や動作・状態の繼續・反復を示すものがあるといひ、世界各國語に互りて疊音・疊語の性質を説いてある。

東條操氏の  
中國地方の  
方言  
湯澤幸吉郎  
氏の江戸前  
期の珍しい  
言ひ方

橋本進吉氏  
の形容動詞  
の形態と  
小林好日氏  
の動作態と  
國語の文法  
的範疇

東條操氏のは中國方言の特徴「マイ」が「マー」となり、打消の「ザッター」といふ形のあること、その行はれてゐる地域について調査されたもの、湯澤幸吉郎氏は、江戸時代の前期に於ける特殊の口語中、未然を示す「う」に助詞「ば」の結合せる「うば」、肯定に用ゐる「ません」、下一段活用用ゐられる「進ぜる」、動詞の接頭辭として、御の字を用ゐた「御知る人」・「御許さるゝ」及び「ある」と「ぬる」と「をる」の今日と異なる用例を拾つて説を立てゝある。

橋本進吉氏のは形容動詞の性質や由來を詳説し、山田博士、吉澤博士の説に觸れ、「かり」・「なり」・「たりの三種の中「かり」を除くべきことを論じてある。小林氏のは歐洲にても長い間動作態は時化の概念の中に過現未の範疇に混淆されてゐたが、十八世紀の末葉からこの研究が始まり、特に Currius の希臘文法が出て以來明確になつたと前置きし、従來時の助動詞と考へてゐた「つ」・「ぬ」・「り」・「たり」の如きは「き」及び「けり」とは別で、時化をあらはすといふよりは動作態を示すもので、その古に溯つてみると、「ながらふ」・「かくさふ」の如きは繼續態を示したもので、「ありかよひ」・「ありたし」の如きも存在もしくは繼續態を示すものといひ、一步・玉霞・活語雑話・末分櫛・玉霞窓の小篠などの説を引き、長野義言の動作の進行・繼續・結果の存在・動作の完了の三項を立てたのを警眼とし、氏は動作態を三つに分ち、繼續態・存在態・已然態の三つを立て、これらの動作態は主觀によつて認識せられる關係的概念を示す時階とは自ら異なるものと區別を嚴にししようと企てた。



峯村氏の韻鏡の内外轉について

この他峯村三郎氏は「韻鏡の内外轉に就いて」、古來の説より近代碩學の大矢透・大島正健兩氏及び羅常培の説を引きて立説し、服部四郎氏は「朝鮮動詞の使役形と受身・可能形」を説き、小林英夫氏は「翻譯の問題」をとり扱ひ、内顯法と外顯法を説き、具體的に國語の性質十二項を擧げてある。一般論としては神保格氏の「所謂音韻學と音聲學」、佐久間鼎氏の「音聲的描寫による語構成」があり、言語學や外國語に於ける研究論文を含んでゐる。

東宮切韻佚文の研究

我が辭書史に深い關心をもつてゐられる岡田希雄氏は昭和十年發行の立命館三十五周年記念論文集に和漢年號字抄と東宮切韻佚文の研究論文を發表した。これは同大學發行の雜誌に載せた東宮切韻攷の姉妹篇といふ。前田侯爵家藏の和漢年號字抄の委しい紹介をなして、その中に文徳天皇の東宮におはしました頃菅原是善が撰んだ東宮切韻の性質を明かにしようとしたもので、和漢年號字抄は菅原爲長が嵯峨天皇の寛元から後深草天皇の寶治年間の作と推定し、その書中に東宮切韻を引くこと實に百七十四條の多きに上つてゐることを述べ、同書が漢文で書かれ、支那の典籍を引き、音義を説いたものであることを明かにした。爲長は菅家の嫡流であつて、高齡をたもち、文鳳抄や、管蠡抄の著者である點から推斷されたものである。

藤村作

藤村作博士の功績記念會では昭和十一年十一月に國文學と日本精神と近世文學の研究の二冊を出版してその前年還曆で東大を去られた同博士に捧げた。その中に語學に關するものは前巻には岡本千方太郎

和漢年號字抄

氏の「國語觀」、吉澤義則氏の「總主語説覺書」、小林好日氏の「假字遣「お」・「を」の混同」、湯澤幸吉郎氏の「腹ぬ(い)るとその關繫語」、岩淵悅太郎氏の「古語の清濁に就きて」、中島悅次氏の「上代國語法の分化性の一考察」等があり、後書には橋本進吉氏の「上田秋成の靈語通と徳川宗武の假名遣説」、吉田澄夫氏の「難波鉦用語考」等である。

岡本千方太郎氏の國語觀

岡本氏の所論はまづ國語觀の必要をまへおきに述べ、次にその歴史的概觀として、明治以前には自覺のない漢學者型のもと、支那崇拜に激して立つた國學者型の二つを敘し、次に明治以後の改革派・保守派の國語觀を説いたもので、むすびに國語觀・世界觀とを非常な熱と力とを以て書き去つてある。文化一般について廣く深く洞察し、世界觀・文化觀を樹立しなければならぬ、これなくてはたとひ豊富な國語智識の所有者でも、國語學と國文學との關係や國字改良や國語政策、國語教育を論ずる資格はないと述べてゐる。

吉澤義則氏の總主語説覺書  
小林好日氏のお・をの混合説

吉澤氏の「總主語説覺書」は主語と見ると係結法に抵觸するから提示語の一種と見るとの結論を示されたもの。小林氏の「お・を混合」は平安朝の長保頃の佛典の加點から見ても夙くより混同してゐることを考證し、假名遣の誤は單なる誤でなく、發音に關係して生じたものといひ、ア行音のワ行音に轉ずる例は「お」・「を」の混する以前、奈良朝以前にもある。「あ」・「あれ」が「わ」・「われ」となるは一種の添音の現象である。「お」・「を」が「を」に歸してゆくまへに、鎌倉時代頃から「お」・「を」が無差

別に用ゐられてゐた。このことは別に歴史的假字遣の成長(文化二卷五號)にも説いて置いたが、遂に室町時代に入り、「を」の假名がア行・ワ行兩行を支配するに至つたとその變遷を説いてゐる。

岩淵悦太郎  
氏の古語の  
清濁

湯澤氏のは「腹ぬ(い)る」の語史を説いたもの。岩淵氏は時代によりて清濁を異にする語が少くないことを「炊ぐ」・「防ぐ」・「騒ぐ」の如き動詞はもといづれも清音に呼んでゐた證をあげ、次に「すさまじ」・「むつまじ」の如き形容詞ももとは澄みて發音し、「慌し」・「夥し」の如きも平曲では濁らないし、「イチシルシ」・「ケタカシ」・「タソカレ」・「クワタツ」・「ハカリコト」・「コトツテ」の如きも日葡辭書には現在と異り、いづれも皆澄みて讀んだ例などを引き、清濁を論じてある。

品詞未分化  
時代の語法

中島悦次氏のは品詞未分化時代の語法における一試論で、文と語、用言と體言、助辭と助動辭、助辭の分化前の用法を述べてある。

西下經一氏  
の自他融合  
の文

西下經一氏の「自他融合の文」の一篇は平安朝文學の中破格といふべきものを拾つて、今日我々が分析から綜合に向はうとするに對し、當時の人はこれと逆に綜合から分析に向はうとする考へ方の相違がある。自他對立にしないで、一元的に考へる傾向があつた。例へば枕草子の「淑景舎東宮にまゐり給ふほどの事」の段に

うへ近う寄り給ひても、もろとも書かせ奉り給へばいとゞつゝまじげなり

の一節の如きはそれであると、誤謬としないで、當時の人々の文章心理と説かうと企てた。これは一つ

の提案と見るべきものか。

橋本進吉氏  
の論文

橋本氏の論文は靈語通にあげた或る御説は徳川宗武の説であることを、玉函叢説の五十連言の辨と對照してこれを確め、これは秋成のいふ如く傳聞によるのではなく、假名に關する宗武と美樹との問答書があつて、秋成はそれを借りて寫したものを載せたものと考説したもの。

吉田澄夫氏  
の女房詞ゴ  
ザンスの語  
史

吉田澄夫氏の「難波鉦用語考」は延寶の頃に於ける大阪遊里の女房詞「ゴザンス」の語史を旨と述べたもので、これは「ゴザリマス」の變化したものであるが、その中間には京都には「ゴザリンス」といふ語のあつたこと、吉原にはその後「オザンス」、「ザンス」の如き詞が行はれてゐたことは遊士方言に證があるが、大阪にてはこれが「オマス」に株を奪はれたことを説き、その他難波鉦には「シャンス」、「ンス」、「サシャンス」、「サン」も行はれてゐたこと、その他の語にも及んでゐる。

垣内松三氏  
還曆記念日  
本文學論攷

垣内松三教授の還曆記念會より昭和十三年一月日本文學論攷が出版された。中にことばの部には、北島葎江氏の「國文學の特殊表現から態象徴・音象徴について」、川口久雄氏の「平安朝中期に於ける言語教育」、湯澤幸吉郎氏の「假名書論語の言語について」、望月世教氏の「所謂カ行延言に關する諸説の批判」、東條操氏の「關東方言の方言分布」の五篇がある。

東條操  
關東地方の  
方言分布

東條氏のは全關東各地の方言の分布を明かにする目的を以て、單語を中心とし、これに音韻と語法とを加味した質問集を發し、各縣の町村の調査の結果を集め、東の栃木・茨城、西の群馬・埼玉・東京(市

東部・西部・南部方言とその境界線  
假名書論語の語法

及び附近を除く)・神奈川、南の千葉の三區域に分つべく、東北的色彩を帯びた東部方言と、幾分本州・中部方言の色彩を帯びた西部方言との境界線を定めたもので、その方法手続をも委しく述べてある。

湯澤氏のは安田文庫叢刊第一篇に收めた高山寺本假名書論語につきて、假名遣と發音以下六項に分ち、當時早既にち・じ・づ・ずの混合した證例を擧げ、動詞の音便形についても、

子張問曰 を とつて曰はく

終夜不寝以思 を もつておもつしかど

微管仲「吾其被髮左衽矣」を くわんちうなかつせば

富而無驕易 を とつておこることなきこと

百姓足…… を はくせむたんば

其智可及也 を そのちには我もをよんづべし

に於けるが如く、「ハ」四、「ラ」變等の促音便、特にマ行四段に「て」の加はつた時、促音便となる如き奇異の例を拾ひ説明を加へ、「ラ四」・「マ四」・「ナ變」動詞の下に連用形の下につく「ぬ」・「な」・「し」の來る時撥音便となる例を擧げ、動詞の活用の変化する例を引き、助動詞「り」・「ぬ」・「つ」の新しい用例を考へ、助詞「を」・「は」・「や」の新しい用例を摘記してある。鎌倉時代の活用を明かにしてある。

望月世教氏の力行延音

望月氏は岡倉由三郎・岡澤鉦次郎・金澤庄三郎・安藤正次・橘宗利の説を擧げて批判し、力行延音の

「く」形は萬葉集には純體言的のもの、詠嘆的のもの、連用的のもの、副詞的のもの如き用例を擧げ、鹿持雅澄の如くへ行延音を一つに説くの非を指摘してゐる。

北島霞江氏の論文  
音象徴と態象徴

北島氏は一つの單位的の「こと」又はものに命名するに、一面に擬聲によりてこれを表現し、一面には擬態によりてこれを表す。音象徴と態象徴とを説き、言靈派の説を引き、それは一概に廢斥してはならず、またそればかりに據るのは不可であるとし、次に助動詞「つ」・「ぬ」・「たり」の音象徴を説き、新たに音聲の發聲と語義との相關を示さうとした。

高木市之助氏の變字法

その他高木市之助博士は「變字法に就いて」と題し、記紀の歌謡の用字法に關し、例へば景行天皇紀に見えてゐる「みけのさをばし」の歌の

彌能佐鳥麼志

彌能佐鳥麼志

可視的作用  
上田博士追悼記念

の如く、同一句又は類似句の反覆に方り、少數文字をことさらに變へて用ゐるが如きは、文藝上より見て面白味を感じる可視的作用から起つたものとの新説を立てられた。雁鳴かりなげと雁哭かりなきとはちがひがある。射矢遠放の「いや」、國方くにかた可開遊群かまゆぐの「ゆく」は用字の意を見て相互の様子が目にうつるやうなと説いてゐる。その他飛田隆氏の言語形象學の成立についての論文もあるが、今一々説かない。

我が國語國文學界生みの親である上田萬年博士が逝かれてから一周年、昭和十五年十月、國語と國文

學は先生をしのぶ特輯號を出し、その記念とした。國語變遷の概観としては橋本博士の「國語音韻の變遷」、安藤正次氏の「古代語法の變遷」、土井忠生氏の「近古の語法」、湯澤幸吉郎氏の「近世の語法」を始め、その他親しく教を受けられた人、また孫弟子等七人の論文を收め、先生の講義題目や著述目録を擧げてある。

橋本博士の國語の音韻の變遷

古代音八十

我が音韻變化の概則

橋本氏は我が千二百年の音韻の變遷を三期に分ち、音の組織を論じては西洋の音單位と我が音單位と異つてゐて、我にありては彼れの二音を合せたものから成つてゐる。これを音節と稱へ、言語の外形を形づくる基本單位となすべしといひ、第一期即ち奈良朝に於て八十七音乃至八十八音存在してゐたことを立證し、その末期に至りては「と」「の」等の假名に當る二音の別が次第に失はれたことを説き、東語に於てはその混亂が甚だしく、他の音組織も相違のあつたと説き、次に連音上の法則を述べ、藤原朝頃から支那人が音博士として來朝して「音や濁音で始まる音を學んだであらうといひ、また複合する場合に連濁を生ずる所以を説き、二期三期に互り、これが變遷を説き、最後に我が音韻變化の概観につき六則を述べてある。

その中に従來の學者が古代の音韻を單純なものと考え、また古代に於て多くの音韻があつたのが後に至つてその數を減じたと見えるが、それは「い」「ろ」「は」等の一つ／＼の假名であらざられた音韻だけのことで、新たな國語の音は加はつてゐることを述べ、國語音韻の變遷は母音の連音上の性質に由來することが多いことを説き、また唇音退化の傾向を敘してある。母韻の性質に着目せられた説が長呼音を生じ、拗音を生んだ説明となつてゐる。

安藤氏は指定・打消・受身・使役・敬讓・時制・推量・條件・命令の九法につき一々例を擧げて説いてあり、土井・湯澤兩氏のは豊富な例を引いて、その概観を述べてある。

江戸時代中頃に於けるハ音の研究  
だに・さへ  
・すらの語史の研究  
京都言葉の一時期

その他、有坂秀世氏の江戸時代中頃に於ける「ハ」の頭音の研究は支那語學の資料を多く引證してあり、松尾拾氏の「平安初期に於ける格助詞」を、『加納協三郎氏の「院政鎌倉期に於けるダニ・スラ・サへ」、小林好日氏の「助詞」が』の表現的價值、春日政治氏の古點の況字をめぐつては、いづれも細かな語史であつて、統計を擧げたりしてその用例から立説してある。眞下三郎氏の京都言葉の一時期は湯澤氏の近世の語法と共に江戸時代の語法を明かにしたもので、湯澤氏の一般的なるに對し、眞下氏は京都言葉の時期やその特徴を細叙して同じ上方言葉の中にも大阪言葉との差異に觸れてある。

安藤正次

臺北帝大教授安藤正次氏の還曆祝賀記念論文集は昭和十五年二月に發刊された。五十三人の論文を收め、千八百頁に上る巨冊で、中に國語學に關するものが半ばを占めてゐる。その中國語の本質につき特徴を述べたものには佐久間鼎博士の日本語の論理的表現があり、時枝誠記氏の懸詞の語學的考察とその表現美があり、佐久間氏のは日本語が論理的表現に適しないものがあるかのやうに説く意見に對し、我が國語の本質上より否定したもので、適當でないとする論者は主語の省略が頻繁であるとか、主辭と賓

佐久間鼎氏の日本語の論理的表現

## 措定辭

辭とを結びつける繫辭、即ちコプラを缺くとか、主語でないものに助詞「が」を附けるとか、關係代名詞がないので、理論の展開などに際し明確な表現をするに困難である等の非難に對し辯駁してある。歐洲では屢々論理的に見た判斷様式と區別と語法的に考へた文の種類との間に齊合を缺くところがあるに拘らず、一方の考へ方を無理に他方へも押しつける缺點がある。状態概念を賓辭とする物語的判斷や性質概念を賓辭とする品さだめの判斷は存在を示す動詞「ある」や形容詞・形容動詞を述語とする構文によつて表現されるのに對し、對象概念を賓辭とする説明的判斷は、コプラの役目を荷つて登場する措定辭（その典型的なものは「だ」で、「さ」もこれに屬する）を述語として表現されるが爲に、判斷のそれ／＼の論理的特性を區別して考へる爲には却つて有利な立場にあると論じてゐる。ヴァンドリエスの説くごとく、構文の全體的特性から見て名詞文と動詞文とを對立せしめる要はあるが、國語ではコプラなしの名詞文が存在してゐることは實證され得る。のみならず、存在の表現と措定の表現とは日本語ではつきりと分れてゐて、言語的表現が他よりも簡明で適確である長所をもつ。日本語の性状詞は西歐の言語の如くコプラを介在することなく述語として立つ。時間に超越してゐるかぎりはこれで十分である。もし性状の變化に當面してこれを表白する實際生活上の必要があれば、措定辭は存在の動詞と接合して時の表現の可能性をもつてゐる。然るに外國文法にひかされてコプラのないのを不完全とするのは大きな誤と見てゐる。これは尤もなことである。而して一般に判斷をあらはすに方りその主語につける助詞は

「は」及び「も」を格詞と見るべき論

「は」を以てするのが普通なるが、この「は」は格助詞に編入することは宜しくないとの通説に對し、氏はこの助詞を提題の助詞の名目中に收め、「も」は共説に用ゐるに對し、「は」は特説を本領とするが、尙「は」は多くは現前の場を離れたいはゞ非現場に於て提題の役割をつとめると共にその提起した題目について残りなく行きわたることを示す特色を有すと説いて通説を是正してゐる。これは古くは格詞に考へてゐた。それを近世人が更改したのを理由を附して還元したもので、前の措定詞の設定と、もに首肯さるべき新分類といへる。

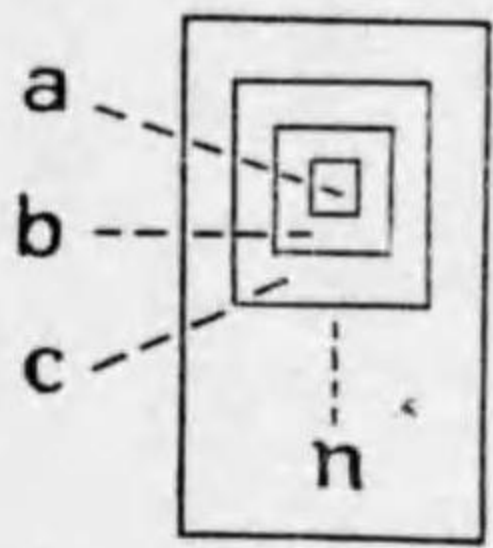
時枝誠記氏の懸詞の語學的考察とその表現美

懸詞を語法上の問題となすべきことを提唱

時枝氏のは論文を二つに分ち、第一部は懸詞の語學的考察で、更にこれを懸詞と二重言語過程、懸詞を含む文の統一性、及び懸詞を成立せしめる國語の構造即ちいれこ（入子）型構造形式の三目に分け、第二部は懸詞による表現美を旋律美・協和美及び滑稽美の三つに分け、麻姑を傭ひて痒きを搔くが如く説き去つてある。懸詞は語法上の問題としない語學家に再讀をすゝめる論文と云つてよい。懸詞は一語多義的な用法でなく、共通音聲によつて喚起せられた二つの概念の間には、明瞭な對比が意識されてゐるといひ、一般の文は詞辭の結合により統一性をもたしめるものであるが、懸詞は音聲の範圍によつて文の統一を保ちつゝ、一方その兼用の故に論理的脈絡を斷ち切らうとするものであるといひ、この二重言語過程によつて聯想的に統一されたものと説き、その原因に溯り、國語に於てかゝる表現技巧が成立する根據をたづね、同音異義語の多く存在するが爲となす通説よりも國語の入子型構造形式に基づく論

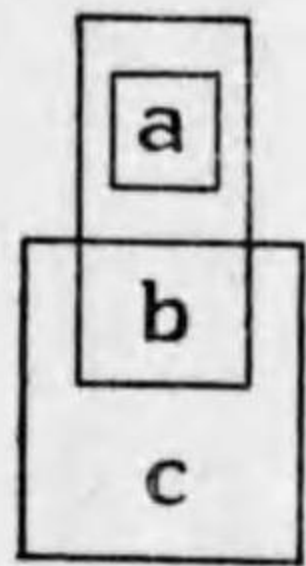
入子型構造形式

單位語認定の困難なる理由



じてゐる。元來國語に於ける單位語の認定の困難な重要な理由は國語がこの入子型構造形式をもつ爲である。入子型といふのは核子となるaと外皮となるnとを兩極としてその間にb c乃至mを包含する。例へば「事ありげ」の如き「げ」は「事あり」を限定修飾語にしてその中に包攝する、「いと寒き夜」の「夜」は「いと寒き」を包攝し、「寒き」は「いと」を包攝し、また「夜」に包攝されるが如きをいふ。

包擁し包擁される二重性



さうして「げ」の如きも一單位と見做してある。國語に於ては語は包擁し、包擁されるといふ二重の性格をもつてゐる。それが變態として、次の圖の如くbはaを包擁するが、cはbの一部分のみを包擁するのが懸詞であつて、入子型の變形であると説いてゐる。この論にて注意すべきことは氏は接尾辭の如きも語の一單位と立てゝあることである。

神田氏の書紀古訓考證、菊澤季生氏の紀の歌謠に見える假名

古い假名文字音韻につきては神田喜一郎氏の「日本書紀古訓攷證」や菊澤季生氏の「日本書紀に見える假字用法に就て」、春日政治氏の「聖語藏御本唐寫阿毗達磨雜集論の古典について」、澤潟久孝博士の「桂本萬葉集の文字の考察」があり、神田氏は書紀の中、登を「スナハチ」、宿を「モトヨリ」、流を「ホドコラン」、同船を「ハシフネ」、屬を「ハケミテ」、擧を「オコナヘ」、別風を「ヨモノカゼ」と訓する所以を明かにし、菊澤氏のは紀の歌謠に見える假名を拾ひ、

自註の假名と本文の假名

A 全卷を通じて行はれるもの……鳥  
 B 書紀の前半にのみ見えるもの……鳩  
 C 書紀の後半にのみ見えるもの……鳴

の三種類に分つことが出来るといひ、その前半と後半との境は卷十三と十四との間にあり、Cの字形がA又はBに對して複雑になつてゐる。これはその記述が必ずしも同一人の手によつて時代順に進んだものでないからであらうといひ、また自註の假字は歌謠表記のものとは必ずしも一致しない。筆者の新たに用ゐた文字も少くない。

- 例へばア(鞅) イ(怡) ウ(羽) エ(哀・埃) オ(淤) カ(迦・河) キ(伎・儀・既) ク(瘞・苦・衢) ケ(霓) コ(五・孤)……

これも註者は別人であつた爲であらうといひ、嘗て永田吉太郎氏が音聲協會々報<sup>36</sup>に發表した日本紀歌謠の假名の研究を一層完成し、春日氏のは故大矢博士の遺された調査資料と國語科學講座に載せられた「片假名の研究」とにより一層精細にこれを論究されたものであらう。

音韻語法に關しては大西雅雄氏の「視覺文法と聽覺文法」の如き新しき見方や、石黒魯平氏の「語頭グライド臆説」と題し、主として音聲學上から「入り渉」を新しく説いたものなどがある。石黒氏はこの頭音グライドを

大西雅雄氏の視覺文法と聽覺文法、石黒魯平氏の語頭のグライド臆説

W + A N + G N + D M + M  
M + B U + W I + S I + Y

の八つの型に分けて説明してゐる。

國語學史に關しては服部正義氏の「國語學史上に於ける鈴木胤」の言語四種論や活語斷續譜の詳しい批評や、酒井秀夫氏の玉緒變格考等があり、小山正氏の「石塚龍磨の萬葉研究」があり、吉田澄夫氏の「句雙紙抄について」があり、語につきは橋本進吉博士の『さふらふ』か『やうらふ』かがある。湯澤幸吉郎氏の「報ふ(ハ四)の用例」があり、形容動詞や數詞につきは吉澤義則博士の「品詞建設に關する二つの答」があり、方言に關しては柳田國男氏の「方言の成立」、東條操氏の「長野縣に於ける土語分布例」、宮良當壯氏の「青森秋田兩縣方言に於けるp音の研究」があり、朝鮮の韻書と辭書に關しては小倉進平博士の「朝鮮に於ける韻書と玉篇との關係」があり、支那書の譯音に關しては淺井惠倫氏の「日本譯語」があり、琉球の數記號に關しては須藤利一氏の「すうちうま」があり、外國人の研究紹介としては神保格氏のガーディーナー氏の文の定義、吉町義雄氏の今より百六十年前に於ける長崎方言の資料を集めたる Isaac Titsingh の *Einige Japanische Woorden* の紹介があり、我が屬領南洋諸島の Palawan 島やそのあたりの Calamianian 語と Agotaya 語の紹介がある。その他にも有益な論文があるが、今一々記しなす。

#### 四十九 日本言語學會及び日本方言學會の設立

日本言語學會

上田博士の傘下に新進の學徒が集つて組織してゐた言語學會が中絶してから、三分の一世紀は音なく過ぎて了つた。近年言語に關する研究は頗る旺盛をきはめ、從來夢想もしなかつた言語研究は、理論の開拓に事實の調査にその歩武を進め、言語哲學・言語心理學・言語美學・言語社會學・言語地理學・比較言語學・音聲學・言語史等新興の部門が開かれて來た。そこで一學派一運動の上に偏らない言語學會設立の必要を人々が認めて來たので、昭和十三年二月發起人會を開き、日本言語學會を組織するに至つた。新村出博士を會長に、小倉博士を副會長に、評議員を定め、五月に入り大會を開き、十四年一月より機關誌言語研究を一年三回發行することゝ定めて、機關誌言語研究を出すこと昨年末までに六號を重ねた。汎く世界の言語研究に亘るので、突厥語に於ける數詞、蒙古文語の起原、朝鮮漢字音の一特質といふが如き近接國語から梵語・西歐語の古今に於ける研究もあるが、國語學に關する論文も少くない。今その二三を拾つてみると、(括弧内の數字は雜誌の號數を示す)

言語研究

文獻學・言語學・語原學

(一) 福島直四郎

日本言語學會及び日本方言學會の設立

- 鴨と哉
- (一) 柳田 國男
- 諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態 (二) 有坂 秀世
- 日本語に及ぼした和蘭語の影響について (三) 齋 藤 静
- 國語學史と上田萬年先生 (四) 金田一京助
- 歐人刊行日本語彙集覺書 (五・六) 吉町 義雄
- 應詞につきて (六) 福井 久藏
- 母韻の性質について (六) 宮内 玉子
- のやうである。この會に於ける講演や機關誌所載の論文が、世界の言語學界にも大きな寄與をなすべきことは期して待つべきである。

日本方言學會

この會に後れること二年、昭和十五年五月新村出・東條操・柳田國男諸氏によりて計畫された日本方言學會は九月に至り成立し、柳田氏を會長に推し、十月に至り創立大會を開き、講演會を開き、會誌を出し、大いにその發展を期しられてゐる。曩に創立した東京方言學會は解消して、こゝに日本方言學會は成立したのである。かゝる有力な學會の誕生は躍進日本の前途に燦たる光を與へることは信じて疑はないところである。

五十 歐米人の日本語研究の一瞥

シルヴァの我が國訪問と語彙と語彙

天主教の我が國に入つてからすでに四百年を経てゐる。その傳道をなすにはまづ言語によらねばならぬ。そのかみ葡萄牙から派遣された教士たちは漂流民などにつきて日本語を學び、語彙は勿論、その語法の大きい異つてゐるものを用意し、その考察するところを次第して、ラテン文法の型に従つて我が日本語法の編述を企てた。その第一人者はリスボン生れのドアルテ・ダ・シルヴァ(Duarte da Silva)といはれてゐる。彼れは天文十九年九月十四日一行と共に種子島に來り、九月七日豊後に着き、印度副王の使命を大友氏に傳へ、一ケ年にして我が國語に通達して同二十二年ゴアに去つた。その間に日本語典(Arte da Lingoa Japon)や日本語彙も作つたと云ふ。

フェルナデスの日本語典

尋いで西班牙人ジョアン・フェルナンデス(Joao Fernandez)は天文十八年八月十五日に鹿兒島に來り、これもその後日本語典(Grammatica da Lingua Japoneza)を著はしたといふが、版にはならなかつた。

アルヴァーレスの日本語典

エマヌエロ・アルヴァーレス(Emmanuelo Alvares)の日本語典は文祿三年天草學林で版になつた。



これはそのラテン文典に日本に来てゐた耶蘇會士の幾人かゝ我が動詞とその變化を翻譯し、多少の説明を加へたものに過ぎないといはれてゐる。

文祿の頃になると、我が國語を知る爲に種々の印刷物を見るに至つた。その中、吉利支丹教義は文祿元年天草學林で上版された。ローマ字でその扉に「日本のゼズスのコンパニヤのスペリオルよりキリシタンに相當の理を互の問答の如く次第を分ち給ふドチリイナ」と書かれてある。これは我が文語をローマ字を以てうつされたもの。同年同所で平家物語も出版された。これは「日本の言葉とイストリヤを習ひ知らんと欲する人の爲に世話に和げたる平家の物語」とある如く、當時の口語を以てうつしたものである。

吉利支丹教義

天草學林出版の平家物語

天草版伊曾保物語  
辭書の刊行

翌二年には同所で伊曾保物語 (Esopono Fabulas) も版にされた。これも當時の口語譯である。同四年には同じく天草で、拉葡日辭書が版になり、慶長七年には日葡辭書 (Vocabulario da Lingua de Japan) が、翌年にはその補遺が長崎基督教學林で上梓、我が古今雅俗の口語三萬を葡語で譯してある。布教の爲にいかに語學研究を奨励したかゞ想はれる。

ロドリゲス  
日本文典及び  
日本文典  
要義

爰に葡國生れのジョアン・ロドリゲス (João Rodoriguez) は、長い間我が國に傳道して日本語に關する深い智識を藏し、アルヴァーレスのラテン文典に倣つて日本文典を組織し、慶長九年長崎學林で日本文典を出した。後長老の命によりその要をつまみ、元和六年更に日本文典要義を撰んで媽港學林で出

版した。世にこれを氏の小文典と呼んでゐる。規範的態度が前書より濃厚にあらはれてゐる。

前書には引例も多く當時の標準口語を主として方言や文語に觸れ、連歌からも例をとつてある。音韻を説くことが詳密であつて、その體系を知る外に當時の言語音韻を知る上に貴い資料を提供してある。

國語科學講座やその他の雜誌に土井忠生博士が詳しくこれを紹介せられた。它山の石といふが、それ以上の價を示してゐる。

その一二例を擧げて見れば、同じ名詞を重ねて複數を示すことがこの頃漸く少なくなつて來た。而して尙使用されるものは高尚な表現であるとか、自稱の代名詞に「私」といふ語が使用され來つたこと、對稱に「あなたち」を用ゐるが、この頃は敬の意味が殆ど失せかゝつてゐたこと、御奉公の如き「御」は自分に附けるのではなく、御身様に對しての奉公の義であることから誤とすべきでないこと、數詞は場合により種々に發音されることも詳述してあり、助動詞の中、敬語の「まらす」は關東や九州地方では「申す」といふとか、「求めまじい」は上品な表現でないとか、方言の「べい」や「あげんす」「せんす」・「のんす」・「やつた」等の方言の地域とか、鼻母音のことゝか、種々の點に於て當時の我が文獻に記録の見えないものをそれゝ細かに系統を立てゝ述べてある。

寛永九年に至り西班牙の宣教師ディダコ・コリヤード (Didaco Collado) が日本文典 (Ars Grammaticae japonicae linguae) をローマで出版した。ロドリゲスに次いで有名な日本語學者で辭書も出

コリヤード  
の文典

大塚高信氏の  
の譯

した。大塚高信氏の昭和九年の翻譯が世に行はれてゐる。ラテン文典やロドリゲスの文典に據つたことは勿論であるが、語法につきては新たに説を立てたところもある。品詞並びに文章法一般に互つて述べである。名詞は「わ」「が」「から」「の」「より」の五つの助辭と連結して格を示すことを述べ、「を」・

關係代名詞  
に代る表現

動詞の法

「に」・「と」を數へてない。關係代名詞は存在しないが、動詞が陳述をなす名詞の前に置かれる時その働きをなすといひ、或はその間に「ところ」の詞を補ふことがあるといひ、動詞の活用は三つの肯定と同数の否定だけであるといひ、その命令形・希求法・肯定法・否定法・否定法・可能法とその接續の助辭を説き、敬の動詞を説き、その他「頼みきつて」の如く「きつて」を動詞のある根に添へると、大きな力を與へ、「生焼く」の如く「生」を頭に置くと、不完全の意を表し、「けれ」を附するときは前を受け、敘述の確認及び終結を示し、「こそ」といふ辭は日本人間には頗る重要なもので、最初は反意的に用ゐたことより係結法にも説き及ぼし、副詞は場所を示すもの、理由に關するもの、問答に屬するもの、時及び否定・肯定・比較・最上級を示すもの、結論を呼び起すものに區別して論じ、連結辭と區分辭とを説き、文章論に於ては莊重體に於ける語の排列より獨立の接續法・讓歩法・不定法・條件法・使役法は直説法或は命令法の前に置かるべきことを説き、主格の無い場合、非人稱動詞には前に主格を必要とすること、必要の動詞には「私は金がある」に於けるが如く、二つの主格を支配するとか、能動々詞には主格の代りに對格を一つ若しくは二つ要求するが、受動々詞はどうか、自動詞には受動々詞の如く對格

を支配するものがあるとか、同一敘述の中に時の動詞が二つあるときはその關係はどうなるとか、多くの形容詞を重ね用ゐるときはどうするとか、引用の「と」の意義だの、存在動詞がこの「と」の意を代辨するとか、「とも」にて文の終るときは強い斷言を示す等示唆に説んだ説が少くない。

オヤングー  
レンの文典  
プレシユス  
のタガラ語  
と日本語と  
の比較

その後西班牙のフライ・メルチオール・オヤングーレン (Fray Melchor Oyanguren) も日本文典 (Arte de la Lengua Japona) を我が元文三年に著した。これはメキシコで出版された。ミカエル・ツ・プレシユス (Michael de Preees) 氏は Tagala 語と日本語との比較を試みたが、史的價値の外はない。

シーボルト

久しく我が邦に來てゐて植物學等の研究に大きな業績を遺し、種々の著書や紀行を書いた獨逸人フキ

日本語要略

リップ・フランツ・フォン・シーボルト (Ph. F. von Siebold) は我が文政九年に日本語要略 (Eptome

Linguae Japonicae) を著した。従來のものは葡萄牙語や西班牙語で書かれたが、この頃に至り和蘭語で誌された。有名な文法學者のホフマンはその門下である。蘭國のカピタンのドンケル・クルテウス (J. H. Donker Curtius) は長崎の出島に於て日本文典例證 (Proeve eener Japansche Sprachkunst) を著し、本國に送つて翻譯官ホフマンの意見を徴し、ライデンに於て出版した。長崎方言を多く取り入れてあるばかりでなく、ホフマンの名著日本文典の前驅をなしたものである。

ホフマン

ホフマン (Hoffmann) は、慶應三年に日本文典 (Japansche Sprachleer or Japanese Grammar)

を著した。この人は來朝しなかつたが、我が留學生西周等より日本語を學びて著作したもので、翌年英

譯され、後にいふアストン及びチェンバレンにも影響を與へた。

ランドレス  
ローニー  
日本語とア  
ジア大陸語  
との近似  
フィン語と  
の類似  
トルコ文法  
との比較  
ボラーの日  
本語のウラ  
ル・アルタイ  
語派に屬  
する證例

譯され、後にいふアストン及びチェンバレンにも影響を與へた。  
フランス人の中には既述の「ロ」氏の小文典や「オ」氏の日本文典の翻譯を出したランドレス (Landress) もあつたが、幕末から明治の初にかけてローニー (Rosny) が出て慶應の初に日本文典や日本語學須知を出版し、その少し前文久の初には日本語とアジア大陸語との近似 (des affinités du Japonaise avec certaines langues) を説いたり、明治七年にはフィン語との類似 (Affinités des langues fino-japonaises) を論じ、明治十八年には日本文法とトルコ文法との比較 (Examen comparé de la grammaire turque et de la grammaire japonaise) を試みたりした。蓋し日本語の語族に關しては塊太利人ボラー (Boller) は安政四年に日本語のウラル・アルタイ語派に屬する證例 (Nachweise dass Japanische zum Ural-alaischen stamme gehört) を書いた(これは後に詳説する)。

アストン  
チェンバレン  
の比較

アストンは明治四年に日本口語小文典を、同五年に日本文語文典 (Grammar of the Japanese Written Language) を著し、その序論に日本語の特質を論じ、チェンバレン語族との比較を試み、

ホフマンの  
日本文典  
は行P音考

明治の直前から明治時代にかけて我が文典に大きな影響を與へたのは獨逸人ホフマンと英人アストン及びチェンバレン氏である。慶應三年に出たホフマンの日本文典には日支兩國語の關係を説き、は行P音考を述べ、動詞の語根をie二種に分ち、未來の語尾「む」は「見」より來たとし、受動態は能動に得るといふ動詞の結合したものと云ふが如き動詞の原形論をも述べてゐる。

琉球朝鮮語  
との近似

日本語の發達・成熟・衰頹の時期を分ち、琉球語・朝鮮語との近似關係を説き、口語は文語と異り、附

日鮮語比較  
研究

動詞「得る」の複合して下二段活を作ること説き、明治十二年には日鮮語比較研究 (A comparative study of the Japanese and Korean language) をアジア協會雜誌に載せた。これは隨分無理もあるが、その文典と共に我が國語學者に影響を與へた。尙氏は明治二十七年には我が擬聲語と語源について論じた。(Japanese onomatopes and the origin of language)

我が擬聲語  
と語源

外人中日本語に通じ種々の著を出したのはチェンバレン氏で、氏は明治十年アジア協會雜誌に枕詞及び掛言葉に關する論文 (On the use of "pillow-words," and plays upon words in Japanese poetry) を出し、枕詞をアッポジションに比較し、翌年には狂言記につきて (On the mediæval colloquial dialect of the comedies) を發表した。東北方言中米澤に關するものは興讓館の英語教師ダラスが夙く明治九年に論述したものもあるが、チェンバレンは明治十四年に會津方言に關する論文 (Notes on the dialect spoken in Ahidzu) を出した。同十六年には日本語學につきて (Notes on Japanese philology) を、十八年には日本文學に於ける各種の文體 (On the various styles used in Japanese literature) 及び日本語の動詞の語源につきて (The so-called root in Japanese verbs) を、十九年には過去分詞につきて (Past participle or gerund) をアジア協會雜誌に發表した。氏はその頃東京帝國大

日本小文典  
大學紀要に  
アイヌ研究  
を出す

學にて博言科を學開講し、日本小文典 (Simplified Grammar of the Japanese Language) を出し、帝國大學紀要としてアイヌ研究より見たる日本言語・神話及び地名の研究 (Language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies) を出し、文部省の依

琉球語は我  
が國語と同  
系である説

囑により邦文日本語典を作りて公刊し、翌年には上田萬年と共に日本古代に於ける語彙を出し、また明治二十一年には日本口語文典 (Handbook of Colloquial Japanese) を出し、二十八年には *Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language* を發表して琉球語と我が國語との同系であることを説いた。この論文も學界に大きな示唆と影響とを與へた。

神代文字に  
ついて

我が神代文字に關しては明治十年にケンペルマン (Kempermann) の紹介を始めとし、同十三年にはメチニコフ (Mechinikoff) もロフミ・アナイチ、秀眞の神代文字に就いて、同十四年にはローニ

國語の系統  
論  
エドキンス  
の支那語系  
統論

の日本神代文字古代刻銘について等の所論が發表されてゐるが、格別なものはない。我が國語の系統に關しては有名な東洋學者・支那語學者のエドキンス (Edkins) は、夙く明治十三年にアジア協會雜誌に漢字の日本音に於ける支那方言の影響を説き、同十五年に載せた古代日本語彙には支那語系統と見做し、二十年には日本語と對岸アジア大陸語との結合を論じ、ラウエル (Lauwell) は日本語と緬甸語との比較 (A comparison of the Japanese and Burmese languages) を試み、パー

パーカー

カー (Parker) は明治二十二年から三年に亘つて古代日支兩國國民及び相互の言語關係を論じた。併しそ

バチラー  
日本の古代  
地名の研究

の多くはいづれも正鶴を失し、問題にならぬくらゐである。米人イムブリー (W. Imbrie) は明治二十二年日英小言語學を著し、版を重ねた。

金田一博士  
の駁論  
ボラーのウ  
ラル・アル  
タイ語説

またアイヌの父と呼ばれ、アイヌ語辭典や語典を著したジョン・バチラー (J. Bachelor) は日本の古代地名の研究 (Helps to the study of ancient place-names in Japan) に於て地名は勿論事々物々アイヌ語オリジンとする説も生じ、これを盲信するものもあつたが、金田一博士はその非を指摘された。先に一言したウイン大學のボラー氏の日本語のウラル・アルタイ語に屬すべき證明は組織立つた所論であつて、語根は皆單母韻から成るといひ、語の構成上助辭の結合のさまが相類似し、名詞と動詞との區別がつきにくく、音韻變化の方則が大體相似てゐて、文章成分の排列が全く同一の點などを數へてゐる。

ウインクレ  
グルンツェ  
ラムステッ  
ト  
アルタイ語  
と日本語と  
の比較  
音韻組織

プロシアの東洋學者ウインクレル (Winkler) は明治二十九年に日本語とアルタイ語とを比較し、グルンツェル (Grunzel) もその前年發表したアルタイ語の比較文法の上に日本語を説いてゐる。フィンランドの初代の駐日公使ラムステット (G. J. Ramstedt) は大正十三年にアジア協會雜誌にアルタイ語と日本語との比較といふ論文を載せ、ウラル語を引き放し、日本語の音節が短くあること、上代日本語は語頭に k t p の音のみで、g d b の音が無かつたので他との比較も困難であるが、音韻組織が單純で、子音の連結が非常に多いことは英獨語とは大いに異つてゐて、昔は他のアルタイ語と共通してゐた

ものがあつたであらうと推測し、また雑誌民族へ「朝鮮及び日本の二單語に就て」の一書を寄せ、南洋語系統を斥け、むしろ朝鮮語及びアルタイ語の表現に一致してゐることを唱へた。

ラベルトン教授 (Van Hinlopen Labberton) は大正十二年メルボルンにて開催の汎太平洋學術會議に「日本及び馬來ポリネシア語間に於ける始源的關係探究序説」を發表し、同十四年には大洋洲言語と日本語 (The oceanic languages and the Nipponese as Brandes of the Nippon-Malay-Polynesian family of speech) をアジア協會々報に載せ、日本語と南洋語との一致を二十餘條に互つて論じた。

またワイマント博士は昭和元年アジア協會々報に日本語及び日本民族の太平洋洲起原説 (The oceanic theory of the origin of the Japanese language and people) を載せたが、これは唯似寄つたものを少し擧げて論斷したに過ぎなす。

我が國語の音聲の研究を志して夙く渡來したのは英人エドワーズ (B. R. Edwards) で、氏は明治三十三年・四年我が各地を廻つて音聲をしらべ、その結果をソルボンヌ大學の學位論文として提出した。また三十七年から四十年に互つて現代日本語の音聲學 (The phonetics of modern Japanese) を發表した。これはロンドンの日本協會の需に應じた講演の速記を録したもので學位論文と變りはなす。

ガウントレット (E. Gauntlett) は明治三十八年に日英音聲學概説 (The elements of Japanese and English phonetics) を出し、マイヘル (E. A. Meyer) は三十九年に日本に於ける樂的語調を、

ポリワノフ (Polivanoff) は東京語の樂的アクセントを論じた。

英國大使館の商務官でロンドンのアジア協會の會長をしてゐたサンソンは、昭和三年に日本歴史文典 (An historical grammar of Japanese) をオックスフォードで出版した。内外先進の説により古典を引き、日本語の綴にはローマ字を用ひ、論語などの引用は漢字を用ひてゐる。(勿論字の間違ひもある) 山田博士の文法論に據つたところが多い。外人の日本語研究の爲に資料を提供するを目的とした。序論にまづ我が書法の起原を論じ、漢字の輸入と書法とを述べ、次に假名の發達を説き、漢字の用法が支那では表記文字として用ゐられ、我が邦にては表意文字として用ゐられてゐることを述べ、次には口語文法の別を説き、第二章以下實名詞・敘述詞・形容詞・動詞・助動詞・助詞・副詞を論じ、末に文章法を述べてゐる。我が動詞は時・態・法を示すには助動詞を加へ、複活用をなすが、氏はそれを接尾辭となし、その種類を表時接尾辭・表態接尾辭・使役接尾辭・否定接尾辭・不變化動詞の接尾辭に分ち、「まし」・「べし」・「たし」・「如し」は助辭的形容詞と呼び、「ある」・「する」の動詞も助動詞に數へ、「行かす」・「行かす」の如き八衢と同じやうに一動詞と見做してゐる。而して接尾辭や活用語尾はもと獨立の詞であつたと説くのは危険であるといつてゐる。また連辭には指定の「なり」の外に「とす」をも加へてゐる。

ワシリエフ 文字論中漢字の取扱ひに關し、露國帝大教授のワシリエフは音符によつて排列した字書を編んだ。そ

の音符は文字の右下線によつて排列した。東洋文獻の根本研究に志し、我が帝國大學に學んだ露國のロゼンベルグ(D. Rosenberg)は大正五年に五段排列漢字典を著し、引出に便しようとして企てた。蓋し新しい試みである。所謂五段排列とは漢字の有する根本の線には

- 第一 → の方向に進む線
- 第二 ↓ の方向に進む線
- 第三 ↘ の方向に進む線
- 第四 ↙ の方向に進む線
- 第五 ↑ の方向に進む線

の五種の方向がある。この方向と五種の變化に洩れる漢字はないから、これに基いて字母表を作り、二十四根本線、線の獨立、結合、交叉、偏、垂、冠の順により二萬字表を示してある。これを康熙字典の二百十四の部首を有し、字畫を一々數へる煩を避けしめようとしたものである。

假名に關しては萬葉集の全譯を試みてゐるピアソン(J. I. Pierson)は昭和四年にアジア協會雜誌に *On the transliteration and transcription of the Japanese Kanji, archaic ancient and modern* を發表し、萬葉用字論として參考に供へようとしたものである。

この他ウエントステルンやノホットの日本書史を繙いてみると、外人の種々の研究が澤山に載つてゐるが、今一々擧げることをしてしない。九大の吉野義雄氏が言語研究に載せられた歐人刊行日本言葉集覺書にも參考とすべきものが多く載つてゐる。今一々説かない。

## 結 語

國語學の發  
生

對譯訓義と  
眞假名

片假名・平  
假名の發生

以上の記述を終へるに方り、今更に回想すれば、我が國語學の胚芽は遠く二千餘年の昔に發生したことは疑もない。然しそのかみの言葉は録音してないから、今は確かにそれと知るよしもない。漢字の渡來は上代人に喜ばれ採用されたが、彼我國語の性質を異にするので、その對譯に心を砕いたことは、吾人の想像以上であつたに違ひない。斯くて漢字の形音を借つた眞假名を始めて工夫し、また音にたよらな  
いで意義をあらはす爲に訓義を案出した。我が漢字史や漢字々典の萌芽はこゝに根ざしたのである。上  
代の金石文字や二紀及び萬葉集はそれらの資料をゆたかに提供する。支那南北の字音や古音は音博士の  
招聘によつて時に是正されたであらうが、次第に我が國の音になつていつたと思はれる。

その後儒家や僧侶が漢籍・佛典を讀む爲に字の一部分を割截して標記に用ゐた片假名は次第に簡易化  
せられ、優美を尙び、國風を示す爲には平假名が創成された。こゝに音標文字の案出は輝かしい平安朝  
文學を産出せしめた。やさしい宮廷の女房詞を澤山に含んでゐる中古の語法は、それらの文學中に夥し

悉曇學と反切

五音相通説

點圖

假名遣問題

往來物に見るが如き新語彙

切字の法

連歌から来た語法

秘傳的學問の殻が破られた

富士谷成章の劃期的な語學説

本居宣長呼應の法則

音韻を明かにし音圖を正す用字法の考察

本居語學の能繼者

く織りこまれてある。東國の方言が京畿の言葉と異なるのは勿論、奈良の都から平安の遷都に於てすら音韻・言語の著しい變化を來した。こゝに音聲學に屬する資料は數多く擧げ得られる。乾葡萄の如き古語と生々しい新語の交錯が見られる。そこに古典解釋學が開かれ、その説明には學問僧によつて將來された悉曇學や音韻反切の智識で言語の轉訛、音韻變化の原理を説かうと企てられた。その爲に五十音圖が成り、五音堅横の相通説などが切りに唱へられた。平安朝はまた歌會や歌合が流行して作歌の爲に言語の選擇、表現の方法がことごとく論究された。爰に歌學の爲の語學が発生した。今日より云へば、表現學の素となるべきものが少くない。儒家並びに僧侶が經典を讀習する爲に家々人々より用ゐ來つた點圖は、言語の分類特にテニハの名目を生じ、次第にその使用法を論ずることが起つた。

武門政治が起り、東方の武士が京都をかためるに及んで、東西言語の混合を來し、音韻・語法共に一層の變化を生じた。こゝに假名遣問題が吟味されて、定家行阿假名文字遣が生じ、僧侶が文學を味讀し創作することが盛んになつて漢語彙が著しく増大し、中古の諸法はくづれそめ、漢語や往來物その他に見るが如き新語彙も増して來た。盲法師によりて語られた平語が一般に嗜まれ、「奉つける」・「詠みてんげる」・「何々ばし」等の如き新しい語法が始まつた。和歌に代つて連歌が盛んになるにつれ、言葉が小刻みに用ゐられ、切字の法が喋々せられ、「ぞかよ」のことゝか、七つの「や」の次第などがことごとく説かれ、語感がきびしくなり、體用を分ち、附け味を論じ、爰に連歌に於ける語學がすばらしい力を

以て擴がつていつて、細かな特殊の語法論が組織された。

然もこれらの語學は一方に於ては學問技藝の世襲と一方に於ては世の戰亂の爲にやうやく傳授・秘授のことが起り、學問は次第に衰頽してしまつた。これが元祿以前の大勢である。

下河邊長流について圓珠庵契沖出づるに及び、從來の學問の專賣的秘傳的の堅い殻を破つて古學研究の道を開き、歴史的假名遣が樹立され、一方に古典解釋學が鬱然として起つて來た。漢學者の圃からは語源學者が出た。新井白石が語源や文字の上に遺した功績は中々すばらしいものである。遂に明和・安永に至り、斯道の天才富士谷成章が出て組織的頭腦を以て歌の上から歴史的文法を創立した。言語があるがまゝに系統を立て、分類した。現代語との相關をも考へた。表現の上をも案じた。茲に國語學のめざましい進展を劃した。時を同じくしや、後までも存へて古典學を大成した本居宣長は歌の上下の呼應法から考へ、上代散文の上にもこれが方則の存在を明かにし、その軌範を立て、また音韻の上にも意をとらぬ、漢字三音考・字音假字用格を著し、音圖の「お」・「を」の所屬を是正し、古事記の用字法を考へ、活語の同系のものを彙類するなど、後の學者に甚大な示唆を與へた。日本精神の昂揚と共に國語學界にすばらしい影響を及ぼした。

この二大人の後をうけてすぐれた語學者が輩出した。文法や音聲學や言語起原論に先鞭をつけた鈴木胤や、語の活用を決定した本居春庭、その門から出て幾多の良著を遺し、本居家の語學を完成した東條



方言辭書 義門、その他玉の緒學者・八衢學者の末流は數へもつくされぬ程で、これに對し、俳諧者流からかたこと、物類稱呼の如き方言辭書も出で、これが言語の大きな枝川となつて後に流れた。雅語・俗語大小いろ／＼の字典も續刊され、その前後には百科字典の如きたぐひも出た。

## 西洋流の文法

江戸幕府の末期は内外の物情洵々たる爲にすべての學藝は振はなかつたが、蘭學の流行より延いて國文典の上に西洋流の分類が試みられるに至つた。當時既成の國語學界からは注目に値しなかつたが、王政維新の後に至りては、英米の文法は蕩々として舊時の文法界を壓倒する形勢を馴致した。

## 國語國文改良問題

明治維新後は夙くより國語國文改良問題が擡頭し、假名・ローマ字・新字論が識者の間に論議され、これと共に漢字節減・言文一致・文體改良問題が叫ばれた。前島密・南部義壽・山田美妙・外山正一・矢野龍溪等の人々がそのトップをきつた人、もしくはその熱心な主張者で、中にも美妙齋は明治十九年に夙くも言文一致を以て創作を試みた。三十七八年の交には上田萬年博士が標準語問題を掲げて國語の改善を獅子吼し、それらの研究調査機關が帝國教育會等に設けられ、國字改良の請願が帝國議會に提出され、終に文部省は國語調査會を設けて委員を定め、調査方針を決定し、着々その進行を見るに至つた。明治の初期に教育令が布かれ、その教科目を定め、小學校に文法科を置かれた爲に幾多の文典が雨後の筍の如くに續出した。それらの中には舊來の型によるもの、洋文典に則つたもの、折衷的なもの様々であつたが、後辭書編纂に與つてゐられた大槻文彦氏が、辭書編纂の爲にもせられた語法指南は出色の

## 文典

もので、後それを改定して廣日本文典となし、明治時代の文法界に範を垂れたことは今も記憶せられる事である。

## 上田博士

文部省は上田博士の主張に基き小學校に於ける假名遣改定問題に着手し、また關根博士の提出した語法私見をとりあげ、文法許容案を出したが、後その改廢されたことは我等の現實に遭遇したことで、それらの問題は今も識者の間に深き關心をもつところ、文部省に於ける國語調査會は多くの學者を集めて研究調査に従事せしめ、その業績の見るべきものが多きに拘らず、後帝國議會でこの機關が廢止せられるに至つたのは惜しみて餘りあることである。その業績は今茲に繰返すことを避けるが、音韻並びに

## 國語調査會

## その事業

方言の調査、口語文典の編纂、假名沿革資料の拾蒐、疑問假名遣の編纂、平家の語法等學會の據とすべきものが少くない。またこれらの事業に従事した委員や補助委員や囑託の人々が、その後斯界の權威となつて斯道に活躍されたことは皆人の知るところである。

廣日本文典の後、草野清民氏が總主説を唱へて學界の議論を惹起し、岡澤鉦次郎氏が日本文典原理の如きむづかしい本を出したり、金澤博士が朝鮮語と比較した、文法論や文法新論を公にし、大槻博士が國語調査會で口語法及び同別記を執筆され、それと前後して松下大三郎・保科孝一・吉岡郷甫その他の人々が口語文典に指を染められたことは、維新前には殆ど顧みられなかつたことで、これにつれ諸國の方言語典や方言辭典が小規模ながら世に現れたことも認めなくてはならぬ。

## 口語法

國語調査會  
に關係の人々

國語調査會に關係をもつた人々の中、大矢透博士が假名や音韻の上に築きあげた金字塔は永く後に傳はるべく、山田孝雄博士が日本文法論を完成して廣日本文典の壘をくつがへし、奈良朝文法史・平安朝文法史・平家物語の語法等我が歴史的文法に大きな寄與をされたことも皆人の知るところ、新村出博士がグリムやイエスベルゼンを紹介され、南蠻の日本語研究を紹介され、東北方言の地位を論じ、足利時代の言語を説かれたことも忘れてはならぬ。保科氏が國語政策に一生を捧げられてゐることも貴いことである。岡倉山三郎以來藤岡勝二博士、新村博士その他の先輩が言語學の智識を以て國語の新しい扱ひ方を行はれたことも世の知るところであらう。民間の學者大島正健氏が音韻や韻鏡等の上に盡されたことも記憶せらるべきであらう。また吉澤義則博士が平古止點や訓法の上に努力をつとげられ、幾多の研究を發表されたことも隠れもない事實である。

大正から昭和にかけて新舊の學者が出て、新しい研究を發表されたことは數へきれない程であらう。

辭書

中に辭書の王ともいふべき上田萬年・松井簡治氏の大日本國語辭典の第一卷の出たのが大正四年で、同八年に第四卷が出、昭和三年に索引一卷が成つた。今修正版には更に八萬語を加へられるといふ。落合直文の原著ことばの泉の芳賀博士によつて改修され、日本大辭典言泉の第一卷が出たのが同十年に始まり、昭和四年で完成した。大槻博士の大言海の出たのは昭和七年から十年に互つてゐる。漢字典も服部小柳兩博士の詳解漢和字典、榮田猛猪氏等の大字典が、昭和五年と六年とに出た。高田忠周の古籀篇

辭書史

百卷の出たのは昭和十一年で、柳田國男氏の山村語彙、産育習俗語彙、送葬習俗語彙、農村語彙、歳時習俗語彙、居住習俗語彙の刊行されたのは昭和七年以降のことである。その他近松語彙等特殊なものも出た。各種専門語の字典の出たのもこの時代を多しとする。辭書史としては上田萬年・橋本進吉氏の古本節用集の研究が傑出したもの、近來岡田希雄の辭書史に關する有益な小論文が雑誌に載せられてゐる。

代表的な文法

大正の末から昭和にかけての文典はその數が多く、國學院大學の松下氏・松尾氏の浩瀚な著作があり、三矢博士の門下安田喜代門氏も新しい文典を出した。山田孝雄博士はこの期に至りては幾多の文法書を出し、多少舊説を改められてゐる。細江逸記氏の相や時の研究は小論文ではあるが、斬新なものがある。佐久間鼎博士の現代日本語の表現と語法など新味に富んだもので、將來いかに進展されてゆくかが矚目に値するものがあらう。

方言の研究

昭和になつて方言の研究の盛んになつたのは東條操・柳田國男兩氏の指導によることが鮮くない。東條氏の方言地圖や方言手帖がこの道に入る人の手引となつたことはいふまでもない。蝸牛考の名を知らぬものは稀であらう。この年方言學會の設立が所々に起り、雑誌方言が百號を重ね、言語誌叢刊の出版を見るに至つたことは、維新前の人々などの夢視しなかつたところであらう。南島方言資料や豊岐方言集や莊内・岩手方言集はいふまでもなく、各地の方言集の月々に上版するものが數へきれない程であり、民俗語彙や方言と方言學の如き新しい著述が續々と出たのは、恐らくは前後無比であつたであらう。方言辭典

## アクセントの調査

の完成があまり多くの年を重ねないで出版されることを期待してゐる。また標準語と方言とが如何なる調和を見るか、或は甲地の方言が乙地の方言とどの程度まで融合すべきか永き眼で見らるべきであらう。アクセントの調査に文部省が手を入れたのは大正になつてからのことで、最初は東京語に於けるアクセントを調べ、型を示したに過ぎなかつたが、熱意ある人々により地方特有のアクセントの調査も進められ、種々の型が明かになつた。この方面に大きな業績を挙げられたのは佐久間博士及び神保格氏を倡首とする。大正十五年に音聲學協會が生れてからアクセントばかりでなく、音聲の研究が科學的の進歩を見るに至つた。協會の雜誌は斯學の日進月歩の状を表示するが如く、その論文集には有益な研究が満載されてゐ、カイモグラフやオッシログラフの實驗を進められたり、内地方言アクセント境界線を決定するに至つた。この實地踏査が生きた言語の實體をつかみ得た結果である。

## 國語學史

國語學史は吉澤博士を始め、山田博士・伊藤慎吾・重松信弘・時枝誠記等諸氏の著作が出版されてゐる。その中には古に重きを置いたものがあり、近代・現代に力を注いだものもある。従來の如き著書の解題や傳記を省きて學の展開を旨とする傾向が従來とちがつて一般に濃厚になつて來た。言語意識の如何によつて取材内容に相當のひらきが生じて來る。山田博士の如く國民の自覺によつてなされたものを取るべきは勿論であるが、外人の日本語研究は國語學研究と切りはなさねばならぬかは一つの問題であると思ふ。佗山の石として取扱ひたい氣持は誰もあると思ふ。また大正・昭和時代の研究はまだ未成品

## 一部門の研究史

のもの、なま／＼しいもの、自家のうへ、知友の著作に忌憚なき批評や宣傳は憚られるが、近いところに觸れないときは日進月歩の狀勢が分らないと思ふ。而して思想的背景から眺めるもの、文化史の一部として考へるもの様々ある。併し啓蒙的には解題を加へる必要もある。國語學史の一部門を深く掘りさげて一篇となしたのも、近來漸くあらはれるに至つた。大矢博士の音圖並手習歌詞考の如き、山田博士の五十音の歴史の如き、木枝増一氏の假名遣研究史の如き、上田・橋本兩博士の節用集の研究の如き（字書史として）國語學史の中に編入さるべきであらう。

## 國語史

國語學の内容を基礎づける國語史の研究はまづ起るべきであるが、國語學史に後れて世にあらはれた。これは一見不可思議のやうであるが、事實がこれを物語つてゐる。その時代的區分は明治諸家によつて立説されたが、一々具體的に實例を摘出し、その變遷を示すことは容易でない。近來は一語につき、例へば「デス」の語史であるとか、「おます」の語史といふ如く、一語の用例を資料を拾つてその變化をあとづけることが漸次起つて來た。比類が多く出で、それを統合し、その變化・發展を考へてこそ完全なる國語史は出來るのである。安藤正次氏が、國語の形成・發達・混亂・分化によりて時代を分つたのも一の見方である。

## 國語史概説

吉澤博士が昭和六年に出された國語史概説はこの類の最初のものである。近年講座が盛んに行はれるに及び、國語史を幾つかの時期に分ち、數人の學者に分擔せしめることが盛んになつた。一人で各時代

に互る研究が容易でないから、深く掘りさげた研究には數人の力を用ゐ、これを総合せしめる用意が見える。尤も序説は別に説く人はあるが、各人の研究をまとめるまでにまだ至つてない。

國語科學講座の國語史

明治書院の國語科學講座に上古・中古・近古・近世の四期に分ち、一期に二人づつ擔當者を定めて執筆を請ひたる如きこの適例である。中に土井博士の近古篇はロドリゲスの日本文典の如き偏強な資料を十分に利用し、室町時代の言語現象を詳述したるはその人を得たるもの。佐藤鶴吉氏の近世篇はその資料を研究する方をとつてあるが如く、諸家の研究態度が窺はれる。

刀江書院の國語史

刀江書院の發行した國語史は十二卷の豫告であつたが、金田一博士の國語系統篇、安藤氏の國語史序説、佐伯梅友氏の上古篇、湯澤氏の近世篇、山田博士の文字篇、柳田氏の新語篇の六篇を出したきりで、他の六篇は今に刊行されない。すぐれた研究もあるが、未完のまゝであつて、系統的に見ることが出来ない。今後大いに開拓せらるべきであらう。

ラヂオ放送

國語學の普及の爲にラヂオ放送を開始されたのは昭代の慶事であるが、國民をして倦まないやうにするには講師と題目との選擇が大切である。創始の頃はともかく、歳月をかさねた今日は特にその感が深いことは論ずるまでもない。このことばの講座は大衆的であると同時に新味を帯び、その研究は中核に觸れなくてはならない。これに對し飽くまでも學術的を要とする語學講座は近年はいよ／＼盛んになつたのは喜ばしいことで、明治書院の國語科學講座には各種の問題を包括してあり、その數は七十二に上

フランコ・スイス學派の紹介

つてゐるが、新しい題目には深みの乏しいものも混つてゐる。その新たなものゝ中に、フランコ・スイス學派の眞を傳へたものは大いに若い學徒に喜ばれたことはいふまでもなく、表現學・解釋學・言語地理學・文體論等がその前後より大いに盛んになつた。この方面に力を注いだ、小林英夫・垣内松三・石山脩平・城戸幡太郎諸氏の努力が認められる。その前後に成つた日本言語學會・日本方言學會等が日を追うて盛んになり、指導的に立たうとするのは喜ばしいことである。吾人は新進氣鋭の學徒が研鑽倦まず熄まず、我が國語學の完成を圖り、萬邦無比の國家の隆昌を冀ふと共に斯學をして外國に範を垂れるに至らむことを希望して止まざるものである。

國語學史 尾

年  
表

聖代年號事項

推古天皇

佛像光背銘

十二年 憲法十七條を撰せらる

孝德天皇 大化元年 僧旻國博士となる

天武天皇 十年 境部石積等新字四十四卷を選す

文武天皇 大寶元年 大學國學の制備はる

元明天皇 和銅五年 古事記成る

六年 風土記撰進の命下る

元正天皇 養老四年 日本書紀撰成る

楊氏漢語抄成る、日本紀私記一

卷成る

聖武天皇 天平五年 出雲風土記成る

光仁天皇 寶龜三年 藤原濱成の歌經標式成る

桓武天皇 延暦十六年 續日本紀成る

平城天皇 大同二年 古語拾遺成る

嵯峨天皇 弘仁四年 多人長の日本紀私記成る

十一年 空海の文筆眼心抄成る

十三年 日本靈異記成る

聖代年號事項

淳和天皇 天長五年 空海蘇我種智院を開く

仁明天皇 承和二年 空海寂す

陽成天皇 元慶二年 菅野高平日本紀私記を撰ぶ

宇多天皇 寛平四年 菅原是善(東宮切韻の著者)薨す

醍醐天皇 延喜四年 藤原春海日本紀私記を撰す

宇多天皇 寛平四年 新撰字鏡草稿成る

醍醐天皇 延喜四年 藤原春海日本紀私記を撰す

宇多天皇 寛平四年 新撰字鏡草稿成る

醍醐天皇 延喜四年 藤原春海日本紀私記を撰す

朱雀天皇 承平年間 本草和名成る

冷泉天皇 康保四年 源順の倭名類聚抄成る

圓融天皇 永觀元年 源順卒す

一條天皇 長徳四年 藤原佐理薨す

後一條天皇 長和元年 類聚名義抄成る

堀河天皇 嘉承元年 類聚名義抄成る

堀河天皇 寛治七年 反音作法成る

鳥羽天皇 元永元年 藤原仲實卒す

長慶天皇 文中三年 二條良基の知連抄成る

弘和元年 仙源抄成る

後龜山天皇 元中五年 二條良基薨す

後小松天皇 應永十三年 言塵集成る

後花園天皇 文安元年 下學集成る

三年 壘囊抄成る

五年 朝山梵灯庵寂す

享徳三年 撮壤集成る

後土御門天皇 文明七年 心敬寂す

十三年 一條兼良薨す

十五年 手爾葉大概抄之抄成る

後柏原天皇 文龜二年 飯尾宗祇寂す

永正元年 姉小路基綱薨す

後奈良天皇 天文六年 三條西實隆薨す

十七年 運歩色葉集成る

正親町天皇 弘治三年 宗碩の藻汐草成る

元龜元年 姉小路家天仁葉抄成る

天正八年 無言抄成る

年表

長慶天皇 文中元年 連歌新式撰成る

二十二年 神代卷口訣成る

正平四年 連理秘抄成る

興國二年 麒麟抄成る

後村上天皇 正安三年 釋日本紀成る

後二條天皇 興國二年 麒麟抄成る

龜山天皇 文永六年 仙覺萬葉集註を著す

後嵯峨天皇 寛元三年 字鏡集成る

四條天皇 仁治二年 藤原定家薨す

後堀河天皇 嘉祿元年 慈圓寂す

順德天皇 八雲御抄御撰

元久元年 藤原俊成薨す

土御門天皇 建仁二年 千五百番歌合

後鳥羽天皇 建久元年 上覺の和歌色葉抄成る

文治元年 袖中抄、顯昭の古今集註成る

高倉天皇 治承元年 藤原清輔卒す

六條天皇 永萬元年 藤原範兼卒す

近衛天皇 康治元年 藤原基俊卒す

鳥羽天皇 保安元年 藤原敦隆卒す

聖代 年 號 事 項

後陽成天皇 天正十九年 簡用集塚本刊

後西天皇 萬治三年 源氏目安刊

慶長二年 匠材抄跋

寛文二年 松永貞徳の和句解刊

三年 岷江入楚成る

五年 詞林三知抄刊

七年 紹巴歿す

六年 類字假名遣刊

十三年 立圃のはなひ草成る

十年 枕詞燭明抄刊

後水尾天皇 元和八年 春樹顯秘抄成る

延寶元年 和歌吳竹集刊

寛永二年 八雲御抄刊

三年 湖月抄刊

てには大概抄刊

四年 一步刊、假名字例刊

後光明天皇 正保二年 松江重頼の毛吹草成る

天和二年 永井如瓶の遷言便蒙抄刊

慶安元年 隨葉集刊

貞享二年 源偶篇成る

同 鱸重常の春雨抄刊

本朝世諺俗談(松浦黙)刊

三年 安原貞室の片言成る

東山天皇 四年 萬葉代匠記成る

四年 俳諧御傘刊

元祿元年 鷺頭節用集刊

承應二年 松永貞徳歿す

二年 萬葉代匠記精撰本成る

後西天皇 明暦二年 願空世話盡刊

四年 初心假名遣刊

三年 林道春歿す

五年 荻の葉成る

東山天皇 元祿七年 貝原好古の和爾雅刊

中御門天皇 正徳四年 貝原益軒歿す

八年 和字正濫抄刊、蜺縮涼鼓集刊、世話重寶記刊

享保二年 新井白石の東雅成る

九年 倭字古今通例全書刊

四年 東音譜成る

十年 倭字正濫通妨抄成る、瀆のまさご刊、萬葉假名遣刊

櫻町天皇 元文元年 荷田春滿歿す、有賀長伯歿す、南留別志刊

十一年 倭字正濫要略成る、梨本集成る

桃園天皇 延享四年 磨光韻鏡刊

十二年 和字解成る

寛延元年 日本書紀通證成る

十三年 和歌八重垣刊、梨本集刊、日本釋名刊

寶曆二年 和訓類林成る、三音正譌刊

十四年 契沖寂す、諺草刊

四年 和字大觀抄刊、和歌童翫抄刊

十五年 北村季吟歿す

七年 冠辭考刊

三年 戸田茂睡歿す、持明院基輔の能書假名遣刊

十年 手爾乎波義憤抄成る

五年 和歌禁忌遠慮の辨成る、書言字考刊、佐々井祐清の假名遣拾芥抄刊

後櫻町天皇 明和元年 以呂波問辨刊

五年 和歌禁忌遠慮の辨成る、書言字考刊、佐々井祐清の假名遣拾芥抄刊

二年 古言梯刊

五年 和歌禁忌遠慮の辨成る、書言字考刊、佐々井祐清の假名遣拾芥抄刊

四年 挿頭抄刊

六年 語意考成る、賀茂眞淵歿す、古今集助辭分類刊

六年 語意考成る、賀茂眞淵歿す、古今集助辭分類刊

中御門天皇 正徳年間 同文通考成る

聖代 年 號 事 項

後桃園天皇 明和七年 てには綱引綱刊、楫取魚彦の續冠辭考成る

八年 天爾遠波紐鏡刊

安永元年 以呂波音訓傳刊

二年 脚結小鈴成る、深澤薫の類聚冠辭略解成る

三年 上田秋成の也哉抄

四年 物類稱呼刊、字音假字用格成る、服部高保の續冠辭考成る

五年 谷川士清歿す

七年 脚結抄刊、神國神字辨論刊、駁以呂波問辨成る

八年 富士谷成章歿す、詞玉緒成る

天明二年 御國詞活用抄成る、楫取魚彦歿す

三年 異名分類抄刊

光格天皇

八年 富士谷成章歿す、詞玉緒成る

天明二年 御國詞活用抄成る、楫取魚彦歿す

三年 異名分類抄刊

聖代 年 號 事 項

光格天皇 天明五年 漢字三音考刊

七年 呵刈霞成る

八年 蘭學楷梯刊、正誤假名遣刊

寛政元年 和歌虛詞考刊

四年 詞葉新雅刊、新和歌政名草刊

五年 歌袋刊、和歌梯刊

六年 哆南辨乃夷則成る、古言清濁考成る(享和元年刊)

八年 冠辭考續紹成る、振分髮刊

九年 靈語通假字篇刊

十年 古事記傳成る、假名遣奥山路成る

十二年 地名字音轉用例成る

享和元年 雅語音聲考成る(文化十三年刊) 本居宣長歿す、假字大意抄成る

二年 雅俗辨成る

光格天皇 享和三年 讀雅俗辨、雅俗再辨成る、活語斷續譜成る

文化二年 北村久備の巨爾遠波考成る

三年 詞八衢成る(文化五年刊)

四年 俳諧天爾波抄刊、雅言假字格刊

六年 上田秋成歿す、萬葉集見安補正刊

八年 村田春海歿す

十年 古今假字つかひ刊

十一年 雅言假字格拾遺刊、訂正蘭語九品集刊、六格前篇刊

十二年 漢吳音圖成る、指出の磯成る(天保十四年刊)、和蘭語法解刊

十三年 蘭學凡成る

高田與清の仙覺字類及び竟宴菅家字類成る

仁孝天皇 文政元年 萬葉用字格刊

二年 神字日文傳成る、古史徵開題記

仁孝天皇

文政三年 刊、てには倭文學環成る

四年 磯の洲崎成る(天保十四年刊) 増補古言梯標註成る、楯保己一歿す、雅語譯解刊

五年 據字造語抄、萬葉枕詞解成る

六年 富士谷御杖歿す、友鏡刊

七年 言語四種論刊、清水濱臣歿す

八年 皇國之言靈成る

九年 詞玉橋成る(弘化三年改訂)、歌詞考成る

十年 箋註倭名類聚抄成る、於乎輕重義成る

十一年 詞通路成る、本居春庭歿す、文教溫故刊

十二年 古言衣延辨成る、詞玉襪刊、太田全齋歿す

天保元年 嬉遊笑覽成る、語學九品九格總括圖式刊、石川雅望歿す

仁孝天皇 文政元年 萬葉用字格刊

二年 神字日文傳成る、古史徵開題記

仁孝天皇

文政三年 刊、てには倭文學環成る

四年 磯の洲崎成る(天保十四年刊) 増補古言梯標註成る、楯保己一歿す、雅語譯解刊



年表

聖代 年 號 事 項

- 仁孝天皇 天保二年 語學新書成る(天保四年刊)
- 山彦册子成る(天保十年刊)
- 四年 和語説略圖刊、應聲考成る、山口葉成る、言靈のしるべ成る
- 五年 備字例成る(天保十三年刊)、言靈或問成る
- 六年 男信成る(天保十三年刊)、助辭本義一覽(天保九年刊)、雅言成法成る、狩谷校齋歿す
- 七年 山口葉刊、言葉の正みち成る
- 八年 鈴木服歿す、古言譯通成る
- 九年 詞の緒環刊、鏡鏡成る、奥木文字考成る
- 十年 古史本辭經成る(嘉永三年刊)
- 十一年 活語指南成る(天保十五年刊)、關政方の聲調篇成る、神字小考成る

聖代

聖代 年 號 事 項

- 仁孝天皇 天保十三年 活語雜話刊
- 活語餘論成る
- 十四年 東條義門歿す、平田篤胤歿す、玉緒末分橋成る(弘化二年刊)
- 弘化元年 稜威道別成る、活語四等辨成る
- 二年 語學捷徑刊
- 三年 伴信友歿す、活語初の葉刊
- 四年 稜威言別成る、石上枕辭例、三代枕辭例成る、てには係辭辨成る(嘉永二年刊)、増補古言標標註刊
- 嘉永元年 嘉定刪定神代文字考成る
- 二年 橘守部歿す、さよしぐれ刊
- 三年 假字本末刊
- 四年 楢の婦手刊、高橋殘夢歿す、古言譯解刊、祝詞講義成る、詞玉緒増補成る(嘉永七年刊)

孝明天皇 安政三年 足代弘訓歿す

四年 活語自他捷覽刊、活用雅俗風調辨成る、辭格考抄本刊

五年 萬葉集古義成る(明治十年刊)、鹿持雅澄歿す

六年 鶴峰戊申歿す

萬延元年 字音假字用例刊

文久二年 音韻考證成る、古學傳考成る

三年 鈴木重胤歿す、増補雅言集覽成る

四年 中島廣足歿す

明治天皇 慶應三年 言靈妙用論成る

明治元年三月 五ヶ條の御誓文(十四日)

七月 江戸を東京と改む(十七日)

八月 即位の大典(二十七日)

九月 明治と改元(八日)

玉緒繕添刊、開成所復興、獨人ホフマンの日本文法發行

明治天皇 明治二年二月 新聞紙發行を許す

四月 柳川春三、布告文に假名文を用ふることを建白す

五月 南部義壽の修國辭論

明治三年 福羽美靜寫西周の日本語典稿本

明治四年七月 文部省設置

十一月 文部省編語彙の部、語彙別記發行、アストンの簡易日本口語法(英文)發行

明治五年五月 東京に師範學校を設く

六月 ホイットネー・國語一變の不可を論ず

七月 田中義廉外三名に新撰字書を編せしむ

八月 學制頒布の詔(三日)

九月 アストンの日本文語法發行  
明治六年二月 前島密・まいにちひらがなしん

年表

年表

明治天皇

- 八月 福澤諭吉の文字の教發行
- 十月 黒川眞頼の皇國文典初歩發行
- 馬場辰猪の英文初等日本語典發行
- 明治七年七月 田中義廉の小學日本文典發行
- 明六雜誌にローマ字論出る
- 明治八年七月 佐藤誠實の語學指南成る
- 九月 渡邊修次郎・國文を簡易にすべきことを建議す
- 明治九年三月 中根淑の日本文典發行
- 六月 文部省のローマ字の掛圖發行
- 明治十年六月 堀秀成の日本語學楷範發行
- 八月 里見義の雅俗文典刊
- 十月 東京横濱電話試験
- 明治十二年一月 榊原芳野の文藝類纂刊
- 七月 物集高見の初等日本文典發行

明治天皇

- 那珂通世・千葉師範學校にて發音的新假名を授く
- 明治十三年十月 學士會院日本文法書編纂の議を定む、佐藤誠實の語學指南、アストンの日鮮兩語比較研究(英文)發行
- 明治十三年一月 大矢透の語格指南發行
- 二月 加藤弘之・博言學研究の爲留學生を出す事を建議
- 明治十四年五月 文部省語彙い・りの部發行
- 二月 文部省語彙活語指掌發行
- 十二月 東京學士會院雜誌に假名説を載す
- 明治十五年四月 東洋學藝雜誌・矢田部良吉の羅馬字説
- 明治十六年五月 かなのみちびき發行
- 七月 官報創刊、かなのくわい成る

明治天皇

- 九月 同會かなのままび發行
- 明治七年七月 かなのしるべ發行
- 八月 三宅米吉・同誌に言文一致の必要を説く
- 十月 神田孝平・學士會院雜誌に言文一致論
- 十二月 外山正一・ローマ字會創立、谷千生の言語構造式發行
- 明治六年一月 平岩愼保・六合雜誌に神代文字を國字とする説
- 六月 羅馬字會より雜誌發行
- 八月 田中館愛橘・理學協會雜誌に羅馬字意見
- 九月 近藤眞琴のことばのその發行
- 十二月 權田直助の語學自在成る
- 明治九年一月 井上馨・羅馬字會にて文法編纂の急務を説く
- 三月 矢野文雄の日本文體文字新論發行

明治天皇

- 行、物集高見の言文一致發行
- 七月 かなのしんぶん・かなのてかゞみと改題
- 九月 帝國大學に博言學科を置く、チェンバレン教授
- 十一月 末松謙澄の日本文章論發行
- 大槻文彦譯の言語篇(ウイリアム・チェンバーのエンサイクロペディア)
- 明治二十年四月 チェンバレンの日本小文典文部省發行、濱田健次郎の言語哲學發行
- 五月 中村正直・漢字不可廢論を説く
- 七月 二葉亭の浮雲發行
- 十月 權田直助の國文句讀考發行
- 十二月 假名學校開校
- 大學紀要にチェンバレン・アイヌ研究より見たる日本語・神

年表

年表

明治天皇

明治三二年三月 話及び地名の研究、谷千生のチ  
エンバレン日本小文典批評

四月 かなぶんのかきかた發行

四月 末松謙澄・かなのくわい大會に  
於て言文一致の著作をすむ

五月 始めて學位を授與(七日)

八月 山田美妙の夏木立發行

九月 西村茂樹・學士會院雜誌に言文  
一致は文學に益なしと説く、三

十一月 言語取調所創立、チエンバレン  
の日本口語文典(英文)發行

明治三三年四月 落合直澄の言文一致(皇典講究  
所講演)

五月 大槻文彦の言海發行

六月 パチエラーのアイヌ英和三對辭  
書發行

聖代年表

明治天皇

明治三三年五月 大日本教育會の總會に小學校に  
國語の一科を設ける議提出

十月 言語取調所より言語を發行、坪  
井九馬三・普通文に漢字を排斥  
すべき説を載せる

十月 教育勅語下る(三十日)、言語取  
調所書籍を帝大に寄附

十一月 日本訓盲點字に石川倉次案採用

十二月 岡倉由三郎の日本語學一般發行  
東京横濱間電話交換(二十六日)  
ランゲの日本口語教科書(獨文)  
發行

明治三四年一月 井上哲次郎・ローマ字採用の必  
要を説く

三月 かなのでかどみ五七號・カタカ  
ナトヒラカナ

六月 佐藤寛・國文學に國語會話

明治天皇

明治三五年七月 山田美妙の日本大辭書發行

九月 イビー氏のローマ字鳩翁道話發  
行

明治三六年七月 第一高等學校にて國語講習會を  
開く、井上文部大臣講話(梧陰  
存稿)、小中村清矩同上(陽春廬  
雜考)

十月 福地源一郎・國民之友に明治今  
日の文章

十一月 加藤弘之の小學教育改良論

明治三七年四月 井上哲次郎の文字と教育との關  
係(東洋學藝雜誌第百五十一號  
以下)

六月 物集高見の日本大辭林、伊澤修  
二・大日本教育會總會にて加藤  
氏の小學教育改良論を駁す(同  
會誌第百五十二號)

八月 清國に對し宣戰の詔勅下る

年表

五三

明治天皇

十一月 國學院雜誌創刊

十二月 上田萬年・太陽に歐洲諸國に於  
ける綴字改良論を説く

明治三九年一月 帝國文學創刊、同誌上田萬年の  
標準について

四月 日清媾和、三宅雄二郎・太陽に  
漢字利導説、早稻田文學(第八  
十六號) 關根正直の語法私見、  
坪内雄藏・同誌に新國文法論新  
國字論

五月 上田萬年・大學通俗講談會で新  
國字論、木村鷹太郎の日本文字  
改良案(教育時論)

六月 臺灣總督府開廳、元良勇次郎の  
縦讀横讀の利害に就て(東洋學  
藝雜誌)、岡倉由三郎の新國字  
論(帝國文學)

十月 岡田正美の漢字全廢論(帝文)

五三

年表

聖代年號事項

明治天皇 十二月 上田萬年の國語のため發行、菅沼岩藏の文字文章改良論

チェンバレンの琉球語の語彙と語法の研究(英文)

明治三十九年三月 峯原平一郎・岡田正美の説を駁す(國學院雜誌)、尾崎紅葉の多情多恨(讀賣)

四月 藤岡勝二の言語學上文學の價值(帝國文學)

五月 岡田正美の自然假名遣法(國院)

十一月 上田萬年・國家教育社で初等教育に於ける國語教授に就いて

明治三十九年二月 大槻文彦の廣日本文典同別記刊

上田萬年の國語會議の必要(教育時論)

七月 金澤庄三郎のことばのいのち  
九月 帝大に國語研究室を設く

天四

聖代年號事項

明治天皇 十一月 佐村八郎の國書解題第一分冊

十二月 小中村清矩の陽春廣雜考發行

幸田露伴の水上語彙

明治三十九年三月 保科孝一の方言に就て(帝文)、保科孝一譯の言語發達論

三月 白鳥鴻幹の新國字論發行

四月 朝比奈知泉の今後の文字文章(東京日々)

五月 東大に言語學會を創立

七月 落合直文のことばの泉發行、加藤・上田・井上・嘉納・矢田部氏等國字改良會を創立

八月 上田萬年・金澤庄三郎の言語學(セイヌの原著)

九月 井上哲次郎の國字改良論(太陽)

十月より 樋口勘治郎・小西信八・湯本武比古の教育童話九冊

明治天皇

大島正健の支那古韻考・音韻漫錄

明治三十九年二月 衆議院國語調查會設立の豫算を否決、三矢重松の口語の研究(國學院雜誌)

三月 大矢透の國語溯源發行、宮田修の通俗言語學發行

四月 重野安繹の常用漢字文(學士會院)

五月 原敬の漢字減少論(大阪毎日)

六月 高橋順次郎の國語改良論に就て

八月 保科孝一の國語學小史

十月 帝國教育會に國字改良部を設く

十二月 中井錦城の「國字改良意見」

チェンバレンの文字のしるべ(英文)發行

明治三十九年一月 辻帝國教育會長より國字國語國文の改良に關する請願書を各大

年表

明治天皇

臣並びに兩院議長に提出、同國字改良部より國字改良請願書を同様

二月 議會は調査會設立を可決、言語學雜誌發行、井上圓了の漢字不可廢論發行、保科孝一の言語學大意發行

三月 帝國教育會内に言文一致會設立

四月 文部省前島密外六氏に國語調査委員を囑託

五月 自治館國語改良異見發行、北清事變起る

八月 石川倉次の明盲共通字(教育公報)

文部省小學校令施行規則改正、假名の字體を定め、字音假名遣を發音的とし漢字を二千字に制限す(二十一日)

五五

聖代年表

明治天皇

- 十月 獨人ゲルストベルガーの日本新國字案(教育公報)、國字改良部總會、假名の字體及び假名遣決定
- 十一月 文部省・羅馬字會書方取調委員の調査報告を發表
- 國字改良部幹事會ローマ字書方を議す、フロレンツ及びチェンバレン・文部省のローマ字綴方を評す(言語學雜誌)、小澤政胤の國學家略傳
- 國字改良部總會、ローマ字綴方決定
- 三月 言文一致會の建議兩院を通過、赤堀又次郎の國語學叢書
- 四月 松下大三郎の日本俗語文典發行
- 六月 國字改良部は漢字節減の標準を定む

明治三十四年二月

明治天皇

- 三月 國語調査會設立、同七月調査事項を決定公示
- 四月 赤堀又次郎の國語學書目解題發行
- 五月 言文一致論集發行、大槻文彦の假名と羅馬字との優劣論(教育界)
- 六月 花岡安見の國語學研究史發行
- 七月 堀江秀雄の國字改良論集發行
- 八月 新村出の方言の調べ方に關する注意(言語學誌)
- 十月 大槻文彦の復軒雜纂發行、保科孝一の言語學講話
- 十一月 小森徳三の新案自由假名(日本新聞)(十六日)
- 明治三十五年一月 高橋作衛の漢文獎勵論(教育時論)、足立荒人の駁論(讀賣)
- 五月 小林法樹の新國字手引草發行

年表

聖代年表

明治天皇

- 七月 山田美妙の言文一致文例發行
- 八月 草野清民の日本文典發行、石川倉次のはなしことばのきそく發行、八杉貞利のストロング氏言語史綱要
- 十月 言文一致會の言文一致女子普通文發行
- 十一月 岡倉由三郎の發音學講話發行
- 新村出譯のイエスベルゼン言語進歩論抄發行、古事類苑(文學部)
- 明治三十五年一月 排言文一致會の大日本と文章的國民發行、日英同盟(三十一日)
- 二月 岡倉由三郎の應用言語學十回講話發行
- 文部省・外國地名人名稱へ方書方取調委員任命

明治三十五年一月

明治天皇

- 六月 (速記文字) 上田萬年の國語のため(第二)發行、増田乙四郎の大日本改良文字發行(片假名改造)、保科孝一の言語發達論發行
- 九月 國語調査會の音韻並びに口語法取調に關する事項印刷
- 十月 國學院・國文論集發行
- 十一月 高橋龍雄の國定讀本發音辭典發行
- 明治三十七年二月 露國に對し宣戰詔勅下る(十日)
- 四月 國定小學讀本新刊、國字國語改良論說年表發行(國語調査會)、片假名平假名讀ミ書キノ難易ニ關スル實驗報告(同)
- 五月 前田默鳳の東亞新字發行
- 八月 大川茂雄・南茂樹の國學者傳記集成發行、宮澤甚三郎の日本語

五六七

年表

聖代年號事項

明治天皇

明治天皇

聖代年號事項

五六

語學發行

十月 國語調査會の方言採集簿發行

十一月 澤柳政太郎の國民の一大問題

(教育界)

明治三十九年三月

音韻調査報告書、音韻分布圖發行、文部省・許容文法案假名遣

改定案(文部省諮問)、假名遣改

定反對の國語會起る、假名遣對

照語彙(國語調査會發表)、伊澤

修二の反對(日本)

八月 上田萬年の普通教育の危機發行

日露媾和

九月 文部省・假名遣改定案ニ對スル

世論調査報告發行、林麴臣の日

本語原の研究發行、福井久藏の

新日本文典刊

十月 ローマ字ひろめ會創立、ローマ

字創刊

十二月 文部省・文法上許容スベキ事項

告示假名遣諮問ニ對スル答申書

高橋龍雄の應用言語學、白鳥庫

吉の國語と外國語との比較研究

(史學雜誌)、金澤庄三郎・後藤

朝太郎共譯の言語學(マクス・

ミユラー原著)

明治三十九年二月 吉岡郷甫の日本口語法發行

二月 早大に文藝協會創立、田丸卓郎

の日本式羅馬字(東洋學藝雜誌)

三月 文部省の句讀法案、分別書キ方

案、藤岡勝二の羅馬字手引發行

十一月 文部省の新舊假名遣對照語彙發

表、田丸卓郎の羅馬字文の書き

方發行

十二月 口語法調査報告書發行

明治天皇

明治三十九年

宮崎道三郎の日韓國語の比較研

究(史學雜誌)

明治四十年一月

西園寺首相ローマ字ひろめ會々

頭就任、岡澤鉦次郎の新式日本

文典原理發行、小學にローマ字

を課する建議案衆議案可決

二月 口語法分布圖發行(三月送假名

法發行)、藤岡勝二の國語研究

法發行、臺灣總督府の日臺大辭

典發行

四月 金澤庄三郎の辭林發行

五月 金澤庄三郎・後藤朝太郎共譯の

言語學

八月 ローマ字ひろめ會のローマ字主

張百ヶ條發行

十月 福井久藏の日本文法史發行、國

語調査會の送假名法

十二月 保科孝一の國語學史發行

明治天皇

明治四十年

安藤正次の國語學上に於ける歐

米人の貢獻(國學院雜誌)、井上

頼閑外二氏の難訓辭典、金澤庄

三郎の日韓國語の文字組織と梵語

の影響

明治四十二年一月

上田萬年の國語學叢話發行、高

橋龍雄の世界文字學發行

四月 國語調査會の音韻並びに口語法

取調に關する事項印刷

五月 同漢字要覽發行、文部省内に臨

時假名遣調査委員會設置

七月 我無線電信初開通(七月)

九月 山田孝雄の日本文法論發行、文

部省・三十三年八月二十一日文

部省改めの三表削除

十月 戊申詔書下る(十三日)

十月より 田丸卓郎編の日本式ローマ字發

行

年表

五六

年表

聖代年號事項

明治天皇

十二月 三矢重松の高等日本文法發行

長連恒の國語學史發行、藤岡勝

二の日本語の位置(國學院雜誌)

明治三十一年一月 文部省・臨時假名遣調査委員會

議事速記録發表

三月 假名遣及假名字體沿革資料發行

六月 龜田次郎の國語學概論發行、後

藤朝太郎の漢字音の系統

七月 志田義秀・佐伯常麿の日本類語

大辭典發行

十一月 新村出の東國方言沿革考發表

安達常正の漢字の研究、高田忠

周の漢字詳解

明治三十一年一月 金澤庄三郎の日韓兩國語同系論

發行

三月 藤井乙男の諺語辭典發行

五月 保科孝一の國語學精義發行

五七〇

聖代年號事項

明治天皇

六月 โรม字新聞創刊

八月 日韓併合(二十二日)

十二月 金澤庄三郎の國語の研究發行

明治三十一年一月 保科孝一の日本口語法發行

二月 村岡典嗣の本居宣長

四月 國語調査會・口語體書簡文に關

する調査報告發行

五月 文部省内に文藝委員會設置

九月 漢城外國語學校の國語の發音及

び語法に關する調査發表、大矢

透の假名源流考發行、伊澤修二

の國定小學讀本正讀法發行

十二月 伊波普猷の古琉球發行、谷川士

清先生傳(表彰會)

大正天皇 大正元年八月 大矢透の假名の研究

九月 國語調査會の疑問假名遣前編

十二月 金澤庄三郎の日本文法新論

大正天皇 大正元年

松見半十郎の義門法師、金田一

京助の新言語學(スイート)、大

島正健の韻鏡音韻考、同譯切要

略、同改訂韻鏡、疑問假名遣前

編(國語調査會本居清造編)

十一月 福井久藏の大正新文典

大正二年五月 山田孝雄の奈良朝文法史

六月 山田孝雄の平安朝文法史、金澤

庄三郎の言語の研究と古代文化

(獨譯を附す)、國語調査會廢止

九月 日下部重太郎の現代の口語

大正三年九月 池田四郎次郎の故事熟語大辭典

十月 大島正健の國語の組織

十二月 田丸卓郎のローマ字國字論

山田孝雄の平家物語々法、大矢

透の周代古音考同附圖、同周代

古韻考韻徵、村岡典嗣の本居宣

年表

大正天皇 大正四年五月 上田萬年の日本外來語辭典

八月 新村出の南蠻記

十月 上田萬年・松井簡治の大日本國

語辭典第一卷(同八年第四卷、

昭和六年索引一卷、昭和十四年

修訂版第一卷)

滿田新造の支那音韻斷、本居清

造擔當國語調査會編疑問假名遣

後編

大正五年三月 松村任三の語原類解

四月 保科孝一の國語教育創刊

六月 上田萬年の國語學十講

十二月 國語調査會の口語法、服部宇之

吉・小柳司氣太の詳解漢和文字

典、上田萬年・橋本進吉の古本

節用集の研究、岡井慎吾の漢字

の形音義

大正六年三月 榮田猛猪等の大字典

五七一

大正天皇

- 四月 國語調査會の口語法別記
- 十一月 佐久間鼎の國語のアクセント  
大槻文彦擔任口語法別記、大島正健の動詞の組織
- 大正七年八月 大矢透の音圖及手習詞歌考
- 大正八年五月 澤柳政太郎・田中末廣・長田新等の兒童語彙の研究
- 七月 文部省の「アクセントとは何か」
- 十二月 文部省の漢字整理案
- 佐久間鼎の國語の發音とアクセント、折口信夫の萬葉集辭典、橋本進吉の假名の字源に就いて  
(明治聖德記念學會紀要)
- 大正九年二月 朝鮮總督府の朝鮮語字典
- 十一月 山下芳太郎の國字改良論
- 十二月 小倉進平の國語及朝鮮語のため  
金澤庄三郎の言語に映したる原

大正天皇

- 大正十年五月 文部省の口語文用例集
- 十月 新村出の言語學概説
- 大正七年一月 落合直文著芳賀矢一改修の日本大辭典言泉(昭和四年十二月に至り六卷完了)
- 二月 山田孝雄の日本文法講義
- 四月 前田太郎の外來語の研究
- 五月 垣内松三の國語の力
- 八月 川副嘉一郎の日本ローマ字史
- 十一月 神保格の言語學概論、山田孝雄の日本口語法講義
- 岡田希雄の類聚名義抄に就いて  
(藝文第十三卷十四卷)、小林好日の標準語法精説
- 大正十二年五月 臨時國語調査會・常用漢字と常用略字發表

大正天皇

- 八月 東條操の南島方言資料
- 十一月 小倉進平の國語及朝鮮語發音概説
- 大正十三年三月 安藤正次の古代國語の研究、同  
小さい國語學
- 四月 國語と國文學發刊
- 六月 山田孝雄の敬語法の研究
- 九月 吉澤義則の中等新國文典
- 十二月 松下大三郎の標準日本文法、臨時國語調査會・假名遣改良案發表、大矢透の韻鏡考、吉澤義則の中等新國文典別記、大島正健の韻鏡新解二、同韻鏡と廣韻
- 大正十四年三月 東京中央放送局假放送(廿二日)
- 七月 本放送(十二日)
- 九月 伊波普猷のおもろ草紙、新村出の南蠻廣記、神保格の國語音聲學

大正天皇

- 大正十一年十一月 新村出の續南蠻廣記、加茂延一の國字問題十講、金澤庄三郎の廣辭林、三矢重松の古事記に於ける特殊なる訓法
- 十一月 北里闌の日本古代語音韻組織考
- 五月 後藤朝太郎の文字の沿革、宮良當壯編の採訪南島語彙編、臨時國語調査會の外國語の寫し方、同當字廢棄例
- 六月 臨時國語調査會の漢字整理案例
- 井口丑二の日本語原
- 七月 松岡靜雄の日本語學
- 八月 時枝誠記の國語國字の將來
- 九月 音聲學協會創立、三浦圭三の綜合日本文法講話
- 十月 大島正健の韻鏡新解、尾上八郎の平安朝時代の草假名の研究、京都帝大・國語國文の研究創刊



年表

聖代

年

號

事

項

今上天皇

十二月

明治文化研究會編の日本耶蘇會  
刊行書志

昭和二年一月

カナモジカイ編の國語國字問題  
文庫創刊

二月

小林好日の國語國文法要義

三月

東條操の大日本方言地圖・國語  
の方言區劃

四月

吉澤義則の國語國文の研究、安  
藤正次の言語學概論

五月

時枝誠記の國語學關係刊行書目  
(國語と國文學)

六月

金子健二の言語哲學と言語共和  
國

七月

市河三喜・神保格譯のイエス  
ルゼン言語の本質發達及起原、  
久松潜一の契沖傳(全集卷九)

九月

坪井九馬三の我が國語國民の曙

今上天皇

十一月

・歴史物語  
佐伯功介のローマ字綴り方につ  
いて、日下部重太郎の標準ロー  
マ字綴り方解説

十二月

岡倉先生記念論文集、湯澤幸吉  
郎の天草本平家物語の語法

昭和四年二月

鬼澤福次郎の概説 國語學史の研  
究

三月

安藤正次の國語學概説、石黒魯  
平の國語教育の基礎としての言  
語學

四月

後藤藏四郎の出雲方言、佐久間  
鼎の日本音聲學、金澤庄三郎の  
日韓同祖論

六月

小林英夫譯のバイイ生活表現の  
言語學、木枝増一の高等國文法  
講義、神谷敏雄の國語學總説

七月

山田孝雄の假名遣の歴史

年表

五七四

聖代

年

號

事

項

今上天皇

九月

音聲學協會の音聲の研究第一輯

十月

福井久藏の枕詞の研究と釋義

十二月

新村出の東方言語史叢考

昭和三年一月

橋本進吉の天草版吉利支丹教義  
の研究、小林英夫譯のソツシユ  
ール言語學原論

三月

安田喜代門の國語法概説、柳田  
國男の方言の小研究(民族第三  
卷第三號以下連載)、高田忠周  
の漢字の起原と支那古代の文化

四月

松尾捨治郎の國文法論纂、五十  
嵐力の國語の愛護

五月

伊藤愼吾の近世國語學史

六月

川上嘉市の國字問題並其歸趨

十月

芳賀矢一の日本文獻學・文法論

今上天皇

昭和四年九月

村林孫四郎の鹿兒島語法

十月

大島正健の支那古韻史、田中館  
愛橋・パーマ・菊澤季生等のロ  
ーマ字綴方の進化

十一月

福永恭助の國字國語問題、大田  
榮太郎・方言集覽稿(長野・群馬)

十二月

湯淺幸吉郎の室町時代の言語研  
究、安田喜代門の高等國語法、  
上田萬年の日本語を國際語たらし  
めたい(雜誌小學校)、岡澤鉦  
治の新言語學 人間の進化と言語  
の進化

昭和五年一月

田中館愛橋の日本式のローマ字  
綴りに就き主なる内外諸名士の  
意見

二月

松下大三郎の標準日本口語法

三月

神保格の國語讀本の發音とアク  
セント(以下六冊續刊)

五七五

聖代年號事項

今上天皇 昭和五年四月 北里蘭の日本語の根本的研究、

岡澤鉦治の言語學的日本文典

五月 上田萬年・樋口慶千代の近松語

彙、金田一京助の言語學、松村

任三の語原類解、橋正一の方言

と土俗創刊

六月 小林好日の國語學概論

七月 東條操の南島方言資料、柳田國

男の蝸牛考、安井洋の日本語原

の心理的解釋、三矢重松の莊内

語及語釋、山口麻太郎の壹岐島

方言集

十一月 文部省・ローマ字調査會を設置、

新村出の東亞語源志、同琅玕記、

宮崎靜二の眞に祖國を愛する同

胞に訴ふ(ローマ字綴方)、宮良

當壯の八重山語彙

聖代年號事項

今上天皇 昭和六年一月 金田一京助のユーカラの研究

二月 吉澤義則の國語史概説

五月 放送局の放送講演集(九州方言)

大島正健の國語の語根とその分

類

六月 菊澤季生の國字問題の研究、森

本治吉の萬葉集の研究(岩波講

座日本文學)

七月 大西雅雄の國語の發音

九月 吉澤義則の國語説鈴、石黒魯平

の言語觀史論、山田孝雄の日本

文法要論(岩波講座日本文學)、

湯澤幸吉郎の解説日本文法、春

陽堂・方言(雜誌)創刊

十月 安藤正次の國語學通考、大島正

健の漢音吳音の研究、木枝増一

の高等口語法講義、武内義雄の

今上天皇

支那文字學(同)

十一月 吉澤義則の點本目錄(岩波講座

日本文學)

昭和七年一月 佐久間鼎の一般音聲學

二月 細江逸記の動詞時制の研究

三月 小倉進平の仙臺方言音韻考、金

田一京助の國語音韻論、荒垣秀

雄の北飛驒の方言、大田榮太郎

の滋賀縣方言集、安藤正次の國

語音聲學(岩波講座日本文學)

四月 三矢重松の文法論と國語學

六月 日下部重太郎の現代國語精説、

岡澤鉦治の言語學的日本文典、

佐々木博士還曆記念會の日本文

學論叢、東條操の方言研究の概

觀(岩波講座日本文學)

七月 山田孝雄の國語政策の根本問題

八月 平岡伴一の國字國語問題文獻書

年表

今上天皇

目、時枝誠記の國語學史(岩波

講座日本文學)、大矢透の隋唐

音圖

九月 藤村作編日本文學大辭典上卷、

三矢重松の國語の新研究、神保

格・常深千里の國語發音アクセ

ント辭典、厚生閣の教育國語教

育臨時號

十月 大槻文彦の大言海(第一卷)、荒

川惣兵衛等外來語研究(雜誌)創

刊、橋本進吉の國語學概論上、

下は八年一月(岩波講座)

十一月 土井忠生の明治國語學書目解説

(岩波講座日本文學)、佐藤仁之

助の古語の新研究(尊稱篇)、金

澤庄三郎の新羅の片假字、丸山

林平の國語教育學

十二月 金澤博士還曆記念・東洋語學の

年表

今上天皇

研究、大矢透の古言衣延辨證補  
(音聲の研究第五號)、柳田國男  
の山村語彙、松井博士古稀記念  
論文集

昭和八年一月 山形縣方言集

二月 土居光知の基礎日本語

四月 春日政治の假名發達史序説(岩  
波講座日本文學)、新村出の言  
語學概論(同)、日本文學社・國  
文大講座を出す

五月 明治書院・國語科學講座を出す、  
保科孝一の國家語の問題につい  
て(東文理大紀要)、佐久間鼎の  
國語音聲學概説(國語科學講座)

後藤朝太郎の文字學概説(同)、  
福井久藏の<sup>新</sup>高等國文典  
六月 木枝増一の假名遣研究史

年表

今上天皇

七月 小林淳男の言語學史(國語科學  
講座)、菊澤季生の國語位相論  
(同)、安田喜代門の中古の國語  
(同)、岡井慎吾の漢字の研究  
(同)

八月 服部四郎のアクセントと方言  
(國語科學講座)、神保格の言語  
學概説(同)、龜田次郎の國語書  
目解題(同)

九月 奥里將建の國語史の方言的研究

十月 日下部重太郎の續現代國語思想  
長井眞琴の梵語と漢語(國語科  
學講座)、佐藤鶴吉の近世解釋  
學、相良守次の國語韻律論(同)

十一月 淺野信の巷間の言語省察、細江  
逸記の動詞綴法の研究、永田吉  
太郎の方言資料抄、田邊壽利の

今上天皇

言語社會學(國語科學講座)、金  
田一京助のアイヌ語と國語(同)  
吉町義雄の九州の方言、伊波普  
猷の琉球の方言

十二月 岡井慎吾の玉篇の研究、放送局  
のことばの講座、神保格・大西  
雅雄の國語標準發音圖表同圖解  
説、林麴臣の日本語原學、生田  
耕一の萬葉集難語難訓攷、松尾  
捨治郎の國文法概論、小林好日  
の日本文法史(國語科學講座)、  
木枝増一の文語法精説(同)、東  
條操の方言學概説(同)

昭和九年一月 小倉進平の朝鮮語と日本語(國  
語科學講座)、湯澤幸吉郎の口語  
法精説(同)

二月 福井久藏の増訂日本文法史、新  
井無二郎の且爾乎波の原理的研

年表

年表

今上天皇

究、内田武志の静岡方言集、橋  
正一・東條操の本州東部の方言  
(國語科學講座)

四月 小林英夫の文法の原理(國語科  
學講座)、松本金壽の兒童語の表  
現(同)、土井忠生の近古の國語  
(同)、泉井久之助のメイエ史的  
言語學に於ける比較の方法

六月 瀬戸重次郎の岐阜縣方言集

七月 大西雅雄の音聲學史(國語科學  
講座)、柳田國男の新語論(同)

九月 高橋龍雄の國語學原論

十月 安藤正次の國語學總説(國語科  
學講座)、三宅武郎の音聲口語  
法、吉澤義則の平假名の研究、岡  
倉由三郎の國語陶冶とラヂオ、  
城戸幡太郎の表現學序説(同)、  
岡井慎吾の日本漢字學史

年表

聖代年號事項

今上天皇 昭和九年七月 伊波普猷の南島方言史攷、田丸

卓郎のローマ字文の研究

十二月 重松信弘の國語學史(國語科學

講座)、橋本進吉の國語法要説、

山田孝雄の漢文訓讀と國文法、

東條操の本邦西部の方言(同)、

千葉勉の標準日本語發音構圖の

解説、小林英夫譯のアンリ・フ

レエの誤用の文法、平凡社大辭

典(十一年完成)、保科孝一の新

體國語學史、吉澤義則の高等國

文法、高田忠周の日本漢字正解

昭和十年二月 橋本進吉の新文典別記、新村出

の辭苑、新井無二郎の動詞の起

原的研究

三月 新村出の國語系統論(國語科學

講座)、安藤正次の國語發達史

聖代年號事項

今上天皇

四月 序説、江實の言語地理學(同)

小林英夫の言語學方法論考

五月 放送局のことばの講座、山田孝

雄の漢文の訓讀によりて傳へら

れたる語法

六月 小林英夫譯のカル、・フォスレ

ル言語美學

七月 橋本進吉の國語學研究法(雄山

閣講座)

八月 高松義雄譯のエルネスト・リチ

ヤード・エドワーズの日本語の

音聲學的研究

十月 柳田國男の産育習俗語彙、城戸

幡太郎の國語表現學、波多野完

治の文章心理學

十一月 興水實の言語哲學

十二月 藤岡博士功績記念言語學論文集

今上天皇

十二月

菊澤季生の國語音韻論、吉澤義

則の國語學史概説(岩波講座日

本文學)

昭和十一年 一月 濱名寛祐の東大古族言語史鑑

二月 山田正紀の江戸言葉の研究

四月 菊澤季生の新興國語學序説、大

西雅雄の教育音聲學

五月 橋正一の方言學概論、山田孝雄

の日本文法學講義、佐久間鼎の

現代日本語の表現と語法

六月 北條忠雄の九州方言語法考序説

七月 奥里將建の國語史の方言的研究

九月 松尾捨次郎の國語法論攷、湯澤

幸吉郎の徳川時代の言語研究、

杉村廣太郎の和歌山方言集、眞

山青果の仙臺方言考、内田武志

の鹿角方言集、小林好日の日本

年表

今上天皇

十月 徳田淨の國語法査説

十一月 高知女子師範學校の土佐方言の

研究、國語と國文學特輯號・國

文法の根本問題と文法教授、安

藤正次の國語史序説、佐伯梅友

の國語史上古篇、白鳥庫吉の日

本語の系統(東洋思潮講座)、高

田忠周の古籀篇百卷

昭和十二年 二月 木枝増一の高等國文法新講(品

詞篇)

三月 小林英夫の言語學通論、湯澤幸

吉郎の國語史近世篇、岩村魚返

譯の支那言語學概説

四月 三ヶ尻浩の大分縣方言の研究

五月 東條操の國語學新講、橋正一の

方言讀本

七月 泉井久之助・高谷信一譯のトム

ゼン言語學、柳田國男の農村語